

研究紀要

第 29・30 号

(目 次)

〈論 文〉

慶長三年越前国太閤検地帳の基礎的研究 … 則 竹 雄 一 … 1

このクラスに〈他者〉はいますか
— 教室という場で文学を通してできること … 柿 原 和 宏 … 29

〈教育実践報告〉

シェイクスピアをシェイクする
— TOKYO、ソウル、そしてベネチア …… 柳 本 博 … 43

〈論 文〉

The Extent to Which Extensive Reading Helps … Jun Harada … (1)

The Glorious Days in Tara May Have Gone with the Wind
But — Review of the Masterpiece in Terms of Humanity,
History and Pedagogy … Jun Harada … (13)

Thou and Ye in *Emaré* … Ruiko Kawabe … (29)

国際観光都市における観光イメージと移民 — ニースを事例に … 青 木 輝 憲 … (39)

〈翻 訳〉

曹旅寧「玉門花海所出《晋律注》初步研究」 … 兼 田 信一郎 … (57)

2015

獨協中学校・高等学校

慶長三年越前国太閤検地帳の基礎的研究

則竹 雄一

はじめに

検地帳分析は以前の近世社会経済史研究の花形であったといつてよい。いうまでもなく安良城盛昭の太閤検地論にはじまる社会構成史的研究^{〔1〕}、封建制社会での小農経営（小農自立）の成立過程を明らかにするための史料として検地帳を分析を行ってきた。検地帳からの階層構成表の作成は、当然の作業として行われてきたと言える。しかし、社会経済史研究の沈静化とともに検地帳の階層構成的分析もほとんど行われなくなってきた。また、一時期、戦国大名検地論争ともいわれた戦国大名検地をめぐる研究^{〔2〕}も、いわゆる検地増分の評価に視点が収斂することで袋小路に至り研究は衰退化した。いずれにしても検地帳の史料論的な研究は不十分のままに、検地政策そのものへの批判と太閤検地の面期性を否定的に捉える見解の登場が史料論的研究さえも行わないまま過ぎてきた現状にある^{〔3〕}。近年では、史料論研究で古典的な研究として注目すべき速水融^{〔4〕}氏の一連の研究がまとめられ、長宗我部地検帳の分析を中心とする平井上総氏の研究^{〔5〕}、徳川検地や三河太閤検地の分析を中心とする谷口央氏の著作が発表され再び検地

帳研究への新しい視角が登場しつつある。これらの研究を踏まえながら検地帳研究の共通視角を確立するための若干の整理と行うのが本稿の目的である。太閤検地の定義については深入りしない。検地帳分析の結果として定義そのものもありうる。むしろ当面は、豊臣期検地帳、近世初期検地帳というように広く定義して全体像を明らかにしていく必要がある。この時期の検地実施の全国的な掌握は、周知の速水佐恵子^{〔7〕}氏の整理があり、さらに改定として平井上総^{〔8〕}氏の試みも提起されている。

1、太閤検地帳の調査記載項目（整理試案）

前述のように検地帳の史料論的な研究はほとんどなく、まずは検地帳にはどのような記載項目があるのかを整理しておこう^{〔9〕}【表1】。石高や斗代、ないしは分付け記載など特定の項目に注目するのではなく、全体の記載事項を確認した上で検地帳の史料論的な意味を明らかにする必要があるのである。ただ、ここでの整理は一試論であり、また検地の実施年代や地域によっても記載項目の相違は見られるこ

【表1】 太閤検地帳記載項目一覧

- 0、外形項目
 - 0-1 帳簿の大きさ 縦×横
 - 0-2 紙数 (何丁・何紙で構成されているか)
 - 0-3 原本・写本・副本
 - 0-4 一ヶ村での冊数 (田帳、畠帳、屋敷帳の構成)
- 1、「表紙」記載項目
 - 1-1 原表紙か、後補表紙か
 - 1-2 検地帳タイトル (～検地帳、～検地水帳、～縄打帳、～縄打水帳など)
 - 1-3 年月日
 - 1-4 人名
 - 1-4-1 検地奉行人名 花押・印
 - 1-4-2 検地役人名
 - 1-4-3 案内者名
 - 1-5 紙数 (墨付)
 - 1-6 割印
 - 1-7 冊数 (何冊内～)
- 2、「本紙＝一筆書き」記載項目
 - 2-1 記載形式
 - 2-1-1 田畠屋敷混合記載
 - 2-1-2 田畠混合・屋敷別記載
 - 2-1-3 田畠屋敷別記載
 - 2-1-4 実施日順記載 (月日毎に記載)
 - 2-2 一筆書き項目
 - 2-2-1 地名 (小字)
 - 2-2-2 品位＝等級 (上・中・下・下々)
 - 2-2-3 地目 (田・畠・屋敷・麻畠・桑畠・山畠・塩田など)
 - 2-2-4 面積
 - 2-2-4-1 上中下
 - 2-2-4-2 畝歩
 - 2-2-5 縦横間数
 - 2-2-6 分米
 - 2-2-7 名請人名
 - 2-2-8 名請人肩書き
 - 2-2-8-1 地名
 - 2-2-8-2 主作
 - 2-2-8-3 ～分～人名
 - 2-2-8-4 役職
 - 2-2-9 注記 (当荒、永荒、桑木、楮木など)
 - 2-3 割印
- 3、「奥書」記載項目
 - 3-1 品位地目別集計 (寄部分)
 - 3-1-1 品位地目 (田・畠・屋敷)
 - 3-1-2 合計面積
 - 3-1-3 合計分米
 - 3-1-4 斗代
 - 3-2 総面積合計
 - 3-3 総分米合計 (=村高)
 - 3-4 小物成
 - 3-4 年月日
 - 3-5 役人・奉行人名 (花押・印)
 - 3-6 紙数 (墨付)
 - 3-6 その他 (写本の由来など、越前場合は「検地条々」がある)

とから、検地帳の全国的な集成と共に変化する可能性が高いと言えるので、ひとつの目安としてとりあえず本稿での慶長三年越前国太閤検地帳を具体的な事例の中心として提示することにした。それぞれ若干のコメントを付けておこう。

外形項目は、記載内容ではなく帳簿全体の物的なデータである。多くの資料集でも史料の大きさを記載したものはほとんどない。検地帳に限らず古文書資料は、文字史料としてのみ対象としてであり、物的資料としての視点はほとんどないことから、検地帳の分析のための必要である。とりわけ帳簿の大きさのデータは、検地帳は原本かどうかの真偽を確定する材料となるのではないだろうか。おそらく一地域での検地の際に使用される紙は同一であると推定されることから（これは確定されたことでなく、むしろデータの集積で証明されるべき事柄であろう）、必要項目であろう。この点で考えれば紙質なども必要項目を見られるが、産地などを判定するのは難しいかもしれない。

検地帳が原本か、写本なのかを判定するのは難しい。写本が多いような感じがするが、判定の難しさは、検地帳作成の過程に原因があることは見逃せない¹⁰。検地結果は検地帳に集約されて、原則的にふたつの帳簿が作成されて、村々に渡された検地帳が地方史料として残され現在の我々が目にするのできている。地方史料として残っている検地帳の作成パターンは、複数存在する。①検地役人が同時に同じ検地帳を二冊作成して、ひとつを領主がひとつを村方が所持する、②検地役人が作成した検地帳を写して、もつを領主が、写したものを村方が所持する、③検地役人が作成した検地帳を写して、もつを

村方が、写したものを領主が所持する、④何らかの理由で検地帳原本が写され、写本として残された、場合がある。②・③の場合は写されたものであっても、いわゆる写本とは言えず、④の写本とは区別されるべきであろう。つまり、②③は写す行為がおこなわれても原本と同一と見なしてよく、④と区別するために「正本」に対する「副本」と表現すべきであろう。ただ、②③の副本と④の写本が具体的にどのような明確に区別されるのかは今後の課題であろう。

実際の記載内容項目は、大きく①「表紙」②「本紙」③「奥書」に分けることができるであろう。

「表紙」記載項目としては、典型的には①検地実施村落名を記して検地帳のタイトル、②年月日、③検地関係人名が挙げられる。①としては国名+郡名（または広域地名）+村名+帳簿名で構成される。近世村の起源を示す史料となり、当時の地域区分を示す重要な史料となる。広域地名には郡名（近世的郡名と相違する場合もある）ではなく、荘郷など中世的な名称も残ることもある。また、検地帳の名称にも注意する必要がある。①「検地帳」「御検地水帳」「縄打水帳」「御縄打水帳」「御縄帳」などその表現は多様性があり、大きな差があるように思われるが、厳密には帳簿名の相違がどのようなことに由来するものであるかはよくわかっていない。②年月日は、検地帳作成日なのか、検地終了日なのか、検地帳下付日なのか厳密には確定されていない。③検地関係人名としては、検地担当の奉行人名が記載されることが多いと思われるが、下役（検地奉行の家臣）の役人名や村方の案内者名なども記載される。奉行人名には奉行の花押や印がある場合は原本かどうかの真偽材料となる。その他の記載項目としては、「墨付」と

して検地帳の紙数を記載する場合がある。表紙にない場合は奥書部分に記載がある。奉行人の割印とともに紙数の記載は検地帳の改竄防止であろう。

次に「本紙Ⅱ一筆書き」記載である。検地の対象は大きく田・畠・屋敷でありそれぞれの記載順序はいくつかの形式が存在する。

大きくは混合記載と別記載であろう。混合記載は田畠屋敷が混在して記載される場合であり、字地名がまとまっていることが多いことから、検地の実施順に記録された野帳Ⅱメモがそのまま検地帳となったものであろう。屋敷を除いて田畠は混合記載の場合がある。この場合も屋敷を記載順の例外としたよりも、集村であれば屋敷地がひとつのまとまりを示すことから屋敷が田畠と混合記載にならないことを示しているに過ぎないのではないだろうか。田畑屋敷別記載は文字通り、田地、次に畠地、最後に屋敷地と整理した形式で記載する場合である。それぞれの地目が一定度のまとまりをもって地理的な景観を形成することは一般的であると思われるが、3つの地目が整然と区画されることは想定し難いので、検地実施のメモそのまままでなく一定度の整理が行われた上で記載されたことを示していようか。また、村面積が広大な場合は、帳簿が一冊に書ききれなく複数に及ぶ場合がある（この場合、表紙に「何冊内」などと全体の冊数が記載される）。この時、帳簿にまたがって混合記載の場合もあれば、地目別に別記載の帳簿となる場合がある。

中には本文の途中に月日記載がある場合が存在する。一村の検地が複数日に及ぶ場合と見られ、記載の順番が検地実施順であることを物語る。

次が検地記載の主要部である一行項目である。典型的には①地名（名所）、②品位（位付け）、③地目、④面積および縦横間数、⑤分米、⑥名請人名となる。

①地名は近代における地籍測量によって作成された「字限図」に記載される「小字」に当たる。この図は近世の検地帳を元にしながら、一筆毎に実際の測量を行った上で、同一の「小字」毎の集成をおこなって作成されたとされる。検地帳の地名（小字）は、「小字」の起源と成立を考える重要な材料となろう。「字限図」に基づく地名研究は行われるが、検地帳の地名にもとづく地名研究は多くないように思われる（角川版日本地名辞典の附録には小字の集成は行われているが、検地帳からの小字集成は管見の限りないように思われる。「小字」にあたるような耕地地名は平安期から確認されるというが、村落の耕地全体を地名が覆う状況はいつから生まれたのであろうか。「小字」地名の登場にとつて検地の果たした役割は大きいのかもしれない。②品位はいわゆる耕地の地味状況を「上中下々々」で大きく分類したものである。それぞれの反当たり生産量である斗代は奥書に示されることになる。実際の斗代は、坪当たりのサンプル調査をして決定したと考えられるが、検地ではその村の地味の良い田畠との比較においてとりあえず上中下々々を決定したのであろうか。③地目の基本は「田」「畠」「屋敷」である。④面積は一反Ⅱ三〇〇歩で表される。畝歩を単位とするが、上中下が使用されるときがある。面積とは別に縦横の長さ（間数）が記載される場合があるが、これが実際に測量が行われたことを示すのであろうか。そうすると間数記載がない場合は測量が行われなかったことを示すのか、実際に測量が行われたならばそれは面積がい

きなりに測量できるわけではなく、計れるのは長さであろうから記載のないのは何を測量したことになるのか。実測の痕跡は検地帳のどこに見ることができるのであろうか。⑤名請人名は、検地帳項目では一番注目された部分であろう。検地研究は分付記載をめぐり名請人の性格の分析を行ってきたのである。事例を挙げればきりが無い。「誰々分誰々作」分付け主十分付け百姓である。

一行項目を集成したのが、「寄」である。合計は一般的に「寄」と呼ばれるが、この部分は後述のように様々な記載項目があるので仮に「奥書」と呼ぶことにしたい。まずは、品位地目別に集計されている。面積と分米が記載され、ここには反別生産量である斗代が記載されている。面積合計に斗代を乗じて品位地目毎の分米を計算したものであろう。これらを合計して村の分米合計＝石高が出される。村高の決定を目的とする領主にとってこの部分の記載が最重要であろうか。最後に年月日と奉行人名が記載される。ここでの検地帳の年月日は「表紙」と「奥書」の二カ所に書かれる。この年月日が何の日付なのであろうか。検地実施日なのか検地帳作成日なのか。二つの数字が相違するが場合は、どのように考えるべきなのか。検地帳作成の過程と関わり重要なデータである。

写本の場合では最後にその由来が記載されることがある。これによりどのような時に検地帳が写されるのかを知ることができる。領主側の事情、村方の事情と様々な状況が見られるのである。

2、慶長三年越前国惣国検地について

慶長三年の越前の太閤検地については、『福井県史』通史編3に概

括的な記述があり、県内の自治体史の該当部分に記載されるもの、木越隆三氏の研究を除けば個別的な研究論文はほとんどない状況である。ここでは『県史』を中心に検地帳分析の前提として越前惣国検地の概要について確認しておくことにしたい。『県史』によればその特徴について、

①検地は慶長三年五月から七月にかけて豊臣政権が実施。

②検地は慶長三年一月二十五日付の藤堂高虎宛増田長盛書状に「加賀二郡越前検地可被 仰付由候」とあるように同年一月には決定されていた(『高山公実録』)。

③検地の惣奉行は、豊臣氏五奉行の一人長束大蔵大輔正家であり、その他検地担当奉行は、長束正家を含め伊東丹後守長次・井上新介・吉田益庵・小堀新介正次・木村宗左衛門尉由信・朽木河内守元綱・駒井中務少輔重勝・杉若藤次郎・建部寿徳・新庄直忠・長束直吉・長谷川以真・服部正栄・林伝右衛門・速水甲斐守守久・溝江長氏・御牧勘兵衛尉景則・山口正弘の一九人とする。

④検地は、一郡を特定の人物が一人で行うのではなく、数名の奉行によって実施され、また、それぞれの奉行たちは複数の郡の検地を受けもっていた。

などを指摘している。

木越氏は、「慶長三年六月から七月にかけて越前一二郡で一斉に実施された惣国検地は、秀吉最晩年の太閤検地であり、天正一三年の関白就任以来、国家的事業として推進した太閤検地の『総仕上げ』にふさわしい大がかりな検地であった」と評価した上で、越前における天正五年柴田検地・天正一二年丹羽検地との比較から、また、丹生郡横

根村に残る文禄二年の村で作成された私的帳簿である「横根村歩割帳」との比較から次のような越前惣国検地における検地奉行主導を強調している。

①一三方条の検地条令は太閤検地原則の到達点を示し、これに沿って検地が実施された。

②検地条令のいくつかは柴田・丹羽検地政策の発展線上にある。

③太閤検地帳の記載順は実際の検地順と見るには不自然な点があり、また、一筆記載の分米合計と村高記載の相違が見られ、「村切」再編や検地高集計・出分高調整の上での検地村高は、検地奉行主導によつて行われた。

④検地帳は村で作成されたのではなく、国内の特定の場所に詰め所が設定され、そこで組織的に作成されて村に交付された。

このような指摘を踏まえながら、まずは、越前惣国検地にあつて作成された「越前之国并加賀江沼郡御検地条々」と題する一三か条の検地条目から、越前での原則を確認しておこう。

【史料一】越前国・加賀江沼郡御検地条目（「駒井中書日次記」文禄三年正月十九日条、藤田恒春偏『増補駒井日記』）

越前之国并加賀江沼郡御検地条々

①一六尺三寸之棹ヲ以、五間六十間三百歩、一段ニ可打之事、

②一在所・同田畠上中下能々念を入、可徒立候事、

③一田方斗代、其村其田地之上中下随可相定候事、

④一畠方斗代、桑畠茶園畠見計可相定、夏成在之畠方ハ帳面ニ可書載、

屋敷方斗代、上畠并たるへく候事、

⑤一山畠斗代、見計可相定之事、

⑥一田畠ニも不成野川原、検地之内不可入候事、

⑦一村切傍示ヲ立、田畠不入組様、隣郷之上使令相談可相究候事、

⑧一舛ハ京升ニ相定在之も、検地衆として判ヲすへ可出之、先規の外

ハ悉ク可取上候事、

⑨一山手銭・塩浜銭・川役・浦役、同小物成念を入可付立候、

⑩一口米ハ石二付、式升ツ、ニ可相定候事、

⑪一各事ハ不及申、棹打候者、給人・百姓被相頼、依怙ひいき、礼銭・

礼物・酒・肴・菓子已下一切取間敷旨、誓紙可申付候事、

⑫一於何方も自賄たるへし、但薪・ぬか・わら・草さうしハ、其在所

検地中人馬ニ応し地下より可乞取候事、

⑬一検地帳ニ判をすへ、地下庄屋・長百姓・小百姓ともニ悉ク召出相

渡、請状可取事、

右之条々相守可致検地、若相背候者、可為曲事者也、

月 日 御朱印（秀吉）

長束大蔵大輔（正家）

速水甲斐守（守久）

服部土佐守（正栄）

伊藤丹後守（長次）

長束伊賀守（長吉）

溝江大炊介（長氏）

小堀新介（正次）

杉若藤次郎

為真（長谷川）

駒井中務太輔（重勝）

新庄東玉（直忠）

御牧勘兵衛（景則）

建部寿徳

益庵（吉田宗甫）

木村惣左衛門（由信）

宛名となつてゐる長束正家以下の一五人が検地奉行であるが、前掲の井上新介・朽木河内守・林伝右衛門・山口正弘は宛名に見られないが、前掲の残存検地帳や関係史料には名が確認されることから、総計一九人の検地奉行で実施されたと見られている。

木越氏によれば④～⑦、⑪～⑬の箇条は、柴田・丹羽検地を踏まえ、太閤検地独自の規定は①～③、⑧～⑩の箇条とする。

第一条では、六尺三寸竿をもって五間六〇間を三〇〇歩＝一反とすることが定められた。

第二条では、村落・田畠の状況を見極めること、

第三条では、田方の斗代は村・田地の上中下に従つて決定すること、

第四条では、畠方の斗代は桑畠・茶園畠を見計らつて決め、夏成のある畠方は帳面に載せ、屋敷方の斗代は上畠並とすること、

第五条では山畠の斗代は見計らいとすること、が決められている。

一般の太閤検地では田畠の斗代は、上田が一石五斗、中田が一石三斗、下田が一石一斗というのが通例であり、以上のような検地条目で

斗代が指定されることになるが（天正一七年美濃国、天正十九年伊勢国、文禄三年和泉国の各検地条目）、越前の検地では具体的な斗代数値は示されず、この第二条から第五条の規定に従つて検地され村況によつて異なつてゐた。越前検地における斗代は、他の国々に比してかなり高いものであつたことが知られる。「在所」＝村状況の見極めは、一般的な斗代の一律適用とは違ふことを示していると考えられる。

第二条では「在所」＝村落と「田畠」の「上中下」の見極めを指示していることから、村の地味を見極める「村位別石盛制」が採用され、さらに個々の田畠の品位＝上中下を決定することが示されている。但し、田畠斗代の決定は、次の第三条と第四条に別の条項として更に規定が行われ、田は「其村其田地之上中下」に随うとあることから村位と田斗代が連動することが推測される一方、畠斗代は奉行による「見計」が強調され、田斗代設定との相違がある。また、畠斗代の設定には桑畠・茶園畠の見極めと、「夏成り」＝畠方二毛作の調査による検地帳面への記載が、そして第五条と別項目を立て山畠斗代を指示するなど田への規定よりも詳細であることを特徴とする。この相違の意図は明確に説明されないが、畠地を拠点に展開する様々な作物の生産を实情に応じて掌握しようとする方向性が想定されよう。この点が実際の検地帳にどのように現れるのかは重要な点であろう。

第六条では、田畠にならない野や川原を検地の対象としないといふ。これはおそらく実際の検地実施に際して、多くの石高打ち出しのために検地奉行は、野や川原を高に組み込む事例があり、これを厳しく禁止する必要があつたものと見られる。

第七条で村切のため傍示を立て、隣村の上使＝検地奉行と相談して

田島が入り組まないよう命じている。村切りによる村領域の一円化に際して出入作の整理が行われたことを示している。

第八条では、升を京升とすること、升には検地衆の判を据えて渡し、これまでの升はすべて取り上げるよう指示している。太閤検地の京升への統一は周知の特徴であるが、升への検地衆の判は公定升の徹底化を示す。

第九条では、山手銭・塩浜銭・川役・浦役など小物成を念を入れて付け立てることを求める。田島屋敷の検地と同時に、村々に応じた様々な生産活動を掌握することを目的としている。小物成の存在は村の諸生産の特徴を示す。

第一〇条は、「口米」についての規定である。年貢納入に当たつての付加税である口米を年貢一石につき二升と定めている。「口米」は中世においては荘務や年貢輸送費用など様々な経費を賄うために賦課されたものであったが、これらを統一賦課したところに秀吉政権の画期性が指摘されている。これにより検地衆が検地経費の賦課を禁止する措置が同時に規定されることになる。これに関連するのが次ぎに続く第一・二条である。

第一条では、検地に当たつて竿を打つ者に、給人や百姓に頼まれ依怙鼠負したり、礼銭・礼物・酒肴・菓子などを受けとらない旨の誓紙を出させることが命じられ、この規定は、在所の知行人や百姓から検地奉行の下で棹打ち＝検地調査の実働役人が賄賂をもらつて検地に手心をかけることを禁止するものであり、役人から奉行への誓紙の提出を命じている。実際の不正の横行が想定される。検地役人の不正問題が検地条目の重要規定であつたと見られる。

第一二条では、薪・糠・藁・草さうし以外は、すべて自賄とすることが定められている。

第一二条では、検地は「自賄」と自腹で行うことを原則として、検地経費として在地へ負担を禁止するものである。「薪」以下は例外として在所の負担を承認する。

第一三条では、検地帳は判を据え、地下・庄屋・長百姓・小百姓すべてを召し寄せて渡し、請状を取ることが求められている。

検地が終わるとその結果は検地帳にまとめられ、在地に下されることになる。この時、検地帳には検地奉行の判＝花押が据えられ、在所の庄屋以下の小百姓まで集められた中で渡されることになるが、その際に百姓中からの「請状」の提出が求められていることがわかる。この規定では、検地奉行の手元に残される検地帳との関連が不明確で、検地奉行は花押を据えた検地帳が、原本なのか、原本からの写された副本なのかはよくわからない。

こうして実施された検地は、慶長三年七月二十四日に西笑承兌が小川土佐守に宛てた書状（「西笑和尚文案」）の中で、「一、越前御検地相済、廿日二長大（長束正家）・山玄（山口正弘）其外検地奉行之衆不残上洛候、長大・山玄昨日廿三日被罷出候、越前之中十八万圓（石）出合在之由候」と述べているように、七月二十日には惣奉行の長束正家以下奉行衆も上洛し、越前の総石高も把握され完了した。

3、慶長三年越前国太閤検地帳の「奥書」記載

福井県史編纂過程で確認された慶長三年検地帳は一五七冊である。編纂史料を引き継いだ福井県立文書館の検索では一四九冊がある。

ここでは県史をはじめとして自治体史に掲載されてる史料で分析を行いたい。これを一覧にしたのが【表2】であり、全部で九六冊が確認できる。ほぼ全体の三分の二なので傾向を見ることは可能である。自治体史資料編ですべての検地帳が刊行されているわけではない。検地帳は多くのページ数を費やすので省略されることが間々ある。

前述したが刊本の限界のひとつは大きさとのデータが記載されていないので外形項目からの特徴をまとめることはできないため、残念ながら刊本から見ることの可能な部分に限定せざるを得ない。また、全項目についての分析は、のちの課題とし「奥書」を中心として、いくつかの項目について検地帳から見られる特徴を指摘したい。

(1) 「奥書」記載項目の形態

慶長三年越前太閤検地帳での「奥書」記載の典型的な事例は次のようなものである。

【史料2】法寺岡村検地帳〔41以下出典は【表2】の番号は〔番号〕で表記する〕

〔表紙〕「本紙」部分前略)

壹石七斗代

一、上田 合六町四畝七歩 分米百貳石七斗貳升

一石六斗代

一、中田 合壹町貳反四歩 分米拾九石貳斗二升四合

一石五斗代

一、下田 合四畝廿六歩 分米七斗三合

一石五斗代

一、居屋敷 四畝 分米六斗

一石五斗代

一、上畠 合壹町三〇〇〇〇〔反四畝〕 分米廿石一斗一升

一石四斗代

一、中畠 合壹反一畝 分米壹石五斗四升

一石三斗代

一、下畠 合貳畝廿歩 分米三斗四升八合

一石三斗代

一、荒田 貳町三畝 分米廿六石三斗九升

田畠合拾町八反七畝廿三歩

分米

都合百七拾壹石六斗五升六合

高之外

一、壹石貳斗

以上

右今度御検地之上を以相定条々

一、六尺三寸之棹を以、五間六拾間三百歩壹反二相究候事、

一、田畠并在所之上中下能々見届、斗代相定候事、

一、口米壹石〇〇〇〇〔貳付題〕貳升宛、其外役米一切不可出候事、

一、京升を以年貢〇〇致納所候、うりかひも同升たるへ〇〇〔付標〕事、

一、年貢米五里百性として可持届候、其外八代宣給人として可被持事、

以上

①②

③

④

⑤

⑥

【表2】越前国慶長3年太閤検地帳刊本一覽

番号	郡名	村名	年月日	帳名	奉行名	墨付紙数	記載方式	面積	間数	字位	品分	注記	目録	その他	地目別計	小物成	雑々	奉行名	年月日	墨付紙数	原写	備考(宛所)	所蔵	出典(刊本)
1	大野	横倉	慶長3年 6月25日	越前国大野郡北袋之内横倉村御検地帳	朽木河内守打口	21	別	42上	0	3	0	×	桑島	◎	山手銭	0	朽木河内守(印)	慶長3年6月25日	原	山岸弥右衛門 藤野三巻 島田新右衛門家 比呂野八郎 山手史資料	山岸弥右衛門家	勝山市史資料		
2	大野	布市	慶長3年 6月28日	越前国北袋之内布市村御検地帳	朽木河内守打口	50上	別	42上	0	3	0	×	荒島	◎	山手米夏秋	0	後文(朽木)	慶長3年6月28日	写	比呂野八郎 山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
3	大野	竜谷	慶長3年 6月28日	越前国北袋之内竜谷村御検地帳	御牧勤兵衛	4上	×	39	0	3	0	×	米・大 豆・ひえ	◎	山手米夏秋	0	後文(御牧)	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
4	大野	朝日	慶長3年 7月11日	越前国大野郡朝日組之内朝日村御検地帳	朽木河内守	39	混合	39	0	3	0	×	田方山 そい／分	◎	山手米	0	以真判	慶長3年7月15日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
5	大野	下毛	慶長3年 7月1日	越前国北袋之内下毛屋	以真	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	以真判	慶長3年7月1日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
6	大野	小矢戸	慶長3年 7月15日	太閤様御検地帳小矢戸村与平次写	以真	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	以真判	慶長3年7月15日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
7	大野	中野	慶長3年 7月15日	越前国大野郡内中野村御検地帳	い志心打口	4	混合	4	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	以真判	慶長3年7月15日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
8	大野	河合	×	越前北袋之内かぶこつ村	益庵打口	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	益庵(花押)	慶長3年7月15日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
9	大野	下掘	□□3年 7月15日	越前国大野郡内下掘村御検地帳	□□ん打口	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	以真(印)	慶長3年7月15日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
10	大野	猪野	慶長3年	越前国北袋之内いしの毛屋村御検地帳	益庵打口	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	益庵	慶長3年7月15日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
11	大野	上荒井	慶長□□ 7月18日	越前国大野郡上荒井御検地帳	御牧勤兵衛	34上 下共	混合	34上 下共	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	後文(御牧か)	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
12	大野	木本	慶長3年 7月18日	越前国大野郡木本領家村水帳之写	御牧勤兵衛	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判・書判	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
13	大野	開発	慶長3年 7月18日	越前国大野郡開発村御検地帳	御牧勤兵衛	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
14	大野	指島	慶長3年 7月18日	越前国大野郡指島村御検地帳	御牧勤兵衛	59上 下共	混合	59上 下共	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	後文(御牧)	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
15	大野	佐間	慶長3年 7月18日	越前国大野郡佐間村御検地帳	御牧勤兵衛	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	後文(御牧)	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
16	大野	黒原	慶長3年 7月18日	越前国大野郡黒原村御検地帳	御牧勤兵衛	11上 御附	混合	11上 御附	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
17	大野	平沢	慶長3年 7月18日	越前国大野郡平沢地頭村御検地帳	御牧勤兵衛	37上 下共	混合	37上 下共	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
18	大野	今井	慶長3年 7月18日	越前国大野郡今井村御検地帳	御牧勤兵衛	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
19	大野	五方	慶長3年 7月18日	越前国大野郡五方村御検地帳	御牧勤兵衛	44	混合	44	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
20	大野	阿羅	慶長3年 7月18日	越前国大野郡阿羅村御検地帳	御牧勤兵衛	34上 下共	混合	34上 下共	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
21	大野	東山	前文	越前国大野郡東山村御検地帳	御牧勤兵衛	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月18日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
22	大野	八町	慶長3年 7月21日	越前国大野郡八町町御検地帳	速水甲斐守	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月21日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
23	大野	伊知	慶長3年 7月21日	越前国大野郡伊知地村田島御検地帳	速水甲斐守	4略	略	4略	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月21日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
24	大野	横川	慶長3年 7月21日	越前国大野郡横川之内横川御検地帳	速水甲斐守	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月21日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
25	大野	六呂	慶長3年 7月21日	越前国大野郡六呂村御検地帳	速水甲斐守	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月21日	写	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		
26	大野	森本	慶長3年 7月21日	越前国大野郡森本村御検地帳	速水甲斐守(印)	3	混合	3	0	3	0	×	山手米	◎	山手米	0	御印判	慶長3年7月21日	原	山手史資料	山手史資料	勝山市史資料		

慶長三戌年七月廿日 益庵(花押) …………… ⑦⑧

すミ付五枚 …………… ⑨

①②部分は地目(田畠屋敷)品位別(上中下)にそれぞれの面積合計と分米合計と斗代を記載している。③④部分は①の地目別項目を集計して総面積と総分米(村高)を記載している。⑤は小物成の負担項目である。⑥は五ヶ条の検地条目である。⑦⑧は年月日と担当検地奉行名と署名である。⑨が「墨付」項目である。⑤の「小物成」は村毎によって記載内容に相違があり、慶長三年越前検地帳「奥書」の基本項目としては⑤を除いた①～⑧と言うことになる。しかし、これらの項目の記載の方法は、担当奉行によって異なる点が見られる。まずは、記載項目の有無と記載方法の違いから形態を分類してみると大きくはⅠ型Ⅱ型Ⅲ型Ⅳ型Ⅴ型Ⅵ型Ⅶ型Ⅷ型Ⅷ型のようになる(【表3】参照)。

Ⅰ型：①地目別面積分米①＋②斗代②＋③面積合計③＋④分米合計④＋⑤検地条目⑤＋⑥年月日⑦＋⑧奉行名⑧＋⑨墨付⑨

この型は、事例に挙げたもので検地奉行の吉田益庵をはじめとして杉若藤次郎・新庄直忠・井上新介・朽木元綱・伊東長次・長谷川以真の場合は、この項目構成となっている。ただ、いくつかの変形パターンが見られる。井上新介と朽木元綱の場合は、「奥書」には「墨付」項目はなく、「表紙」に記載されている。奉行長束正家の場合は、記載項目は同じであるが①地目別面積分米①②斗代②記載の部分と③面積③④分米合計④部分の記載順が逆となっている。また、伊東長次の事例では、Ⅰ型の変形として①地目別面積分米①②斗代②

【表3】「奥書」記載項目整理表

類型	奉行	数	地目別面積分米①	斗代②	面積計③	分米計④	条目⑥	年月日⑦ 奉行名⑧	墨付⑨	宛名	項目記載順
Ⅰ型	吉田益庵	6	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑥⑦⑧⑨
	新庄直忠	3	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑥⑦⑧⑨
	杉若藤次郎	1	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑥⑦⑧⑨
	伊東長次①	4	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑥⑦⑧⑨
	長谷川以真①	3	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑥⑦⑧⑨
	井上新介	3	○	○	○	○	○	○	表	×	①②③④⑥⑦⑧
	朽木元綱①	8	○	○	○	○	○	○	表	×	①②③④⑥⑦⑧
	伊東長次②	4	○	○	○	○	○	○	○	×	①②③④⑦⑧⑨⑥⑦⑧
	長束正家	4	○	○	○	○	○	○	○	×	③④①②⑥⑦⑧⑨
長谷川以真②	7	○	○	○	○	○	○	○	×	③①②④⑥⑦⑧⑨	
Ⅱ型	建部寿徳	3	○	○	×	○	○	○	表	○	①②④⑥⑦⑧
	服部正栄	1	○	○	×	○	○	○	○	×	①②④⑥⑦⑧⑨
	小堀正次①	1	○	○	×	○	○	○	○	×	①②④⑨⑧⑥⑦⑧
	小堀正次②	1	○	○	×	○	○	○	○	×	①②④⑥⑨⑦⑧
Ⅲ型	小堀正次③	1	○	○	×	○	○	○	×	×	①②④⑧⑥⑦⑧
	小堀正次④	1	○	×	×	○	○	○	×	×	①②④⑧⑥
	駒井重勝	2	○	×	○	○	○	○	○	×	①③④⑥⑦⑧⑨
Ⅳ型	小堀正次⑤	1	○	×	○	○	○	○	○	×	①③④⑧⑨⑥⑦⑧
	小堀正次⑥	2	○	×	○	○	○	○	×	×	①③④⑥⑦⑧
Ⅴ型	木村由信	5	○	×	○	○	×	○	×	×	③④⑦⑧①
Ⅵ型	林伝右衛門①	3	△	△	○	○	×	○	○	○	①①②③④⑦⑧⑨
	林伝右衛門②	4	△	△	○	○	×	○	○	×	①①②③④⑨⑦⑧
Ⅶ型	速水守久	5	×	×	○	○	○	○	△	×	③④⑨⑥⑦⑧
	朽木元綱②	1	×	×	○	○	○	○	表	×	③④⑥⑦⑧
Ⅷ型	御牧景則	11	×	×	×	○	○	○	表	×	④⑥⑦⑧

十〈③面積・④分米合計〉十〈⑦年月日⑧奉行名〉十〈⑨墨付〉十〈⑥検地
条目〉十〈⑦年月日⑧奉行名〉というように、〈検地条目〉を挟んで〈⑦
年月日⑧奉行名〉が二回記される事例が四つある。長谷川以真の場合
は、I型の変形として〈③面積合計〉十〈①地目別面積分米②斗代〉十
〈④分米合計〉十〈⑥検地条目〉十〈⑦年月日⑧奉行名〉と面積合計と分
米合計が地目別面積分米斗代項目を挟んで別の場所に記載される事
例が見られる。

II型：〈①地目別面積分米〉十〈②斗代〉十〈③分米合計〉十〈⑤検地条
目〉十〈⑥年月日奉行名〉

奉行服部正采や建部寿徳の場合で見られ、I型との相違は〈①地目
別〉ではそれぞれの面積が見られるのに〈③面積合計〉の記載がない。
ただし〈墨付〉は服部では見られるが、建部の場合は「表紙」に記載
され「奥書」には見られない点は両者で相違する。

III型：〈①地目別面積分米〉十〈④分米合計〉十〈⑥検地条目〉十〈⑦年月
日⑧奉行名〉

奉行小堀正次の事例としてひとつある。もしかしたら誤写で項目が
落ちた可能性もある。

IV型：〈①地目別面積分米〉十〈②面積・③分米合計〉十〈⑤検地条目〉
十〈⑥年月日奉行名〉十〈⑨墨付〉

奉行駒井重勝の場合で、I型から斗代記載部分が除かれた構成とな
る。

V型：〈②面積・②分米合計〉十〈⑥年月日奉行名〉十〈①内訳として地
目別面積分米〉

奉行木村由信の場合で、記載項目構成としてはIV型から〈検地条目〉

と〈墨付〉を除いた構成をしている。ただし記載順が相違し〈年月日・
奉行名〉のあとに「右之内」として〈地目別面積分米〉が記載される。
VI型：〈③面積・④分米合計〉十〈⑦年月日⑧奉行名〉十〈⑨墨付〉

奉行林伝右衛門の場合で、「奥書」項目構成としてはV型から〈検
地条目〉を除いた構成でシンプルとなっている。ただし、〈地目別面積
分米〉の記載が「奥書」部分に集約されず、「本文」一筆書の田・畠・
屋敷記載の末尾に地目毎の面積と分米の合計が記され、その総合計が
「奥書」に記載されている形態をとる。また、特徴的なのは林伝衛門
の七事例の内三事例に宛名があることである。

VII型：〈③面積・④分米合計〉十〈⑥検地条目〉十〈⑦年月日⑧奉行名〉

奉行速水守久の場合で、IV型から〈地目別面積分米〉を除いた項目
記載となる。〈墨付〉は記載される場合とされない場合がある。

VIII型：〈③分米合計〉十〈⑤検地条目〉十〈⑥年月日奉行名〉

奉行御牧景則の場合で、VII型からさらに〈面積合計〉が除いた項目
構成で一番シンプルなものである。「奥書」に〈墨付〉記載はないが、
「表紙」に見られる。

以上のように「奥書」記載項目の構成は、多くのパターンに分かれ
るように思われるが、長谷川①②、朽木①②、伊東①②、林①②といっ
た一部の場合を除いて、奉行毎では基本的には統一した記載形式が採
用されることがわかる（ただし小堀正次の場合は記載項目・型式が
五種類もあり例外的と言わざるを得ない）。検地条目で検地基準が統
一的に示されながらも、検地実施の結果として作成される検地帳（「奥
書」）記載形態は、奉行毎の裁量が反映されたものと見られる。

(2) 「奥書」記載項目の特徴1 地目と面積・分米合計

次には項目別に若干の整理をしておこう。

まず【史料2】の①に集計されている「地目」に注目しよう。地目の種類については、上・中・下田、屋敷、上・中・下畠を基本として、下々田、下々畠は、朽木元綱〔23〕、長谷川以真〔7〕〔86〕、井上新介〔77〕、長束正家〔81〕、小堀新介〔85〕の六事例しか確認できないので、上中下三区分が原則であったようである。また、「荒田」、「荒畠」、「桑畠」、「麻畠」、「山畠」、「河原田・畠」などの地目があり、「荒田」、「荒畠」、「桑畠」には上・中・下を付ける場合や、「当荒」、「永荒」を区別する場合などもある。荒田畠の上中下三区分は、朽木元綱〔2・34・43〕、小堀正次〔46・52・65・66〕、長束正家〔53〕、御牧景則〔14・20〕の一〇事例が見られる。奉行による地目設定の相違があるようである。伊東長次に代表されるような比較的シンプルな奉行もあれば、長束正家のように細かく地目を設定する奉行もある。地目の設定には奉行による裁量が示されているといえる。

①は「本紙一筆書き」部分を地目毎に集計して、「面積と分米の合計を記載し、更に田畠屋敷が総計されて、③面積総計と④分米総計」村高が計算されて記載される。総計部分の記載に注目するならば次のように分類される。

集計A型：①地目別面積分米＋③面積総計＋④分米総計（↓奥書

I・IV・V・VI型）

集計B型：①地目別面積分米＋④分米総計（↓奥書II・III型）

集計C型：③面積総計＋④分米総計（↓奥書VII型）

集計D型：④分米総計（↓奥書VIII型）

C・D型のように地目別面積分米がない場合は、面積や分米の合計計算は、「一筆書き」の面積や分米を直接計算したことになるのだろうか。計算としては大変煩雑になるように思われるが、検地帳には計算過程をすべて記載したのではないということなのであるうか。いずれにせよ分米総計が記載されない検地帳がないことは、「奥書」が検地結果の集約部分とすれば、検地結果の最重要事項が分米総計つまり村高の決定であることが当然の如く確認されるのである。

(3) 「奥書」記載項目の特徴2 斗代と村位別石盛制

【史料2】の②部分は斗代記載である。斗代は一反当たりの見積生産量で石盛ともいわれる。検地帳には斗代が記載される場合と記載されない場合がある。その相違はよくわからない。

斗代A型：斗代記載の有（↓奥書のI・II・IV型）

斗代B型：斗代記載の無（↓奥書のIII・IV・V・VII・VIII型）

記載される斗代を検地奉行ごとにまとめたのが【表3】である。斗代については、佐藤満洋氏⁵⁾によつて検地帳奥書にある五ヶ条検地条目の「田畠并在所之上中下能々見立、斗代相定候事」記載から「村位別石盛制」が越前においても行われたと推定されている。また「田方斗代、其村其田地之上中下随可相定候事」と検地条目では他の場合と違い、具体的な上中下斗代の数値が示されることなく、奉行に対して上中下を定めることが命じられている。つまり、在所⁶⁾村の上中下「村位」を奉行が見立てると田畠の上中下斗代が決定されたと見られるのである。検地帳「奥書」に記載される上・中・下田畠の斗代を整理したのが【表5】である。田斗代では、最高値一石八斗から最低値一石

【表4】「奥書」地目別斗代一覽

一覽 番号	村名	奉行	上田	中田	下田	下々 田	荒田	上荒	中荒	下荒	当荒	永荒	屋敷	麻畠	山畠	上畠	中畠	下畠	下々 畠	桑畠	上桑 畠	下桑 畠	荒畠	上荒 畠	中荒 畠	下荒 畠	当荒	永荒			
38	中山	伊東長次	1.7	1.6	1.5		1.5						1.6			1.5	1.4	1.3													
39	小野	伊東長次	1.7	1.6	1.5		1.5						1.6			1.5	1.4	1.3													
63	野圃	伊東長次	1.7	1.6	1.5		1.5						1.6			1.5	1.4	1.3													
64	寺地	伊東長次	1.7	1.6	1.5		1.5						1.6			1.5	1.4	1.3													
30	山岸	伊東長次	1.6	1.5	1.4		1.4						1.5			1.5	1.4	1.3													
40	白方	伊東長次	1.6	1.5	1.4		1.4						1.5			1.5	1.4	1.3													
56	上河内	伊東長次	1.6	1.5	1.4		1.4						1.5			1.5	1.4	1.3													
59	嶋	伊東長次	1.6	1.5	1.4		1.4						1.5			1.5	1.4	1.3													
61	上鯖江	井上新介	1.75	1.6	1.5		1.5						1.6			1.55	1.4	1.2													
27	右近次郎	井上新介	1.6	1.5	1.4		1.4						1.4			0.6	0.5	0.25	0.2												
5	下毛屋	井上新介	1.3	1.0	0.8		1.0						1.4			1.55	1.4	1.3													
42	花谷	朽木元綱	1.8	1.7	1.6		1.4						1.4			1.5	1.4	1.3													
3	龜谷	朽木元綱	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>													
60	新町	朽木元綱	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>													
2	布市	朽木元綱	1.7	1.6	1.5											1.5	1.4	1.3													
23	伊知地	朽木元綱	1.7	1.6	1.5		1.1									1.5	1.4	1.3	0.5												
34	大塚	朽木元綱	1.7	1.6	1.5								1.6			1.5	1.4	1.3													
43	飯島	朽木元綱	1.7	1.6	1.5								1.6			1.4	1.3	1.2													
1	横倉	朽木元綱	1.6	1.5	1.4								1.6			1.5	1.4	1.3													
41	法寺岡	吉田益庵	1.7	1.6	1.5		1.3						1.5			1.5	1.4	1.3													
8	河合	吉田益庵	1.6	1.5	1.4								1.5			1.5	1.4	1.3													
10	猪野毛屋	吉田益庵	1.6	1.5	1.4								1.5			1.5	1.4	1.3													
84	大比田	吉田益庵	1.5	1.4	1.3								1.3			0.8	0.7	0.6													
90	横浜	吉田益庵	1.5	1.4	1.3								1.3			0.8	0.7	0.6													
89	菅目	新庄直忠	1.5	1.4	1.3								0.8			1.0	0.8	0.6													
45	新保	新庄直忠	1.7	1.6	1.5								0.8			0.8	0.6	0.5													
50	半田	新庄直忠	1.8	1.6	1.5								1.6			1.5	1.4	1.3													
37	山竹田	杉若藤次	1.7	1.6	1.5		0.3						1.4			1.4	1.3	1.2													
48	徳光	長束正家	1.8	1.6	1.5								1.4			1.5	1.5	1.3													
53	二上	長束正家	1.8	1.7	1.6								1.4			1.5	1.4	1.3													
79	行松	長束正家	1.8	1.7	1.6								1.6			1.5	1.4	1.3													
81	今宿	長束正家	1.8	1.7	1.6								1.7			1.4	1.3	1.2													
80	中平葦	長束正家	1.7	1.6	1.5								1.4			1.5	1.4	1.3													
7	中野	長谷川以	1.8	1.7	1.5		1.15						1.2			1.3	1.0	0.8													
44	上津法寺	長谷川以	1.75	1.6	1.5		1.1						1.4			1.3	1.1	0.8													
91	津内	長谷川以	1.7	1.6	1.5								1.4			1.0	0.9	0.8													
9	下裾	長谷川以	1.65	1.5	1.35								1.2			1.2	1.0	0.7													
76	中山	長谷川以	1.6	1.5	1.4								1.2			1.2	1.0	0.7													
6	小矢戸	長谷川以	1.55	1.5	1.4		1.4						0.9			1.0	0.8	0.6													
36	中番	長谷川以	1.5	1.4	1.3								1.15			1.2	1.0	0.8													
96	江良浦	長谷川以	1.3		1.1								1.3			1.3	1.1	0.9													
82	江内	長谷川以	1.0										0.8			0.8	0.7														
83	河野	長谷川以			1.0								1.0			0.3	0.8	0.7													
55	筋生田	建部寿徳	1.8	1.7	1.6		1						1.7			1.5	1.4	1.3													
57	河和田	建部寿徳	<1.7>	<1.6>	<1.5>		<1.0>						<1.6>			<1.5>	<1.4>	<1.3>													
58	片山	建部寿徳	1.8	1.7	1.6		1.0						1.7			1.5	1.4	1.3													
62	倉谷	建部正家	1.8	1.7	1.6								1.7			1.1	1.0	0.8													
46	花守	小堀正次	1.8	1.7	1.6								1.7			1.4	1.4	1.3													
52	三尾野	小堀正次	1.6	1.5	1.4								<0.8>			<0.8>	<0.7>	<0.6>													
85	市橋	小堀正次	<1.4>	<1.3>	<1.2>								<0.8>			<0.8>	<0.7>	<0.6>													
86	奥麻生	小堀正次			<1.1>								<0.9>			<1.0>	<0.9>	<0.8>													
87	道口	小堀正次	<1.5>	<1.4>	<1.2>								<1.0>			<1.0>	<0.9>	<0.8>													

一覽 番号	村名	奉行	上田	中田	下田	下々 田	荒田	上荒	中荒	下荒	当荒	永荒	塵敷	麻晶	山晶	上晶	中晶	下晶	下々 晶	桑晶	上桑 晶	下桑 晶	荒晶	上荒 晶	中荒 晶	下荒 晶	当荒	永荒	
88	定田	小堀正次	<1.5>	<1.3>	<1.2>								<1.5>			<1.0>	<0.9>	<0.6>											
92	奥野	小堀正次	1.4	1.2	1.1							1			1	<1.0>	<0.8>	<0.6>											<1.0>
65	更各間	小堀正次	<1.5>	<1.3>	<1.1>	<0.8>				<1.1>			<1.0>			<1.1>	<0.9>	<0.6>											<0.6>
66	千代谷	小堀正次		<1.1>	<1.0>					<1.0>			<1.3>			<1.3>	<0.9>	<0.6>											<0.6>
51	南山	駒井重勝	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.6>		<0.8>	<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.5>
54	田尻	駒井重勝			<1.4>											<1.5>	<1.4>	<1.2>											<1.7>
69	赤井谷	木村由信	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.0>
73	山田	木村由信	<1.7>	<1.6>	<1.5>											<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.0>
93	登浦	木村由信	<1.5>	<1.4>	<1.3>								<1.3>			<1.3>	<1.1>	<0.9>											
94	名子	木村由信	<1.5>	<1.4>	<1.3>								<1.3>			<1.3>	<1.1>	<0.9>											
95	浦底	木村由信	<1.5>	<1.4>	<1.3>								<1.3>			<1.3>	<1.1>	<0.9>											
31	池上	林伝右衛	1.7	1.6	1.5								0.7			1.5	1.4	1.3											0.6
67	三崎	林伝右衛	1.7	1.6	1.5							0.7	1.6			1.5	1.4	1.3											0.6
68	纏田	林伝右衛	1.7	1.6	1.5							0.7	1.6			1.5	1.4	1.3											0.3
32	安嶋浦	林伝右衛	1.6	1.5	1.4							1.5	1.6			1.5	1.4	1.3											0.3
33	穂浦	林伝右衛	1.6	1.5	1.4							1.5	1.6			1.5	1.4	1.3											0.3
70	下河原	林伝右衛	1.6	1.5	1.4							1.5	1.6			1.5	1.4	1.3											0.3
71	四ツ杉	林伝右衛	1.6	1.5	1.4							1.5	1.6			1.5	1.4	1.3											0.3
78	大樽浦	林伝右衛														1.5	1.4	1.3											0.6
25	六呂師	速水守久	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.65>
28	中接	速水守久	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.6>
22	八町	速水守久	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.3>
24	楢爪	速水守久	<1.7>	<1.6>	<1.5>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.6>
26	森本	速水守久	<1.6>	<1.5>	<1.4>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.6>
29	不動堂	速水守久	<1.6>	<1.5>	<1.4>								<1.4>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.6>
12	本本	御牧景則	1.8	1.7	1.6								1.7		1.2	<1.5>	<1.4>	<1.3>											1.8
11	上荒井	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.3>
15	佐開	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.8>
18	今井	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.8>
19	五条方	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.8>
20	阿羅担領	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.5>
74	権相	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.8>
75	都部杉本	御牧景則	<1.8>	<1.7>	<1.6>								<1.7>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.8>
13	開榮	御牧景則	<1.6>	<1.5>	<1.4>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.5>
14	猪島	御牧景則	<1.6>	<1.5>	<1.4>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.5>
17	平沢地頭	御牧景則	<1.6>	<1.5>	<1.4>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.5>
21	栗山	御牧景則	<1.5>	<1.5>	<1.4>								<1.5>			<1.5>	<1.4>	<1.3>											<1.2>

<数字>は計算不出した数値

【表5】田方斗代構成

	上田	中田	下田	数
A	1.8	1.7	1.6	19
	1.8	1.6	1.5	2
	1.8	1.7	1.5	1
	1.75	1.6	1.5	2
B	1.7	1.6	1.5	24
	1.65	1.5	1.35	1
C	1.6	1.5	1.4	21
	1.5	1.4	1.3	7
D	1.5	1.4	1.2	1
	1.5	1.4	1.2	1
	1.4	1.3	1.2	1
	1.4	1.2	1.1	1
	1.3	1.0	0.8	1
	1.3		1.1	1
	1.0			1

84

【表6】畠方斗代構成

	上畠	中畠	下畠	数
	1.55	1.4	1.3	1
	1.55	1.4	1.2	1
	1.5	1.4	1.3	58
	1.4	1.3	1.2	2
	1.3	1.1	0.9	3
	1.3	1.1	0.8	1
	1.2	1.0	0.7	1
	1.2	1.0	0.8	1
	1.1	1.0	0.8	1
	1.0	0.9	0.8	1
	1.0	0.8	0.6	2
	1.0	0.9	0.6	3
	0.8	0.7	0.4	3
	0.8	0.6	0.5	1
	0.6	0.5	0.25	1

80

【表7】村別田畠斗代構成表

	上田	中田	下田	上畠	中畠	下畠	数
	1.8	1.7	1.6	1.5	1.4	1.3	17
	1.8	1.7	1.6	1.55	1.4	1.3	1
	1.8	1.6	1.5	1.4	1.3	1.2	1
	1.8	1.6	1.5	1.5	1.3	1.3	1
	1.8	1.7	1.5	1.3	1.0		1
	1.8	1.7	1.6	1.1	1.0	0.8	1
	1.75	1.6	1.5	1.55	1.4	1.2	1
	1.75	1.6	1.5	1.3	1.1	0.8	1
	1.7	1.6	1.5	1.5	1.4	1.3	22
	1.7	1.6	1.5	1.4	1.3	1.2	1
	1.7	1.6	1.5	1.0	0.9	0.8	1
	1.65	1.5	1.35	1.2	1.0	0.7	1
	1.6	1.5	1.4	1.5	1.4	1.3	19
	1.6	1.5	1.4	1.0	0.8	0.6	1
	1.55	1.5	1.4	1.2	1.0	0.8	1
	1.5	1.4	1.3	1.3	1.1	0.9	3
	1.5	1.4	1.3	0.8	0.6	0.5	2
	1.5	1.4	1.2	1.0	0.9	0.6	2
	1.5	1.4	1.3	0.8	0.6	0.5	2
	1.4	1.3	1.2	0.8	0.7	0.4	1
	1.4	1.2	1.1	1.0	0.9	0.6	1
	1.3	1.0	0.8	0.6	0.5	0.25	1
	1.3		1.1	0.8	0.7		1
	1.0			0.8	0.7		1

84

までの数値があるが、村落における上・中・下田の斗代の組み合わせとしては、

A型…上田一石八斗、中田一石七斗、下田一石六斗 一九事例

B型…上田一石七斗 中田一石六斗 下田一石五斗 二四事例

C型…上田一石六斗 中田一石五斗 下田一石四斗 二一事例

D型…上田一石五斗 中田一石四斗 下田一石三斗 七事例

D型は七例と少ないものの、A・B・C型は八四事例中の六四事例と多くの事例が確認されることから、田斗代から見ると、上々・上・中・下または上・中・下・下々の四区分の「村位石盛」があつたとすることも可能であろう。

一方、畠方の場合、上畠で最高値一石五斗五升から最低値六斗までの数値が見られる。上・中・下畠斗代の組み合わせとしては、上畠一石五斗・中畠一石四斗・下畠一石三斗の事例が、八〇事例中で五八例とその大部分を占めていることが特徴である【表6】。他の組み合わせの事例数は多くとも三例に過ぎず、田方斗代とは相違して上中下の明確な「村位石盛」を見いだすことはできないように思われる。検地条目では「畠方斗代、桑畠茶園畠見計可相定」と畠斗代も具体的な数値は示されなく、更に「桑畠茶園畠」の地目の見計らいは指示されるものの、田方の規定とは相違して上中下の見計らいの指示はない。つまり、奥書の畠斗代の事例の集中は、これに規定の不存在に由来するのである。そして、各村における田斗代と畠斗代の組合せは【表7】である。当然ながら、田斗代のABC型に上畠一石五斗・中畠一石四斗・下畠一石三斗の畠斗代との組合せに事例が集中し、それぞれ一七、二二、一九事例あり、他の畠斗代との組合せは三〜一事例に過ぎ

ないので、「村位石盛」は田方斗代のみで規定されていたことになる。

屋敷斗代については、検地条目に「屋敷方斗代、上畠并たるへく候事」とあるものの、【表3】の斗代表を見ると、必ずしも屋敷斗代も上畠斗代とならない事例が数多く見られる。しかもその数値も一石七斗六斗まで多様な斗代があり一定しなく、検地条目通りの設定になっていないことがわかる。

(4) 「奥書」記載項目の特徴3 五ヶ条検地条目

越前惣国検地帳が他の検地帳の記載と際だつて相違する点は、⑥のような五ヶ条の「検地条々」が記載されることである。

一条目は、「六尺三寸之棹を以、五間六拾間三百歩壹段二相究候事」と太閤検地原則のひとつである一間六尺三寸の検地棹で一反三〇〇歩制が示されている。これは、一三ヶ条越前検地条目の一条目と同文である。

二条目は田畠の上中下の斗代と在所(＝村)毎の上中下の斗代を奉行の「見届」調査で定めることを規定している。越前検地条目の二条目に対応する。前述したように在所の上中下の位付けは、村位別石盛制の採用を推定させるが、実際には上中下と単純ではなく、斗代の決定は多岐にわたり、三・四区分に限定されず、実際の「見届」による奉行の裁量による村位設定を否定することはできない。

三条目は口米＝年貢の付加税の規定であり、越前検地条目の一〇条目に対応する。

四条には京升使用の規定であり、越前検地条目の八条目に対応する。ここでは年貢納入時での京升使用だけでなく、売買の際も京升を

使用することを規定している点が相違する。

五条目は年貢米の輸送規定であるが、越前検地条目には対応する規定が見られない。年貢米の運送は五里までは百姓の責任で行い、それ以外は代官・給人の責任として行うことを示している。

このように四条目や五条目の内容を見ると、五ヶ条の検地条目は越前検地条目の単なる省略版でないことがわかる。一般的に検地条目は、検地奉行にマニュアルとして検地基準を実施前に提示した文書であり、検地の行われる在地に発行される文書ではない。五ヶ条検地条目は、これとは相違して在地に発給されたものであり、内容は越前検地条目と重なるものの、その意図は違うものと考えらるべきであろう。これは条々の冒頭に「右今度御検地之上を以相定条々」と記載される点からも示されよう。つまり検地条々は「今度検地之上」で定められ在地に提示された項目であり、検地帳が在地に渡された際に同時に示されたものである。検地実施前に検地奉行衆に渡される検地条目とは明らかに相違するのである。

ところで検地帳では検地条々が記載されない場合がある。林伝右衛門と木村由信が検地奉行の検地帳である。ただし、木村由信場合は検地帳から独立して五ヶ条検地条々を発給している(慶長三年七月十八日付け、「西福寺文書」・「色浜区有文書」、「山本宗右衛門家文書」以上「敦賀市史」史料編第三卷の三例)。このうち検地帳とともに残されている事例は、敦賀郡沓浦で「沓浦刀祢弥一百姓中」宛のものがあつた。発給の日付は検地帳の日付と同日であり、検地条々は検地帳と同時に発給されたことがわかる。これにより、検地前に検地条々が在地に示されたものではないことを示している。このようにたまたま残存

しているかを整理したものである。これを見ると郡を越えて同日に検地帳が在地に渡されている事例が多いことに気づく。長谷川以真の場合には極端で、大野郡以下六郡にわたり九か村に検地帳を残しているが、すべてその日付が七月一日となっている。これから見ても日付は検地完了時ではなく、検地帳の清書が完成して在地に渡す日付であり、また、清書された検地帳は同一検地奉行の場合は一斉に発給されることを示している。

ただ、日付はそれほど重要ではなかった見られる事例がある。林伝右衛門が奉行の検地帳は、全て日付がなく「慶長三年七月 日」となっている。土地台帳としての検地帳の有用性は、なしは有効性は作成日付で言うよりも、確定内容と言うことになるか。この点で見れば、⑨の〈墨付〉ないしは「紙数」記載が重要度が高いと見られる。これは「表紙」に記載される形態もあり、「奥書」記載と合わせるとほとんどの検地帳に記載されることになるからである。墨付枚数を単純に記載するだけでなく、たとえば「墨付参拾九枚、但上紙共二」〔5〕、「両上紙共二五十九枚也」〔14〕というように、「上紙」≡表紙も含めた枚数を記載したり、更には「九十まい、上紙共二、白紙一まい有」〔49〕と本文途中に白紙が一枚あるとの記載する事例さえあり、帳簿構成枚数の厳密な把握を意図しているのである。これはおそらく基本帳簿として改ざんを防止する手立てであったと見られる。

(6) 「奥書」記載項目の特徴5 小物成と夏成

「奥書」には、検地条目の第九条「山手銭・塩浜銭・川役・浦役、同小物成念を入可付立候」を受けて、「史料二」の⑤のように、高外

として小物成が記載される、これは九五ヶ村の中で四二ヶ村に見られ、山関係として山手米・山手銭（三三ヶ村、米・銭・銀）、山年貢（六ヶ村、米）、浜方関係として塩浜年貢（三ヶ村、米）、嶋手（二ヶ村、米・銭）、大網銭（二ヶ村、米・銭）、特産物として炭（一ヶ村、現物）、入木（二ヶ村、現物）、鮎（二ヶ村、現物）、茶銭（一ヶ村、銭）、油（一ヶ村、米）、薪（三ヶ村、米）、と二種類がある。⁽¹⁶⁾ 納入方法としてはa米納・b銭納、銀納・c現物納の三形態がある。

山手は「米成」を原則とし、布市村では「式石は、但夏半分、秋半分 山手銭 但米成」〔2〕とあり、夏秋に両度に納入する規定も見られる。一〇ヶ村では代銭納として、一石≡一貫文の換算で銭納が行われている。新保村では「五文目 銀子 同村山手米」〔49〕とあり唯一「銀子」での納入が命じられている。

塩浜年貢を「小物成」として記載する村落は、敦賀郡の大比田、横浜、江良浦の三ヶ村〔84・90・96〕であり、塩生産が行われている海浜村落である。

大比田村 「式拾五石式斗四升 塩浜之年貢 但老町六反八畝拾三歩」

横浜村 「八石三斗 塩はま御年貢 但五反五畝十八分」

江良浦 「しほはま 七反七畝拾歩 分米拾石八斗四升七合 反別老石四斗代」と「しほはま地子 式石七斗五升八合 小成物」とある。

その他、敦賀郡内には小物成に「塩浜年貢」記載はないものの、本紙に「塩浜」が検地されている村落が二ヶ村、塩釜屋敷が存在する村落一ヶ村がある。浦底浦では「屋敷」のあとに「塩浜」が二三筆あり、

【表9】奥書小物成一覧

一覽 番号	村名	奉行名	夏成	小物成		
				山手米(山手銭)	その他	
					項目	負担額
2	布市	朽木		2石(米成夏半分秋半分)		
3	竜谷	朽木		12石(夏秋両度)		
6	小矢戸	長谷川			山年貢	22石
7	中野	長谷川		6石		
8	河合	益庵		1石9斗5升(夏秋)		
9	下据	長谷川		5斗		
11	上荒井	御牧			山年貢	5石
12	木本	御牧		3石		
13	開発	御牧			山年貢	1斗5升
15	佐開	御牧		9石3斗		
18	今井	御牧		1石7斗		
19	五条方	御牧			山年貢	口石5斗
21	東山	御牧		3斗		
23	伊知地	朽木		10石(夏秋)	炭	100俵夏秋
24	橋爪	速水		1石7斗5升		
25	六呂師	速水			山年貢	4石
28	中据	速水			山年貢	3石5斗
29	不動堂	速水か		5石		
30	山岸	伊東	30石			
34	大味	朽木	7石6斗7升			
38	中山	伊東	わた200目	6斗5升(650文)		
39	小野	伊東	わた25匁 芋100匁	7斗		
41	法寺岡	益庵		1石2斗(1貫200文)		
42	花谷	朽木	20石3斗1升	2貫100文	入木	10束
43	飯島	朽木	2石わた			
44	上浄法寺	長谷川		2石5斗		
49	新保	新庄		5文目銀子	あゆのうお	2000(堺ハ前波より石場くつれ坂迄)
50	半田	新庄		5斗		
56	上河内	伊東		2斗(代2貫文)		
60	新町	朽木		300文		
63	野岡	伊東		1石4斗(代1貫400文)		
64	寺地	伊東		2斗(代200文)		
69	赤井谷	木村		700文但しなミ銭		
74	横根	御牧		1石(1貫200文)	茶銭	100文
75	都部杉本	御牧		1貫200文		
82	河内	長谷川		1石3斗(代1貫300文)		
83	河野	長谷川		8石	大あみ銭	43石2斗(43貫200文)
84	大比田	益庵		1石2斗6合	油之代	3石3斗3升3合(油之代たも10石之代)
					薪代	10石2斗4升
					塩浜年貢	25石2斗4升
90	横浜	益庵		1石4升8合	薪代	4石6斗8升6合
					塩浜年貢	8石3斗
					嶋手	4貫文
93	沓浦	木村		6升	あみ之銭	1貫文
95	浦底	木村か		3斗1升	薪代	3石8斗2合
96	江良浦	長谷川		4斗1升8合	塩浜年貢	10石8斗4升7合(7反7畝10歩)
					塩浜地子	2石7斗5升8合
					嶋手	4石(代4貫文)

奥書には「塩田 式段式畝 分米三石八升」とあるが小物成には記載されていない〔95〕。沓浦では小物成とは別に「塩田分」として5〔7〕筆あり、分米計で参反参畝四石六斗二升とある〔93〕。名子村では屋敷のなかに「かま」と注記する筆数が二ある〔94〕。塩釜のある屋敷と見られるが、塩浜検地や小物成に塩浜年貢は記載されていない。一方、前掲の三ヶ村では本紙部分に「塩田」「塩浜」記載はない。しかし、三ヶ村とも「塩浜」の面積記載があることから検地が行われたことを推測させる。塩浜を村高に合計して、田畠屋敷年貢に組み込むか、小物成として掌握するかの違いはあるが、秀吉政権が各村での塩生産に注意を払っていたことを示している。大比田、横浜では斗代が一石五斗、江良浦、浦底浦、沓浦では斗代一石四斗となり、塩浜も品位差を設けていると見られる。

検地条目の第三条には、畠方検地において「夏成在之畠方ハ帳面ニ可書載」と「夏成」の把握を命じている。「夏成」記載のある事例は山岸〔30〕、大味〔34〕、中山〔38〕、小野〔39〕、花谷〔42〕、飯島〔43〕の六ヶ村ある。中山村では「わた二百目 夏成」、小野村で「廿五匁 わた二て 夏成」「百匁 芋二て 同(夏成)」とある。飯島村では「此内式石ハわた有、夏成」とある。「わた」納入が多く行われていることがわかる。奥野村では「小物成銀 七匁八分七厘五毛 牛馬錢 ……小堀新助判」〔92〕と表紙裏に記載があり、「牛馬錢」と呼ばれる小物成があった可能性があるが、この検地帳は写であり、表紙裏という記載場所から検討が必要であろう。

おわりに

奥書記載を中心に検地帳の特徴を見てきたが、最後に本文記載部分の若干触れておこう。(本格的な分析は別稿で整理したい)。本文の一筆毎の記載項目は、典型的には①品位、②地目、③小字、④面積、⑤分米、⑥名請人から構成され、検地帳によっては一筆に対する注記や名請人の注記が見られる場合がある。これらの項目が一丁に十数行が記載される。筆数が多くなると帳面が複数冊に及ぶ場合が見られ、この場合は一般的に表紙に「〓冊内〓」というような記載がある。越前国慶長三年検地帳では、このような冊数記載は全く見られなく、一村で複数帳簿にわたる検地帳の形態は管見の限り存在していないようである。地目記載の形態は、複数帳簿形態を考慮せず、一冊の中の記載方式で分類することが可能である。検地帳掲載の地目は、田・畠・屋敷を基本とするがこれらどのような順位やまとまりで帳簿に掲載されるかには違いがあり、大きくはⅠ田畠屋敷混合記載とⅡ田畠屋敷別記載に分けられる。

Ⅰ田畠屋敷混合記載：井上・小堀・新庄・建部・長谷川・服部・速水・御牧・吉田

Ⅱ田畠屋敷別合記載：伊東・木村・朽木・駒井・若杉・林

Ⅱ-1 「田」・「畠」・「屋敷」の三別記載

Ⅱ-2 「田」・「畠」・「屋敷」の二別記載

Ⅱ-3 「田・畠」・「屋敷」の二別記載

混合記載は、文字通り一筆の記載順が地目によるまとまりがなく記載される形式である。一方、別記載とは坂北郡梶浦村〔33〕に見られ

るように「田方」「畠方」「屋敷方」と文言の区切りがあり、地目がまとまりをもって記載される形式である(Ⅱ-1形式)。中には「荒田分」「荒畠分」などと荒田畠について別項目をたてて記載される事例も存在する。また、下毛屋村〔5〕では「畠方」との区切りがあり、田と畠は別記載であるが、畠方に屋敷が記載され、畠屋敷部分は混合記載形式となっている。新村〔60〕では、明確は区切りの文言はないものの、田は最初にまとまって記載され、後半分は畠屋敷の混合記載となっている。新保村〔49〕では前半部分の田畠混合記載であるが、最後には「屋敷」と区切り文言が存在して屋敷だけが別記載となっている。〔6〕〔76〕〔26〕も同様である。これらの記載形式の相違は、担当奉行の相違によると見られる。奉行長谷川は混合と別記載の両形式を使用しているが、他の奉行ではどちらかの形式を採用している。つまり形式の違いは担当奉行の裁量に基づいていると見られる。

一筆の「面積」は、基本的にはすべての検地帳に記載される。単位は町反畝歩である。一部に五畝を「半」とする事例が見られ、担当奉行朽木と小堀の検地帳に限定される特殊な記載方式である。「分米」は、面積に斗代を乗じた数値であるが、分米が記載されない場合がある。担当奉行若杉・長谷川・林の検地帳である。

また、目に付いた点のみの指摘であるが、奉行による記載方式の特徴が指摘できる。

奥書記載項目や記載順、地目の構成と斗代設定の多様性、本文記載構成や「半」単位の使用など、若干の「本文」記載を特徴を含めて、「奥書」記載に注目すれば帳面により記載項目や記載方法の相違が見られる。一方、帳面構成は奉行毎では一定の統一性が見られることか

ら、奥書分析による相違点の多くは奉行の相違であることがわかる。つまり、検地帳の作成は、その多くを奉行の裁量に基づくことを示唆する。このことは検地条目に基づく統一的な検地ないしはその結果としての検地帳が作成されたと思われるが、奉行裁量の多さを物語っている。検地実施の眼目から見れば、相違する記載項目や記載方法は重要な項目ではないことを示している。逆にみれば統一され必ず記載される項目こそが検地の本来的な項目を示していると推定できようか。

検地における検地奉行裁量や主導性の重要さは、すでに木越氏や谷口氏によつて指摘されている。谷口氏は、池上裕子氏が検地作業のみならず検地帳記載内容の決定に村側の参加が不可欠であるとする見解を批判して、文禄三年伊勢国太閤検地関連史料から、秀吉の定めた基準や荒認定などの奉行裁量など検地に際する権力側の主導性を重視する立場を取っている^①。検地条目の「見計」文言の象徴されるように検地奉行の裁量の存在が確認されるのみならず、奥書内容からも文禄三年伊勢国検地より奉行裁量部分は大きかったことが指摘できる。しかし、越前国全体の検地が短期間でしかも奉行は複数の郡をまたがり検地を担当している特徴点は、どのように理解できるのであろうか。結論から言えばこの検地の実施は在地側の協力体制が不可欠であったことも示しているのではないだろうか。また、検地帳下付に際しては在地の請状の提出が求められることは、奉行の恣意性を極力排除することが認められていることから、奉行の主導性や裁量性の評価がもう少し検地実施の内容から検討される必要があるのではないだろうか。

【注】

- (1) 安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提」(『歴史学研究』一六三・一六四、一九五三年、のち『日本封建社会成立史論』上、岩波書店、一九八四年所収)、同「太閤検地の歴史的意義」(『歴史学研究』一六七、一九五四年、のち『幕藩制社会の成立と構造』御茶の水書房、一九五九年所収)。太閤検地論争については、社会経済史学会編『封建領主制の確立―太閤検地をめぐる諸問題―(有斐閣、一九五七年)を参照。また、太閤検地研究史については、谷口央「太閤検地研究の動向とその課題」(『幕藩制成立期の社会経済史研究―検地と検地帳を中心に―』校倉書房、二〇一四年)を参照。
- (2) 安良城・勝侯論争関係論文は、勝侯鎮夫「遠州浜名神戸大福寺領注進案について」(『日本歴史』三二〇、一九七五年)、同「戦国大名検地に関する一考察―恵林寺領『検地帳』の分析―」(永原慶二編『戦国期の権力と社会』東京大学出版会、一九七六年、同「戦国大名検地について―安良城盛昭氏の批判に答える―」(『史学雑誌』九二・二、一九八三年)、安良城盛昭「戦国大名検地と『名主加地子得分』・『名田ノ内徳』―勝侯鎮夫『戦国法成立史論』によせて―」(『史学雑誌』九〇・一八、一九八一年のち『日本封建社会成立史論』上、岩波書店、一九八四年所収)、同「戦国大名検地の分析方法と具体化―大山喬平・勝侯鎮夫氏の大福寺領分析の両検討と勝侯『反論』についての両批判もあわせて行う」(一九八三年六月歴史学研究会中世史部会報告レジュメ)。
- (3) たとえば、黒田基樹氏は「これまでの戦国大名と織豊大名との間に決定的な相違を設定してきた太閤検地論・兵農分離論は、もはやそのままでは成り立ちえない」と「中間得分否定、耕作者の直接把握、全剰余収奪については、その政策志向をも含めて、…かつての太閤検地論が論拠とする諸点はことごとく否定されつつある」と指摘している(『中近世移行期の大名権力と村落』校倉書房、二〇〇三年)。
- (4) 速水融『近世初期の検地と農民』和泉書館、二〇〇九年。所収される論文は一九五〇年代終わりから六〇年代にかけてのものであるが、当時の太閤検地論争とは別の視点から検地帳分析をおこなっており、学ぶべき点が多い。
- (5) 平井上総『長宗我部氏の検地と権力構造』(校倉書房、二〇〇八年)。
- (6) 前掲注(1)谷口央『幕藩制成立期の社会経済史研究』。その他、今村真「太閤検地の土地把握と計算・記述能力(上)(下)」(『織豊期研究』一四、一五、二〇・二一・二三年)。
- (7) 速水佐恵子「太閤検地の実施過程」(『地方史研究』六五、一九六三年)。
- (8) 平井上総「豊臣期検地二覧(稿)」(『北海道大学文学研究科紀要』一四四、二〇一四年)。太閤検地帳の集成は行われていない。かつて宮川満氏が検地の基本資料についての資料集を刊行している事例があるが(宮川満『太閤検地論第三部 基本史料とその解説』御茶の水書房、一九六三年)、現在、豊臣秀吉文書の集成が行われつつあるなか(『豊臣秀吉文書集』第一

卷、吉川弘文館)、検地帳の集成も行われる必要がある。自治体史の編纂の中で近世資料編に活字化されることが多いが、検地帳の分量は多くを割くことになることから、残存の全ての検地帳が活字化されなかったり、本文が省略される場合も多く見られる。

- (9) 検地帳の史料論的研究は、近世文書一般の解説なかで取り上げられるに過ぎない。例えば、地方史研究協議会編『近世地方史研究入門』(岩波全書、一九五五年)第二章史料の利用法第一節村の概要に検地帳が取り上げられている。佐藤満洋『織豊政権文書 検地』(『日本古文書学講座』6近世Ⅰ、雄山閣出版、一九七九年)。検地指出目録、検地帳、検地条目を取り上げる。大口勇次郎「在方文書 土地・貢租」(『日本古文書学講座』7近世Ⅱ、雄山閣出版、一九七九年)で「検地帳の記載様式」「検地帳の作成」を解説する。検地全体の概説では、神崎彰利『検地―縄と棹の支配』(教育社歴史新書、一九八三年)があるが、検地帳の史料そのものの分析は概説の域を出ていない。検地帳の外形に注目した成果としては、山上卓夫「文禄四年検地帳の形状について―越後国と大和国の検地帳―」(『かみくいむし』四九、一九八三年)がある。検地帳の縦横の長さだけでなく、表紙の綴じ穴の位置・形状、綴じ紐、割印などに注目している。
- (10) 前掲書「検地帳の作成」で大口氏は、江戸初期の延宝初年までは(慶安二年検地掟、延宝二年の諸事覚書)、正本を領主側に備え村で写本を作成して奉行が書判を付けて名主百姓に渡

すのが原則であった。延宝五年の検地条目、元禄の検地条目では本帳が奉行から代官へ、そして代官から村名主へ渡され、写帳が勘定所や代官に提出され村に下付された検地帳が本帳とする。享保十一年の新田検地条目からは、再度の取り扱い変更が行われ、二冊の検地帳を村名主と勘定所に備え、正副の区別を行っていないと指摘している。

- (11) 藤井讓治「豊臣政権と若越」(『福井県史』通史編3近世Ⅰ、一九九四年)。県内市町村史の記述。

- (12) 木越隆三「越前惣国検地と検地手法」(『織豊期検地と石高の研究』桂書房、二〇〇〇年)、同「太閤検地帳はどのように作成されたか」(渡辺尚志・長谷川裕子編『中世・近世土地所有史の再構築』青木書店、二〇〇四年)。

- (13) 検地帳の発給時における村からの請状の提出については、藤木久志「村請の誓詞」(『村と領主の戦国世界』東京大学出版会、一九九七年)を参照。

- (14) 『福井県史』資料編の解説。長谷川祐子「江戸時代初期の越前に現れた『領』」(『福井大学教育学部地域科学部研究紀要(社会科学)』四、二〇一三年)では一四九冊としている。また、長谷川論文では、検地帳のタイトルにある「々郡」などの広域地名から近世の「領」に至る支配領域形成の史料として利用している。

- (15) 佐藤満洋「太閤検地における村位別石盛り制の研究」(『大分県地方史』五八・五九・六一・六二・六三、一九七〇〜七二年のち藤野保編『九州近世史研究叢書Ⅰ 九州と豊臣政権』国書刊

行会、一九八四年所収)。

(16) 検地帳本文には、漆・桑・茶などの本数の注記が見られるが、奥書の小物成集計には反映されず、「小物成」との関係は不明である。

(17) 谷口史「太閤検地の奉行裁量と検地帳―伊勢国太閤検地関連の新出史料紹介を兼ねて―」(『人文学報』四一五、歴史学編三七号、二〇〇九年、のち前掲書『幕藩制成立期の社会経済史研究』に所収)。

このクラスに〈他者〉はいますか

— 教室という場で文学を通してできること

国語科 柿原和宏

はじめに

あれは、安岡章太郎「サーカスの馬」を締めくくる授業でのことだった。「まあいいや、どうだって」。これは、そんな台詞を口癖にする少年をめぐる小説だ。少年は自分のことを劣等な存在だと信じていて、ある日、サーカス一座に飼われているやせ馬と出会う。その姿は少年の目に何ともみずばらしく映るのだが、馬が自分と重なって見えてからは「その馬について、いろいろに考えることが好きになる」ところが実は、その馬はサーカス一座の花形なのだ。小説の最後にサーカス小屋に何となく入り、はじめてそのことを知った少年の驚きは、このような言葉で書かれている。

いったいこれはなんとしたことだろう。あまりのことに僕はしばらくあつけにとられていた。けれども、思い違いがはつきりしてくるにつれて僕の気持ちは明るくなった。

「思い違い」はやがて、ある明るさへと変わっていく。自分と同じような落ちこぼれた存在だと思っていた馬の、あまりにも華々しく見えたその正体。それを感じたばかりは、自分にも何かできるような気がして、勇気づけられたのではないか。この場面の明るさについて、こんな言葉でまとめたとき、一人の生徒が口を開いた。

「勇気づけられるって、ありえないでしょ。自分と同類だと思っただやつが、実はすごかったなんて知ったら、もっと卑屈になるに決まっている！」

一瞬、頭が真っ白になりかけたが、これは何かのきっかけになるかも知れないと思っただけで、持ち直した。きみの感じ方も当然ありうるだろうし、少年には共感できなくてもかまわない。ただ、少年のように馬の活躍を見て明るくなるという論理や実感のあり方があることについては認めるべきじゃないか。このように説明したものの、生徒の論駁は手強く、そして真つ当だった。最後に提示される読みがぐらついた印象のまま授業が終わってしまった。試験という制度上、クラスの生徒たちにはかわいそうな結果になってしまった。

あるとき、どうすればよかったのか。答えは出なかったが、何度も思い返しているうちに、この失敗は「あるとき」だけの問題ではなく、教室で小説を「国語教材」として教えがちだった、「これまで」の態度にも起因していたことに気づき始めた。

もっと考えればこのことは、現在という時代状況の中で、文学を通して教室で何かをささやかに行っていく、「これから」に繋がる問題にもなりうるのではないか。ここでは、問いの立て方を間違えていたのだ。「問題を出すということが一番大事なことだ。うまく出す。問題をうまく出せば即ちそれが答えだ」。若き日のアンリ・ベルクソンの言葉を踏まえながら、問いを立てるといふ行為の重要さを述べた小林秀雄の響みにならえば、問いの質こそが、まさしく「問題」として事象を切り出し、その位置づけを決めていくだろう。

あるときどうすればよかったのか、この問い方では、問題は自己の範疇を一步も出ない。たとえうまく答えられるようになったとしても、ただ記憶の中で過去に行った一つの授業のまとめが上手にいつても、失敗の意識が薄れるだけのことである。そして残念ながら、過去を変えることは誰にもできないのだ。ではこの失敗を、より大きく国語教育の問題へと接続していくためにはどう問い直せばよいのか。

今の時点では、こう問うことにしようと思っている。一つは、「教室」という場で、小説の登場人物と学習者には、どのような関係が可能なのか。後述するように、この問いに答えるには複数の読者が小説を読む場（「教室」ではなく、可能性としての場として）で生起することであろう、位相の異なっていくつかの〈他者〉について思考することが必要になると考えている。

このことによつて、この問いは学習者と登場人物だけでなく、学習者どうしの、あるいは学習者と文学テキストとの、それぞれの関係を考え直すことにもなるだろう。もう一つは、授業の中でそうした関係づくりをどう方法化していけばよいのか、である。この二つの問いの先には、かつて社会的・文化的に自明とされていた「特殊な意味」を失つて久しい文学が、いまを生きる生徒たちのいる学校現場で何ができるのか、ささやかながら答えていくことを目指している。本稿を通して行われる思考は、あくまで、そのことに割かれるはずだ。

1、登場人物は〈他者〉と出会うか

千田洋幸は、『テキストと教育』（溪水社、二〇〇九・六）の中で、「サーカスの馬」の結末に少年の自己発見を読ませることについてこう批判する。

馬はいつもと同様に観客の前に登場し、仕込まれた芸を訓練通りに反復しているにすぎない。その馬に対して勝手に同類意識を感じていた「ぼく」が、「馬本来の勇ましい活発な動作」などと人間中心の見方を勝手に押し付け、「思い違い」に気づいた気分になり、勝手に興奮と歓喜をかき立てているだけの話である。

ここから千田は、少年が獲得したのは「新しい自己」が発見されたという幻想そのものに過ぎないと論じている。ここでの批判が、「教室」という空間での道徳的なイデオロギーと、主人公の成長や自己発見をテキストから演繹的に読むことが、安易に結託しやすい状況

を踏まえたものであることはよくわかる。事実、千田はある授業参観で、主人公の成長を読むことで「教師に期待される読者像をきちんと演じる学習者」の姿を確認してもいるからだ。興味深いのは、「学習者」として内面化された読者像の一つとして、「小説教材の主人公に肯定的である（ふりをする）べきこと」が挙げられていることだろう。はたして、学習者にとって登場人物とは「肯定」すべき人格を持った特権的な存在なのか。そうだとすれば、登場人物と学習者とは、人格的な価値を与える／受け取るという上下関係を結ぶことしか許されないのか。

まずはそうした関係を前提として、登場人物がどのような性格を持たされているのか、いくつか教材をみながら確認しておきたい。そうすると、多くの国語教材が存在どうしの出会いを扱っており、とくに小・中学校教材の登場人物が行う他者理解には、ひとつの傾向があることがわかった。

「サーカスの馬」は中学校教材である。小説内容に戻ると、ここでは少年と馬との出会いが題材となることがわかる。「痛々しかった」というはじめの印象が、ある好意へと変わるとき、少年の中に何が起きたのかを考えるには「その馬が、やっぱり、（まあいいや、どうだって。）と、つぶやいているような気がした」と書かれていることが手がかりとなるだろう。少年は馬の存在を「全くとりえのない生徒」としての自己像と重ねることで理解しているのである。自分と同じような存在がこの世界にいるという感覚は、たしかに少年にアイデンティティを与えるだろう。しかしながら、前述の引用において、千田が少年について「勝手に同類意識を感じていた」と評価するよう

に、ここでの馬のイメージは少年の中で増幅されたものでしかない。あえて言えば、こうした少年の実存感覚は、馬の他者性を抑圧したところに成立している。現に少年は、サーカス小屋において自分という存在に当てはめることで理解していた馬のイメージと、現実の馬との「思い違い」を突きつけられてもいる。⁷

こうした齟齬は、人間と動物という設定上、言語を介したコミュニケーションが断たれているため仕方ないともいえるが、実は、「サーカスの馬」のように異類どうしの関わりを扱った国語教材は少なくない。代表的なものとしては、新美南吉「ごんぎつね」がそうである。千田による同著にも「ごんぎつね」を論じた箇所があるが、ここではごんの台詞として書かれた「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」という表現に拠りながら、「同類」として兵十の存在を理解し、アイデンティティを形成する登場人物のあり方が論じられる。

自己の存在を一步も出ずに他者を理解する傾向は、人間どうしの関わり合いを描いた教材でも同様である。例えば、すやまたけし「素顔同盟」を中学の授業で扱った際に、生徒の感想に少女との出会いを境として少年の世界像が変化したことを指摘するものがあった。ああそうかと気づかされたが、仮面をはずすという禁忌を犯した少女に自身と同じ事情を読み取り、「初めて同類に会えた」と理解する「素顔同盟」の少年もまた、こうした登場人物たちの系譜にあるといえるだろう。ここでは、人間どうしの場合でも、コミュニケーションが十分に行われないまま、他者像は自己の欲望を仮託されて形成されていく。存在どうしの出会いと、そこでの他者理解に関して、ここにはひとつの思想があるようだ。登場人物と「学習者」の序列を前提とする

ならば、学習者たちは彼／彼女から、「同類」として仮構された存在と出会うことでアイデンティティを獲得するようなあり方を学ばなければならぬことになる。「学習者」が登場人物を肯定しなければならぬとすれば、奇しくも、「学習者」と登場人物との関係は、別の存在に対する登場人物のあり方と構造的な一致をみることになる。そこには、〈他者〉などいない。

だがもちろん、以上の問題は権力空間としての「教室」という条件と、道徳的な視点によって選ばれた「国語教材」という下部構造から想定されるものである。現実的な授業の内実には、教師の支援や指導方法が当然関わってくるだろうし、基本的には、この状況を何とかしうるのも教師しかいないだろう。同じように、学習者もまた、授業で発せられる道徳主義的なメッセージをそのまま受け取って規律訓練を繰り返すだけの透明な存在ではない。

学校という教育の場で小説が扱われる以上、授業の主体はあくまで学習者にある。教室は小説を自律した芸術とみなして、学習者がそこから思想的・美学的価値を受け取るような文学主義的な場であるべきではないし、そうした芸術の体現者としての作者を作家論的に神格化する場となるべきでもない。やはり、教室とは「読者としての学習者の中に形成されたものは何か」を大切にしながら、あくまで小説の読みを通して学習者が「自己」についての考えを深める場としてありたい。比喩的な言い方をすれば、ここでは小説を通して学習者が「自己」を読むことができればよいのではないか。そのためには、「教室」でのふるまいを内面化し、教師に期待された読者像を演じるトレーニングの場ではなく、一人の読者として学習者が読みに関わる動的な場面

として学習活動を捉えたいし、授業の中では道徳的主体としての「学習者」ではなく、いかに「読者」になれるような支援ができるのかが重要なのである。

そのように考えれば、学習者が登場人物から人格的に教育・馴致されるような優劣のある関係は解消されねばならない。言うまでもなく、学習者が「自己」を読むためには、その比較項となるような対象として、自身と差異を持ったうえで、かつ並列関係にある存在が必要とされる。ならば、教材で出会う登場人物とは、まずは読者としての学習者の内部に現象する、最初の他者として現れるべきではないか。他者によるあり方を通して、学習者が「自己」を読むことができる時間をこそ、授業の中で保証する必要があるだろう。では、「自己」を読むための〈他者〉とは、どのような質のものとして捉えればよいのか。またその存在を、授業の中でどのように立ち上げていけばよいのか。

2、主題的読みと文学的読み

小・中学校教材に〈他者〉という存在、あるいは〈他者〉との関わりを描いた小説が多く取り上げられていない以上、〈他者〉や、その存在から「自己」を読むことは授業の中で方法化していかなければならない。一方で、高校教材の登場人物には別の傾向があることもわかってきた。後述するように、道徳的な観点から批判され、「学習者」が同化しにくい人物が多く選ばれているのである。ではこうした存在は、学習者にとっての〈他者〉となりうるのか。これらのことについて、ここでは授業で小説が読まれるときの二つの態度を視座として考え

てみたい。

国語教材として小説が扱われる場合には、技能目標、態度目標とともに、価値目標が設定されることが通例である。教材はあくまで生徒にとつての学習の素材であるから、文章を読む技能を培うことや、言葉や言語活動への態度を育成することと合わせて、小説の読解の先に、学習者が価値のある認識を獲得することも志向される。価値目標とは、三つめの考え方を具体的な教材に応じて設定したものであり、小説内容によつて喚起される「人間に関するある問題」の中でも、とくに学習者にとつて価値や強度を持つと考えられるものが目標として選ばれるというわけだ。

例えば、高校の定番教材に、芥川龍之介「羅生門」がある。もはや紹介は不要かと思われるが、「飢死にをするか盗人になるか」という問題を抱えた下人が、生きるために悪事を働く老婆の姿をきつかけに、「盗人」になることを選択する、という内容を持っている（「羅生門」もまた、自己を規定する同類との出会いを描いている、といえるかもしれない）。「羅生門」の場合、自分が生きるために他人を犠牲にしてよいのかという倫理的な問題を認識し、それについて考えを深めることが価値目標になりうるだろう。

したがって、授業の際には下人が直面している倫理的な問題を主題に、読みが構築されることになる。三浦和尚の言うように、価値目標による主題の設定は、その教材を学習者と読むことの内容的な意味を認めるうえで必須となるとともに、小説の理解を深める読み方を技能的に習得することを促していく。また、主題となる問題を軸に小説の言葉を再構成しながら思考を重ねていく中で、物語として「飢

死にをするか盗人になるか」という問題を生きた下人の姿が読者に突きつけられる。その過程で、自分ならこの問題についてどう判断するというかたちで、学習者の内部に意見としての「自己」が読まれることをもたらしていくだろう。小説から価値が想定される主題を前景化し、それに基づいて読みを構築・展開するこうした態度について、ここでは主題的読みと呼ぶことにしたい。

学習者の学習を担保することが教育の前提であるため、主題的読みは授業で小説を扱ううえでの一般的なあり方だと思われる。したがって、教室では本来であれば複数ありうるはずの読書行為（娯楽としての読書、消費としての読書など）から、主題に落ち着ける読み方を選択して行う必要がある。そういった読書空間に固有の問題として、いくつか注意されなければならないことがあると考える。

まず一つは、主題的な読みが「教室」の道徳主義と結託した場合、言うまでもなく、道徳的な規準から好ましくない意見を抱いた生徒の「自己」はもちろんのこと、「学習者」として道徳的な意見を表明した（させられた）生徒の「自己」もまた、同じように無視されることである。このことへの配慮は現場においては当然のことと思われるが、もう一点強調しておきたいのは、小説が学習の素材であるとしても、あくまでも先にあるのは小説を織り上げていく言葉であり、その読解においてはじめて主題が捻出されることである。この順番を間違えた場合には、生徒が出会うべきはじめの〈他者〉である、登場人物の固有性が無視されてしまう。それは同時に、学習者が獲得する「自己」についての認識の質にも関わっていく。

主題的読みを授業で行うときには、小説の細部と、設定した主題と

を往還しながら読解が進められる。最終的に小説の読みが主題へと狭まっていく以上、読みの過程でどうしてもその小説に固有であるはずの言葉のまとまりや連なりは、登場人物が抱える「人間に関するある問題」と、それについての「選択」だけに要約されることになる。つまり、主題的読みの立場を押し進めれば、小説内容は簡略化され、必要なのは価値目標に関わる部分だけとなる。

そうだとすれば、「羅生門」は、倫理の「問題」に悩んだ結果、利己主義を「選択」という内容を持った他の小説と何らの区別もなくなるだろう。われわれは、同様のプロットを「国語教材」として高校生に読まれ続けている多くの小説に見ることができる。詩作に没頭するために妻子を犠牲にした李徴（中島敦「山月記」）や、出世のためにエリスを犠牲にした豊太郎（森鷗外「舞姫」）、恋愛のために親友を犠牲にした「先生」（夏目漱石「こころ」）……。いずれも、固有の状況において倫理的な問題に悩んでいたはずが、利己主義を選択したという「結果」だけをみれば、それぞれの登場人物のあり方に差異はなくなる。

このように、小説と乖離したところで主題を問うことが自己目的化する時、極端な場合には、主題的な要約は教訓性を付加されて「エゴイズムはいけません」という寓話アポロギとなり、道徳主義によって学習者の「自己」を抑圧する「教室」がやってくる。

またそうではなく、主題的読みを通してその「問題」に関する「自己」の意見が読めた場合でも、登場人物へのあり方は、学習者の「自己」に基づいて肯定されるか、あるいは批判されるかのどちらかしかないだろう。「羅生門」では、倫理的な問題について下人は自己犠牲が、

利己主義かの「選択」を迫られたが、要約のかたちで「結果」だけを見てしまえば、学習者が促える登場人物像は下人における二つの選択肢に依じて二元（単純）化するだけである。そこでの学習者と登場人物との関係は、登場人物の行動と「自己」の意見とが同様であれば肯定されるし、意見が異なれば批判されるしかない（高校教材の場合、「学習者」は多くの登場人物を批判するだろう）。

ここには登場人物を参照しながら得られた「自己」の姿が、意見というかたちだけに還元されることの問題もある。石原千秋の言うように、「自分の「意見」などつねに「とりあえず」のものでしかないと構え¹²」がなければ、変化を受け入れる柔軟性を失うだろう。そして何より問題なのは、これでは小・中学校教材の場合と同じく、学習者が〈他者〉と出会えていないことである。

言うまでもなく、〈他者〉とは自分と意見が分かれた存在、というような単純なものではない。たとえある意見を共有していても、自分と相手との間にははかり難いほどの距離がある。相手が意見を形成するときの、ときに飛躍としか思えないような論理や、理解不可能な動機のある方、問題についてのそもそもの認識の差異というかたちで、〈他者〉は、ふとした瞬間に姿をあらわすものだ。「人生の分だけ言語がある」¹³。野矢茂樹の言葉に端的に表れているように、言語論的転回以降、ひとつひとつの言語の意味や、それを媒介とした世界認識が個人によって異なることはよく知られている。各人の、それぞれの言語を形成してきたのは同じものはひとつとないような経験であり、そこにこそ、〈他者〉は胚胎している。

コミュニケーションの齟齬、というかたちで我々は日常、そうした

〈他者〉と接する多くの機会を持ち、相手と自分とを支える概念体系の同一性に違和感を持ちつつある。言語という主体と密接に関わるものを扱うのが国語科であるなら、教室での活動を通してそうした違和感を形成している言語論的背景に気づかせ、さまざまな〈他者〉を可視化していくことが必要ではないか。そのためには、意見という「結果」よりも、もっと細かいところに〈他者〉を設定しなければならぬだろう。まさしく読解が迫ろうとする〈他者〉の質こそが、学習者に読まれる「自己」も規定していくからだ。

ならばもう一度、登場人物のあり方を媒介しながら、小説が「人間に関するある問題」を提出している意味について考え直す必要がある。小説には、その「問題」に登場人物が直面し、立場を「選択」するまでの「過程」が示されており、言語化されたこの「過程」に注目すれば、「問題」が認識され、それについて思考される言葉の総体として小説を捉え直すことができる。まさしくここにこそ、はじめの〈他者〉に出会う機会とともに、概念体系としての「自己」を考ええる契機が開かれているのである。小説の読みを通して、登場人物が生きている状況から「問題」を立ち上げ、思考するときの言葉の中に自分との差異を考えていくことは、学習者が「自己」をつくっている言葉のあり方を照射していくはずだ。

コミュニケーションにおいて、相手の意味を翻訳して「分かる」ときに、野矢茂樹は自身が習熟している概念体系の「身体感覚」が役に立つことがあると言う。「スキーになじんでいた人の方がスノーボードにも早く習熟する」という美しい比喻を用いながら野矢が強調するのは、論理構造の対応関係よりも、自身が習熟している概念との恣

意的でアナロジカルな類似が見出されることで、相手による新たな概念体系が理解されることがあるということだ。

このような「身体感覚」——自分の概念体系に固有のアナロジー（類推関係）を学ぶというかたちで「自己」が読まれることはあつていい。言い換えればそれは、「自己」という言語体系における「ハイライクム 範列」と「シラキクム 統辞」の学習であり、「自己」が言葉を紡ぐ場での語の選択（「ノルム 範列」と「ノルム 統辞」の規則・偏向を知ることである。

小説に書かれた〈他者〉の言葉（その語彙、修辞、文体なども含め）に寄り添い、登場人物の実感や論理のあり方の固有性を授業の読みの中で立体化していくことが、学習者が「自己」について考えるときの読み方をも鍛えていくだろう。「人間に関するある問題」を登場人物の言葉を通してどう書いているかという意味で、テキストを重視するこうした態度を文学的読みと呼ぶこととしたい。そして、いままさに接近しつつある〈他者〉と学習者がうまく付き合っていく可能性は、授業において主題的読みと文学的読みを並行して行う方法によって、生徒の中に、ある態度を育むところに開かれるのではないだろうか。

3、「自己」のための三つの〈他者〉について

千田洋幸は「伝え合い」を重視し、十全に「成立」することが前提とされた「教室」でのコミュニケーションについてこう批判する。

授業で学習することができるのは、あくまでも教室というパブリックな場での「伝え合い」なのであり、「建前」でもって他者とコミュニケーションすることのできる能力なのである。（…）

このことと、コミュニケーション行為の不可能性を知ることとは、いつてみれば表裏の関係にあるといえよう。多少逆説的な言い方かもしれないが、学習者は、他者の他者性に出会える瞬間などそうたやすく訪れるものではないという現実、対話すべき時には誰とでも対話しなければならないという社会的要請をも、同時に学ばなければならないのである。¹⁶

ここでは、「伝え合い」というイデオロギーによって生じる「建前」のコミュニケーションを踏まえながら、たやすく「他者」に出会うことができない「教室」の現実が論じられている。千田がそうしたように、「他者」について考えるときにエマニュエル・レヴィナスを引かない人はいないだろう。レヴィナスによれば、「顔」という現象の「他者」とは、「内容となることを拒否することでお現前」¹⁷し、同一化しようとする「自己」の暴力性をも暴いていくという。

それほど困難な「他者」とわずかに出会う可能性があるとすれば、「自己」とは別のあり方に直面したときに、とりあえずそれをそのまま認める態度の中に出てくるだろう。そこに文学が関われるとしたら、やはり読み方として、そのための構えをつくっていくことしかないのではないか。まずは意見としての「自己」を持つこと、そのうえで「自己」とは別の「他者」のあり方を知ること。「他者」として認めた存在と「自己」とにどのような関係が可能か考えること。「他者」との邂逅にはこうした手順が考えられるが、読みの中で三つの過程を方法化するうえで提案したいのは、A—主題的読み（内部）、B—文学的読み、C—主題的読み（外部）というサイクルである。

それぞれの活動について説明すると、Aでまずは、教材から主題となる「問題」を取り出して学習者それぞれに認識させ、「問題」をめぐる思考に追い込んでおく。ここでのねらいは、Bの段階で「自己」のための比較項となる登場人物の「他者」性を生じさせる準備として、意見としての「自己」をあらかじめつくっておくことにある。具体的には、三読法における「通読」の段階のあとに、ワークシートなどで「問題」に対する「自己」の意見を表明できる設問を置いておく支援などが考えられる。

Bの文学的読みでは、小説に書かれた「問題」について、登場人物が認識・思考する「過程」を追う。登場人物の意見だけではなく、それを形成している言語のあり方まで掘り取るように読むことで、学習者が準備していた「自己」とは別のあり方に出会えるように積極的に仕掛けていく。ここで重要なのは、登場人物の論理や実感のあり方に共感できないことと、それが理解できないことを区別することだろう。それは、批評と読解の区別といってもいい。もちろん、この段階では行うのは読解である。A、Bという段階的な読み方は、「自己」とは別のあり方に対しても、まずは寄り添ってみる態度を育むことを目指している。これらの学習活動で立ち上げようとするのは、「自己」とは別の概念体系としての「他者」^①であり、これは違和感や、ときには理解不可能性として学習者の内部に現象する。

「他者」の言葉に耳を傾けたあとは、「他者」をもとにして「自己」を考えるために、「他者」についての言葉を発していく活動が必要である。そのためCの段階では、主題的読みを再び、外部に向けて行っていく。この「外部」というのは三つの意味を含んでおり、ひとつは

登場人物の「外部」を指す。登場人物の外から彼／彼女たちを相対化するものとしてまずあるのは、テキストそのものだ。大きな文としての小説のディスクリールは、Bで中心に扱う登場人物の内面についての記述（あるいは厳密に、視点人物に内的焦点化した語り、と言うべきかもしれない）だけでなく、それを囲む多くの文から成るからである。

「テキストは、きまつて「文」を完結させるような「階級的」な秩序ではない」。あまりにも迂闊に増殖し、ときに不用意に書かれる小説の言葉は、蓮實重彦の言うように「矛盾する複数の「文」の共存」をつねに引き起こしている¹⁸。ささやかな一語が視点となる登場人物を相対化する細部になることもあるだろうし、意識的に小説内で語り手や別の登場人物による批判がなされることもある。いずれにしても、登場人物の選択・判断だけでなく、それを含むかたちでテキストがどう「問題」に対する態度を提出しているのか、というところまで授業で問われる必要があるということだ。文学を読むとは、テキストの無数の言葉に向き合う中で、暫定的にいくつかの細部を関係づけているに過ぎないのだと知るきっかけを持つことは、後述する〈他者〉③への可能性をも開いていくだろう。

とはいえ、教室において登場人物を相対化する最も重要なものは、読者としての学習者の「自己」である。前述したことを踏まえればこれは、「読解」した登場人物のあり方を「自己」に基づいて「批評」する段階となる。ここでは登場人物という言葉を追う中で学習者が出会った〈他者〉性を言語化させることで、登場人物のあり方を〈他者〉として認識させている、「自己」に固有の概念体系を把握・理解させていく。またここには、〈他者〉のあり方を評価する「自己」を立ち

上げるねらいもある。学習者を評価の場に追い込むことは、その過程を通して、「自己」とその〈他者〉にどのような関係が可能なのか、考えることにも繋がるからだ。

主にCの段階で行われる「自己」についての思考は、講義の形式やあるいはワークシートのかたちでそれぞれの学習者の内部に留めておく必要はない。学習者が「自己」とする概念体系は、教室にいる多くの〈他者〉たちのそれと相互に参照されることで、さらに理解・認識の質を高められるはずだ。つまり、もうひとつの「外部」とは、「自己」の外を指す。そこには、別のあり方への態度を学ぶ同様の活動を終えたほかの学習者たちが、〈他者〉として待っている。この活動では現実には「自己」とは別のあり方を生きている、存在としての〈他者〉②に出会えるはずだ。

無数の〈他者〉に囲まれて生きていることを知るとともに、「自己」と定位したものがやりとりを繰り返すたびに考え直される偶然的でスリリングな場は、学習者にとって「自己」がつねに変化の可能性を持った暫定的なものに過ぎないことを突きつけるだろう。

相手を別のあり方として捉えたまま、それに対して「自己」のあり方を考えようとする態度の学習と並行しながら、学習者は位相の異なった無数の〈他者〉にさらされていく。そうした中で、「自己」の持つ概念体系では全く理解できないけれども、何か惹かれるものを持ち、これをわかろうとするためには「自己」のあり方を変化させてもいいと思えるような〈他者〉に出会えるかもしれない。野矢茂樹に従えばこれは、いまの「自己」に思考可能なものの総体である「論理空間」の外の、意味の他者と呼ばれる「誘惑」だろう。

他者の謎は、その誘惑の声とともに過去に居残る。(…)それは、私の現在の論理空間に収まりきれないものとして、私の論理空間を変化させる力として、そこにある。¹⁹⁾

野矢によれば、「誘惑」として抱え込まれた〈他者〉は、いつまでも「自己」の中に残存し、それを理解するために語り続けることを促す。その「促しの力」こそが、「意味の他者の他者性」²⁰⁾であり、語り直させる行為を通して「自己」の論理空間に変化を迫るのだという。そしてここでは、文学を通して行う学習活動の先に意味の他者―〈他者〉③との出会いと、それによる学習者の「自己」変容を想定しておきたい。すなわち、学習者の思考を開く最後の「外部」とは、「自己」の論理空間の「外部」であり、言うなればこれは授業の課外学習となる。学習者に「誘惑」をもたらすのは、教室にいるほかの学習者かもしれないし、あるいは授業で扱ったテキストかもしれない。だが、いったいわれわれは学習者の中で風化せず、居残るような〈他者〉に、ひとつでも授業で出会わせることができるだろうか。

いずれにしても、意味の他者が現れるのは、そのときの学習者の「自己」に対して、その〈他者〉だから反応が生じるという偶発的なものだろう。「書かれたものと読む人の間の関係が外在的」²¹⁾で、どんな読者に対しても普遍的な力を持った教材はない以上、授業でできるのは、多様な〈他者〉との出会いを仕掛けることと、読み方を通して〈他者〉への態度をつくることだけだ。あとは学習者を「誘惑」する〈他者〉との偶然的な出会いと、それによる「自己」の生成変化の可能性に賭けてみるしかない。

しかしながら、授業で育まれた別の存在への態度は、やがて意味の他者への循環をつくっていくはずだ。別のあり方に寄り添う行為の反復は、やがて〈他者〉との出会いをもたらず。それによる「自己」変容の経験こそが、また別のあり方への回路を強めていくからだ。本稿で思考してきた言葉はすべて、こうした予感に支えられているし、学習者が〈他者〉との出会いによつて「自己」を変容させる、まさにそのことを肯定する瞬間のために向けられている。

おわりに、〈他者〉のいない時代の学習者たちへ

〈大きな物語〉の消失が象徴するポストモダン時代の到来が言われてから、さらに数十年が過ぎた。自身が学習者だった頃から時代は大きく変わり、生徒たちはデジタル空間に取り囲まれたいまを生きている。ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス(SNS)の発達は、価値観のすばやい共有を可能にし、仲間どうしの連帯を可視化する一方で、メッセージへの即時的な応答を自己目的化させ、コミュニケーションの形骸化をももたらしめている。²²⁾ スマートフォンの普及を背景に広がる、ネット上のやりとりへの依存状況を「接続過剰」²³⁾と呼ぶのは千葉雅也であったが、まさしく学校空間での交友関係がネットを通して放課後にも持ち込まれるならば、生徒はその関係性における役割としての「自己」を演じ続けなければならないし、あらかじめ関係が固定化されたそこでのコミュニケーションには、〈他者〉が現れることもないだろう。

現実における〈他者〉の存在の減少はまた、フィクションにもあてはまるようだ。既にセカイ系というジャンルはゼロ年代に流行して以

降、古くなってしまったのかも知れないが、視点となる登場人物とヒロインとの小さな関係が、中間項を介さずにそのまま大きな世界の問題へと直結する作品構造において、別の〈他者〉が排除されていることは言うまでもない。描かれた内容がそうでなくても、例えば「自己」の欲望を投影した偶像に〈他者〉を押し込め、崇拜する「二次元」的な消費のモードはいまだ根強い。

このように、学習者たちは〈他者〉のいない時代を生きている。もし「学習者」として学ぶ登場人物との関係が、小・中学校における肯定すべき同類や、高校における批判すべき利己主義者の二極に留まるならば、同類の仮構／他者の排除という現在の制度的な関係のあり方を「教室」が補強している危うさを感じてならない。²⁴

かつてスタンリー・フィッシュは、「このクラスにテキストはありますか」という切実な問いに、解釈共同体の概念によって解答した。すなわち、解釈を固定するコードがテキスト内にあるのか、それとも解釈は読者によってのみ生じるのかという問題に対して、解釈はある読者が属し、共有している制度的な基盤につくられていると答えたのである。²⁵「教室」では道徳主義でなくとも、試験という制度上、読みをまとめるうえで、ある解釈共同体を用いざるを得ない。したがって、解釈共同体の内実を変更したとしても、学習者の読みを抑圧する権力空間であることには変わりないのかもしれない。しかし、少なくともここで思考している教室では、解釈共同体の複数性を示すことで、固有の読み方に基づくことの権力を緩和したいし、学習者が属する最も強力な解釈共同体に対してバランスのとれる場でありたい。

そうだとしたら、教室はいつもの関係のあり方を相対化する空間と

して、〈他者〉と関わる場とならなければならない。そこで国語という教科にできるのは、言語によって、主客が抱えている根源的な〈他者〉性と、その可能性を考えさせていくことではないか。学習者にとつて、同類のみとの連帯や、〈他者〉の排除を特徴とする、慣れ親しんだ解釈共同体の読みのルールが通用しない授業の時間はつらいだろうが、〈他者〉と関わることの積み重ねは、いまという時代につくられた関係のあり方や、そこでの「自己」を捉え直していくうえで、かならず意味があると考えている。

「自己」を読むための〈他者〉①、他者に囲まれて生きることを知るための〈他者〉②、「自己」を変容させ、また他者へと向き合っていくための〈他者〉③……。文学を読むことを通して、これら三つの〈他者〉を教室で仕掛け、授業でそうした存在への態度を育んでいくことが、今日価値を失いつつある文学の意義を、新たにづくっていくはずである。

注

1 ここでの「国語教材」とは、道徳的な判断によって選ばれ、道徳的に読まれることを前提としたテキストを指す。テキストは読みと関わりにおいて生成されるため、道徳的な解釈を前提とすれば、あらゆるテキストは「国語教材」となりうる。学習者はテキストとの関係を固定化され、「国語教材」から道徳的な価値を受け取ることを強いられる。

2 文学を定義することは困難だが、ここではいとうせいこうの「国

語を壊すもの」(いとうせいこう×千葉雅也対談「想像する文学と哲学」紀伊国屋ザンシアター、二〇一四・二・二六) という定義を手がかりとして、道徳的なイデオロギーを内破させる可能性を持った言葉の総体と捉えている。とりわけここでは近現代小説というジャンルについて論じている。

3 岡潔・小林秀雄対談「人間の建設」『新潮』(一九六五・一〇)。引用は『小林秀雄全集』(第一三巻、新潮社、二〇〇一・一一)に拠った。

4 ここでの「教室」とは、道徳主義的な権力空間を指す。「教室」において学習者は道徳的なイデオロギーを内面化し、あらゆる活動を通して道徳的主体となるための規律訓練を行っていく。「教室」でのふるまいを内面化した学習者について、論中では「学習者」と表記する。

5 柄谷行人『近代文学の終り』(インスクリプト、二〇〇五・一一)。また東浩紀は、ポストモダンにおいて「動物化」と呼ばれる断片的な快楽を求める消費のあり方が進んでおり、この状況が歴史や文脈を背負い、深い読解を要する文学のようなコンテンツを機能させなくなったと述べている(『動物化するポストモダン』講談社現代新書、二〇〇一・一一)。

6 千田洋幸「文学教材論の前提——三つの「サーカス」に触れながら——」『テキストと教育』溪水社、二〇〇九・六

7 ここでの「思い違い」を支えている馬の活躍すら、少年によって強調された「新しい自己」という幻想の一部に過ぎないと千田は述べているが、はたしてそうか。千田は、少年が馬の巧みな曲芸を形容するときの「馬本来の勇ましい活発な動作」(傍点原文)という

表現を取り上げ、「人間中心の視方を勝手に押しつけ」ていると批判するが、少年による本質主義的な解釈のような人間中心観を批判するならば、千田の言うように「馬はいつもと同様に観客の前に登場し、仕込まれた芸を訓練通り反復しているに過ぎない」かどうかも、わからないはずだ。「もしコウモリの視点を取り去ってしまったら、コウモリであることはどのようにあることなのかに関して、いったい何が残るのであるのか」(トマス・ネーゲル『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房、一九八九・六)。

8 千田洋幸「コミュニケーション能力と国語教育——あるいは、「伝え合う」というイデオロギーをめぐって——」『テキストと教育』溪水社、二〇〇九・六

9 三浦和尙「文学(こころ)を教室で読むことの意味」『日本語学』二〇一三・四

10 三浦前掲論(注9)

11 石原千秋『国語教科書思想』ちくま新書、二〇〇五・一〇

12 石原千秋「『文芸時評』2月号 小説は時代を映すか」『産経新聞』二〇一六・一・三一

13 野矢茂樹「他者の声・実在の声」『他者の声 実在の声』産業図書、二〇〇五・七

14 ポストモダンを象徴する思想である言語論的転回とは、世界は言語であるという立場である。先に存在している世界を言葉で伝えていくのではなく、世界は言語によってはじめて分節化される。そのため、主体の認識は主体の属する言語の文化的・制度的な特徴に依存する。

15 野矢茂樹「分かる」ということ」『他者の声 実在の声』産業図書、二〇〇五・七

16 千田前掲論（注8）

17 E・レヴィナス『全体性と無限（下）』熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇六・一

18 蓮実重彦『『ボヴァリー夫人』論』筑摩書房、二〇一四・六

19 野矢茂樹「他者を語る言葉」『他者の声 実在の声』産業図書、二〇〇五・七

20 野矢茂樹「意味の他者」を読む」『他者の声 実在の声』産業図書、二〇〇五・七

21 いとうせいこう×千葉雅也「装置としての人文書——文学と哲学の生成変化論」『文藝』第五三巻第二号、二〇一四・七

22 浅田彰×千葉雅也対談「つながりすぎ社会を生きる」『朝日新聞』二〇一三・一一・一一

23 千葉雅也『動きすぎてはいけない』河出書房新社、二〇一三・一〇

24 一方で、登場人物を中心に小・中・高等学校教材を追った結果、登場人物像には「学習者」が同化しやすい道徳的な存在（小・中学校）から、同化しにくい非道徳的な存在（高校教材）へと変化する段階性があることもわかってきた。各段階における存在の読解・批評を通して、まずは小・中学校で「自己」（の規範となるべきあり方）を仮定しておいて、そのうえで高校からは（その規範を逸脱した）〈他者〉のあり方にふれる効果が、テキスト上、学習者に与えられるとしたら、第三節で提示したような「自己」を読むための段階と、教材の段階とは部分と全体において相似している、とも言えるのか

もしれない。いづれにしても、読みとの関わりにおいてテキストは生成されるため、国語教材がどのような意図で配置されていたとしても、道徳主義だけでなく、同類の仮構／他者の排除という同時代的なイデオロギーを補強する危険性を持っている。本稿で提示するのは、そうならないための、読み方である。

25 スタンリー・フィッシュ『このクラスにテキストはありますか』

小林昌夫訳、みすず書房、一九九二・一〇

シェイクスピアをシェイクする

— TOKYO、ソウル、そしてベネチア

国語科 柳本 博

【①—1 契機】

「人殺し」の年に生まれ、「いろいろ」書いて死んだ——世界最高の劇作家、ウィリアム・シェイクスピア(1564~1616)。古今東西、演劇といえ、戯曲といえ、真つ先に名が挙がる真正銘のピッグネーム。古典でありながら今でも上演されることは多い。いつの日か上演したい、獨協演劇として挑んでみたいと考えていた。20回近く出場してお世話になっている俳優座劇場の舞台監督さんからも、リハーサルの冒頭に、「新劇の殿堂へようこそ」と言われたことがある。思いつきりの皮肉である。脱いだりチャンバラしたり、全身でギャグを叫ぶことだけに命を賭けている我々に対しての、だ。もつとも、この皮肉、生徒にはほとんど伝わっていなかった。私だけが忸怩たる思いを噛みしめていた。2015年は、少し練習に取り入れてみよう、と『夏の夜の夢』『リア王』などの抜粋をコピーして読み合わせする機会をつくった。その中にあったのが『ベニスの商人』であった。そんな1月から1年経たないうちに、思いがけず思いが結実することになる。

【①—2 韓国遠征】

2015年のエポックメイキングな出来事としては、やはりなんといつても韓国遠征に尽きる。全国高校演劇協議会の名誉会長より推薦を受けて訪韓した。この件に関して、同窓会報『独協通信』第85号(2015年12月20日発行)に次のように書いた。

『演劇部ふたたびソウルで上演』

獨協演劇、大陸へ。演劇協会の招請により、韓国の全国大会に日本代表として参加(韓国各地域の代表に日本代表は本校のみ特別出演)してまいりました。2009年以来6年ぶりの再訪。あのとき情熱的に願った、もう一度ソウルで上演したいという夢がかないました。願っても実らない情熱も多い中、幸運です。

ところが、情勢はすこぶる変わりました。情熱と情勢。字は似ているものの、我々を取り巻く情勢は真逆に。反日ムードの高まりと、我が国の嫌韓ムード。昨年はセウォル号沈没事故、今年は致死力の高い伝染病MERSの流行など、高まっていたはずの日韓交流の波は

スーツと潮が引いてしまっています。そんな矢先の韓国からの招請。校内からも懸念の声は上がりました。しかし私は初めて訪韓して以来、アジアのイタリア人とか大陸の関西人と呼ばれる明るく気さくな人柄に魅せられ、毎夏、他校の演劇部員を引率するカタワラ交流を定着させてきました。今回は全編日本語ながら、明るくスピードディーな獨協演劇を、という目論みのもと上演したオリジナル作『真夏のジェッツ』。ハンドル部分だけを手に、自転車レースを体現。東京中を縦横無尽に疾走していくスピード感あふれる群像劇です。お盆休みの8月16日、ソウル駅裏手という超一等地の新劇場（国立劇団ペクチャン劇場）にて上演。さて、その首尾やいかに？

反日感情、伝染病の影響、ともにゼロ。食い入るように見つめる韓国の若い観客。温かい笑いと反応。終わった後の拍手と歓声、嬌声に手拍子。場内の熱気をどう形容しましょうか。イチロー選手が日米4000本安打を放った時のヤンキースタジアム？ ラグビー日本代表が南アを破ったときの？ 手前味噌ながら、当日のカーテンコールはそれらに優るとも劣らない至福の瞬間でした。ドッキョ・フロム・トーキョー、ジャパン。異国の若者の心に深く刻まれたはずです。訪韓にあたりまして、ご支援いただきました同窓会の皆様にも厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

同様に、獨協学園全体のWEBニュースである「D NEWS」11月10日発行号には別の視点から次のようにも書いた。

『演劇部、ソウルで爆発！』

演劇部が韓国・ソウルの「韓国全国青少年演劇大会」に日本代表として招かれ、公演してきました。ソウル駅のすぐ横という素晴らしいロケーションにある「国立劇団ペクチャン劇場」でお得意の青春ストーリーを披露したところ——終演後、「○○、結婚して！」の日本語が飛んだのです。なんと韓国の可愛い女子高生から、しかも複数。○○には、生徒のファーストネームが入ります。これって、けっこう新鮮なんです、分かりますか？ 韓国では姓の数が少なく、「金さん」、多いですよ。なんでも、20〜30%が同姓だっという統計もあるくらいです。ですから自ずと下の名前で呼ぶことが多くなりま。日本とは感覚が違います。そのあとに来る言葉もかなり強烈です。彼らは異国の地でつかのまの「モテキ」を満喫。爆発的大成功であったことがおわかりいただけましたか？（その後の音沙汰はないそうです）。

【①】 3 2015年の演劇部

14年12月 1 『私、追われていますか？』
(TOKYOドラマフェスタ・京華)

15年4月 2 『記号（ハート）になった人々』
(はいすくうるドラマすべしやる・俳優座劇場)

4月 2・2 『記号（ハート）になった人々』 短縮版
(新入生歓迎会・体育館)

7月 3 『新桃太郎伝説』(中学私学大会・京華)

8月 4 『真夏のジェッツ』

(韓国全国青少年演劇祭・ソウル)

9月 5 『In The Submarine』(文化祭・小講堂)

3・2 『新桃太郎伝説』(文化祭・小講堂)

10月 5・2 『スイヘイリーベボくらノフネ』(地区大会・駒込)

11月 5・3 『スイヘイリーベボくらノフネ』

(都大会・東京芸術劇場)

6 『ギリギリ鬼ギリ五面楚歌』(学校説明会・体育館)

12月 7 『ベニスの使用人(ベニスって何?)』

(TOKYOドラマフェスタ・京華)

11年ぶりに推薦された都大会を含め、丸1年間でざっと7本をつくり、上演した。近年にない本数であり、個々の出来上がりはともかく、画期的な1年であった。ソウル行きは最大のイベント。それなのに、そこで、燃え尽きなかった生徒は偉い。

他にも、期間限定のインターネットのみで見られるスクールポットの「学校説明会情報/学校の施設紹介」がある。入試室からの依頼により、6月に撮影した。進行台本は私が書いた。

(www.schoolnetwork.jp/jhs/school/info.php)

【②-1 上演まで】

本来ならば、都大会に推薦された学校は私学大会(TOKYOドラマフェスタ)には出場しないのが通例であった。しかし、ちょうど枠の中にすべて収まり、今年は復活するかのように見えた韓国の代表校も来日するにはタイムリミットを迎えようとしていた11月。結局、

来日は果たせず、1校分の枠が残ってしまった。私が実行委員長を務めており、プログラムの決定を担っていた。そこで、生徒の中心(高校2年)に対して打診した。「日韓友好」と銘打っていることもあり、ここは、本校が「韓国凱旋公演」として上演できないだろうか、と。生徒は当然出ないものと思っていたので、多少面食らった顔も見せていたが、素直に誠実に協力の姿勢にすぐ変わっていった。しかし、時間はない。負担をかけず、でも一定のレベルの作品をつくりあげること。他人の戯曲をテキストレシーしての上演とか、再演は厭だった。そのためにはあの手を使うしかない、と思い当たっていた。

【②-2 試演会】

生徒への説明案。観客へのプレゼンふう。

『うちの演劇部は変わってます。』

夏休みの合宿でも、必需品に「水着」があります。

「浜辺で稽古」と称して、とにかく海水浴場に行くのです。

水泳部ではありませんので、泳ぎません。

ただ、遊びます。

中1から高2まで、全員で水着。

解放感が部員の熱い絆と、友情を産むのかもしれない。

合宿期間に芝居をつくるのはよくあることでしょう。

それを「試みに演じる会」と書いて「試演会」と呼びます。

元々、私が大学の演劇研究会で経験したことです。

今回は、高校生が韓国遠征でいまませんでしたので、合宿はしませんでした。で、試演会もありますんでした。

そこで、試演会のような芝居をつくろうということになりました。

中1から高2まで、均等に分かれてグループをつくります。

20人ほどいますので大体、3グループ。

そこで、合宿の期間、芝居をつくります。

発表して、みんなで鑑賞しあいます。あ、そうそう、メイクの練習もしますね。

いつもなら、合宿後に合評会のように批評して賞を決めるのです。

団体賞と個人賞のMVP、そして新人賞や特別賞です。

きょうは特別にみなさんに決めていただこうと思います。

15分ずつ、同じテーマの芝居をつくっています。

テーマは、だいたい共通。シェイクスピアを選ぶことが多いので（これは嘘）

今年「ベニスの商人」です。

●Aパターン

以上の前置きがあって、それぞれが15分ずつ見せ合い、お客さんに判定（挙手、もしくは拍手）してもらおう。

——そうすると、オチは？

●Bパターン

本当に合宿でこんなことをやったということを見せる。

つまり、もしも今回、合宿に行ったら——？

架空の合宿の試演会のようになっている。

●Cパターン

リアルに「ベニスの商人」を競い合う、ベニス・マッドマックスふう。

ベニスの商人がリアルにできたヤツがこの土地の勝者だ、油、がっ

ぽがっぽという世界観。』

以上のようなかたちで問いかけ開始。結局はAからCいずれでもなにかたちに落ち着く。そして準備をしていった。「ベニスの商人」ジュブナイル版の抜粋を複数コピー。内容は、韓国をイタリアに置き換え、全体のトーンを決めるプロローグとエピローグ（オープレニングとエンディング）をつけ、各班が上演することになった。ここでのミソはリレー小説にはしないということ。3班がすべて同じテキストからクライマックスのみをつくっていくのだ。まずはリーダー（坂井和久田・石塚）が決まり、ほぼ学年均等にそれぞれのメンバーが割り振られ、期末テストのあと、二週間で作成した。

【②—3　そして戯曲】

TOKYOドラマフェスタ　獨協中学・高等学校2015上演台本

「ベニスの使用人（ベニスって何？）」

2015・12・22　第3稿

獨協太郎（ひとり　きょうたろう）＝顧問・生徒合作のペンネーム。

※この名前で作者名アナウンス、読みの意外性でまずひと笑い、タイトル「かっことじ」でもうひとつ笑いをとった。アナウンス担当の京華の女子生徒に感謝である。

【PROLOGUE】

マイクパフォーマンス「ジャパニーズ・モースト・フェイマス・シ
ンガー、とにかく明るいきやりー・ぱみゅぱみゅ！」

約一名、要所で「はいてますよ」、のポーズをとりながら、

「ファッション・モンスター」ひとしきり、踊る。
盛り上がる。

絢爛豪華なコンサート照明。ピシバシ入る。

センターのマスターオバタ、手を振り、キメる。

場内、拍手、手拍子、大喝采。

あかり変わって、楽屋。

一同 ふー。

石塚 よかったよかった。

神林 やったやった。

坂井 あー疲れた。

小畑 みんな、よかったよ。

他のみんな 小畑さん、ありがとうございました。

小畑 いやいや。

坂井 俺たちがイタリアまで来られたのも、小畑さんのおかげで

す。

小畑 ふっふっふ、いいってことよ。

石塚 俺たちがイタリアに来て評判になったのも、小畑さんがこ

の公演、ウンって言うてくれたからです。

神林 そいで、僕たちがおいしいスパゲティとかシーフードピザ

食えたのも、小畑さんのおかげです。

小畑 かまいやしねえって。おめえら、水臭いじゃねえか。

神林 水炊きもうまかったっす。

石塚 生ハム、モツアアレラドリア……。

坂井 な。

トントん。

坂井 はい？

パスタ娘1 (なにやらイタリア語)……

塩澤 (なぜかわかる)ふんふん。

パスタ娘2 (こちらもなにやらイタリア語)……

塩澤 あー、あー、そう。

パスタ娘1・2 (にっこり)

塩澤 あの、先輩のこと呼んでます。ロビーに来て、パスタ

娘が。

坂井 俺？

石塚 それとも俺？

神林 もしかして僕？

塩澤 いや、和久田さんと、

和久田 予想通りかよ、しょーがねえなー。ロビーだな。

塩澤 はい。

和久田、鏡で前髪をなおしてからくねくね出ていく。

しかし、吉川、すぐ戻ってくる。

塩澤　もう一人。

吉川　着ぐるみ着ぐるみ。

坂井　俺？

石塚　それとも俺？

着ぐるみを着て出ていく。

神林　もしかして僕？

塩澤　あの一、(さすがの塩澤も言いにくい) 浅川さん。

坂井　なんだいありゃあ。

浅川　よ、よっしゃーっ！

塩澤　たぶん、着ぐるみ着ないとだれだかわからなかったからじゃないですか。

浅川、いちどかんでからステップを踏んで出ていく。

石塚　あー、そういうこと。

小畑　なんだよ、なんなんだよ。なんであいつらなんだよ。主役

は俺だろ。

和久田、両手に持ちきれないくらいのプレゼントと花束を持って戻ってくる。

坂井　小畑さん、勘弁してくださいよ。

石塚　堪忍してくださいよ。

石塚　すげえ。

神林　こらえてくださいよ。

神林　すごいじゃないか、和久田。

いったん出て行った塩澤、戻ってきて、

坂井　あれ？ おまえ、キスマークまでつけてんじゃねえか。まあ、実力の片りんってどこじゃねえの。

塩澤　あ、あともう一人、吉川さん。

和久田　でも僕なんかより、浅川のほうがモテてたよ。

吉川　え？

浅川　(もっと花束は多い) 気分は羽生ユズルみたいな、か、感じっすかね。(囁んでからステップ)

塩澤　イタリアのテイラー・スウィフトみたいな子が。

和久田　結婚して、とか言われちゃって。

吉川　よっしゃあーっ！

みんな

何っ！

浅川 僕もっす。

残りのみんな 何んだってえ？

小畑 なんで、ね、なんでなの。なんでなの、神様。

和久田 ポテンシャルの違いじゃないすか？

浅川 そのとおりっすッ。(囁んでからステップ)

小畑の部分だけ照明が消える。

坂井 小畑さん。

小畑 もういい、おれ、古き良き時代の、マフィアのたくさんい

るシチリア半島行く。ムッソリーニ心の友。

石塚 待つてよ、小畑さん。

神林 待つてください。

小林 (一回転して) なんだこれは？

浅川 (読む) なになに……「吉川は預かった」

一同 (異口同音に) 何ッ。

小林 そして、明日しつかりした芝居を見せないと、吉川の体は

ギトギトになるだろう。

一同に緊迫感が走る。

坂井 どうします。マスター小畑。

塩澤 条件は、45分。何やってもいいそうです。今回の芝居の再

演でもいいし、新たなものでも別のレパートリーでもい

いって。

神林 俺たちをなんだと思ってるんだ。

石塚 簡単に再演なんかできるわけがないだろう。ましてや新た

なものなんて。

坂井 外郎売^{ういろうり}やったってポワッって言われるだけだし。断りま

しょうか、小畑さん。

小畑 ふっふっふ。

坂井 なんですか、その不敵な微笑み。

小畑 あれだよ、あれがあるじゃないか。

一同 あれ？

小畑 夏休みの試演会だよ。試みに演じる会と書いて試演会。い

つもなら夏休みの合宿で演劇部恒例の合宿中最大行事。と

ころが、今年はイタリア遠征で合宿自体なかった。でも、

ちょうど今、うまいことに中学生もヨーロッパ観劇ツアー

でたまたまベネチアにいる。45分か。一つの班が15分、同

じシーンであつても、15分×3で45。ふっふっふ。私は

いま自分の天才ぶりに酔っている。(客席に降りる) 試演

会方式で、あした、イタリアの国立劇団で。そうだ、試

演会方式ならできないことがあるものか。かっこ反語かっ

こ閉じる。わーっはっはっはっ！

笑いながらなぜか客席に消える。

音楽。雷鳴。

スポットライトの中に塩澤。

塩澤 (なぜかイタリア語がわかる設定。イタリア語でなにやら

しゃべる)

坂井 (日本語に通訳) そういうわけで、イタリアのみなさん、い

つもなら合宿で2日で作るところ、たったの一日、しめ

て24時間で作くりあげた試演会の力作をお見せしましよ

う。各班15分、3グループで始めて45分。テーマは、いつ

もそうなのですが、イギリスが生んだ世界最高の演劇詩人

ウィリアム・シェイクスピア! 舞台はこちらベネチア!

マーチャント・オブ・ベニス!

坂井 ベニスの商人!

【シーン】 石塚班

アント 僕の名前はアントーニオ。イタリアのベニスに住む、裕

福な商人さ。最近ではポルトガル、メキシコ、イギリス、

インドと取引をしているんだ。

村人 アントーニオ! 実はお母さんが病気になってしまつて:

だけど最近、人をダメにするクッションを買つてしまつ

て、お金がないんだ…。もう私はダメ人間だ!

アント そう卑下するな。なに、お前はダメな人間ではない。こう

やって母親のことを考えているではないか。ほれ、100

ダカットだ。これで君の母親を病院へ連れていってやれ。

村人 アントーニオ! ありがとう! これで僕のかあさんも……

うっ(去る)

バッサ

僕の名前はバッサーニオ。陽気で勇ましい紳士として、こ

の町では通っている、だけど生憎自分の財産は底をついた

ばかりだ。アントーニオ! 君には私は金の面でも友情の面

でも一番世話になっている。で私は君が援助さえすれば君

に借りた金を全部払う事ができるプランを考えついたんだ。

わたしになにができるか、言ってくれたまえ、君の言うど

おりにしよう

ベルモントには莫大な遺産を相続した女性がいる。世界中

至るところから、名のある求婚者たちがやってくる。その

女性は金持ちであるばかりか、美しく気立ても良いから

だ。この前会った時、わたしは好感を持ってもら

えた。彼女が住んでいるベルモントへ行く金さえあれば、

わたしはライバルたちを押しつけて、その愛を勝ち取る自

信があるのだが。

わたしの財産は全部海に出てしまつていて、手元に金がな

い。けれど運の良いことに、わたしはベニスでは信用があ

る。君が必要なだけ借りてあげよう。

二人去る。

シャイ

わしの名前はシャイロック、割と裕福な金貸しだ。あの

アントーニオとかいうやつがわしのことをいじめてくる。しかもわしの商売の邪魔をしたし許さん…許さん

ポーシャポーシャ！（日替わりネタ）そっかそっか！じゃあ私の家に最近ベニスからバツサーニオって人宛の手紙が届いたんだけど知らない？

ポーシャ うん、知らな……

バツサ 僕がバツサーニオだ！

ネリツサ えー……と、あて名はシ、シ、シ、シャイロック？

バツサ シャイロック？！見せてくれ！こ、これは……

ポーシャ どうしたの？！

ネリツサ どれどれ（状況説明）

ポーシャ 何ですって？！

ネリツサ ご丁寧に贈り物も一緒よ！！えっと……人をダメにする

クツション？

バツサ こ、これ以上僕をダメにしてどうするんだ……ということ

でポーシャ、今すぐ三千ダカットが必要なんだ。貸してくれないか？

ポーシャ ええ……

バツサ 貸してくれたら今すぐ結婚式あげるから！！

ポーシャ ネリツサ（パンパン）

ネリツサ はい。

ネリツサ、三千ダカットを持ってくる。

ネリツサ 三千ダカットでございます。

バツサ ありがとう！今すぐ結婚式だ！

ポーシャ ええ！！

音楽。

ネリツサ あなた達は永遠の愛を誓いますか？

バツサ はい！

ポーシャ ええ！

キス？

バツサ じゃあ僕は急いでベニスの町に戻るから。

ポーシャ 私は信じてるわ！きつとあなたが戻ってくることを……

バツサ じゃあな。（去る）

ネリツサ ところでポーシャ、なんであんな奴と結婚したの？

ポーシャ そりゃ……だって……イケメンじゃない！！

ネリツサ それに！……ところでこれなにか怪しいのよね。（手紙を拾い）

ねえポーシャ？

ポーシャ うへ……うへへ……バツサーニオ様とキスしちゃったわ……。

ネリツサ ポーシャ？

ポーシャ バツサーニオ様ああああ。

ネリツサ ポーシャ！！

ポーシャ なによ！うるさいわね！今、バツサーニオ様にしてもらったキスの感触を思い出しているのよ！

ネリツサ　なによそれキモチワルイ！これを見なさい！もう借入書の期限は過ぎているわ！つまりあなたが三千ダカットを渡したバツサーニオが今から言っても遅いというわけよ！

ポーシャ　そ、そんな……でも人の肉を切り取るだなんて……。

ネリツサ　ひとまず先にベニスの町へ行って公爵のもとへいくわよ！

ポーシャ　なにか考えがあるのかしら？

ネリツサ　任せて！

二人、去る。

公爵　わしは公爵、名前はまだない。今日も判決を決めねばならぬ。ちなみに今わしは半ケツじゃ。

ネリツサ　公爵さまああああああああああ！？

ポーシャ　ぎゃああああああああああ！？

公爵　うわああああああああああ！？

ポーシャ　変態！きもい！変態！きもい！

ネリツサ　ポーシャ！いますぐつかまえるのよ！

ポーシャ　むりむりむり！ダレカタスケテー！

ネリツサ　チョットマッテテー仕方ないわ……ここはわたしが！

公爵　まてまてまてまて待つのがじゃ。わし公爵、判決下す、今は半ケツ。

二人　は？

公爵　そ、それでなんの用じゃ？

ポーシャ　こんな人が公爵だなんて……認められないわあ。

ネリツサ　イミワカンナイ。

ポーシャ　つてそんなことはどうでもいいのよ！

ネリツサ　そうだったわね！

ポーシャ　ええ！これをどうぞ！

公爵　ほう、ふむふむ。

ネリツサ　今回依頼を受けたベラーリオ博士はあいにくでられないので代わりという事で私たちがきましたわ！

公爵　若くて優秀な法学博士を差し向ける自信を持って推薦すると……

ポーシャ　はい！

公爵　ようこそ！どうぞお二方お席へ。ただいま審議中のこの件

についてはすでにご存じでしょうか？

ネリツサ　残らず承つてまいりました！

ポーシャ　どちらが商人でどちらがユダヤ教徒ですか？

ポーシャ、ネリツサは後ろへ。アントーニオ、シャイロック入つて

くる。

バツサー　こんなのおかしいだろう。僕は金を三倍払うと言っているんだ！　なのにあいつときたら。

公爵　（でかい声で）静粛に！

シーン。

公爵　（でかい声で）静粛に！

シーン。

公爵　（でかい声で）静粛に！

シーン。

ネリツサ ジャムバック、あなたに慈悲の心はないと？

シャイ シャイロックでございます。慈悲も何もわしは証文どおりにしてほしただけじゃ。

ネリツサ 慈悲の心は天のもの、したがって、地上の権力より尊い。

こんなことを言うのも、おまえの正義一本やりの訴えを、少しでも和らげたいと願う、それだけのためだ。これ以上押し通すというなら、厳格なペニスの法廷は、この商人に対し、不利な判決をくだすほか、しかたがあるまい。商人、おまえは金を支払えないのか？

アント 払えません。いまの私には。

バツサ お願いです！ 金を払わせてください。強い職権で法律を

曲げてくださ……。

ポーシャ わかったわ。

ネリツサ いや、それはならぬ。ペニスのいかなる権力といえど、法を曲げることを許すことはできない。

ポーシャ そ、そうですな！

シャイ 名裁判官ダニエル様だ！ ダニエル様の再来だ！ いや

あ若いのに立派なもんだ！

シャイロック、ポーシャに抱きつこうとするが。

ポーシャ お断りします。失礼。では証文を見せなさい。

アント こ、これでございます。

ポーシャ ふむ。

バツサ 私ならその三倍出します！ どうか！

アント いいんだバツサーニオ。証文は期限切れだ！ あいつに慈悲の心などない。分かるだろう。

シャイ そのとおりだ、アントーニオ！ おまえとはよい友人にな

れそうだ。来世でな！

ネリツサ では仕方ないですな……もう一度訊こう。三倍の金を受け取り、この証文を破らせてはくれないか。

シャイ 答えは否ですな。

ネリツサ ここに記されてあるものは法的に正当なものと認める。

シャイ そのとおり！

ネリツサ ゆえに被告！ 胸を開け！

バツサ 僕が開く。(ぬぐつ、と脱ぐ)

ポーシャ きゃ。(顔を伏せる)

バツサ シャイロック、この悲劇を招いたのはこの僕だ。……ならば僕が。

ポーシャ それは認められないわあ！

バツサ ぐ！

ネリツサ 商人、なにかいうことは？

アント 別にごさいます。覚悟は決めています。バツサーニオ、さ、握手をしてくれ。さようなら！ きみのためにこう

なったからと言って、嘆いてくれるな。さあ！ ハグしておくれ！ さようなら！

二人、抱き合う。

アント

奥さんに、くれぐれもよろしく話してあげておくれ。どんなに僕がきみを愛していたかを。きみのような友人がいたからこそ生きてこられたんだ。何度もお金を借りて僕を親友だと言ってくれた。それはたったひとり君だけだったんだ。

バツサ

アントーニオ、ぼくは結婚した。その妻は、ぼくに託しても命にもかえがたい大切な妻だ。だが、この命も、妻も、全世界も、ぼくは君の命ほどとうとは思わない。君を救うためなら、何もかも失ったって惜しくない。何もかも、お金以外、この悪魔にくれてやったっていいのだ。

ポーシャ

おやおや。もし奥方がここにおられて、そんな話をきかれたとしたら、あまりありがたくは思われんだろうな。

ネリツサ

そういうことは、奥方の耳には入れぬがよろしいですよ。さもないと、家庭争議が持ち上がりますからね。

バツサ

時間の無駄だ。さあ判決をお願いします。

ネリツサ

アントーニオの肉一ポンドはおまえのものである。法廷はこれを認め、法によってこれを与える。さあ、アントーニオから肉を切り取るのだ。

シャイ

ひよひよ、やつてやるぜー。

ポーシャ

待て、ランチバッグ。聞きなさい。この証文によれば、血は一滴たりとも、おまえに与えるとは書いてない。文面には、はっきりと「肉一ポンド」と記されている。よいか、肉一ポンド、証文どおりにとるがよい。

シャイ

(にたり) シャイロックでございます。

ポーシャ

だが、切り取るにあたり、もしアントーニオの血を一滴たりとも流した場合は、おまえの土地と財産はすべて、ベニスの法律によって国のに没収する。よいであろうな？

シャイ

それが……法律でございますか？

ネリツサ

この条文を、自分で見るがよい。おまえは一貫して正義を求め。だから、おまえが望む以上に、正義の筋を通させてやるのだ。

シャイ

仕方ない……では証文に書いてある三倍払ってもらおうか。さすればこのアントーニオを許して……。

ポーシャ

異議あり！ 証文に記された以外は一ダカットも取らせではならぬ。また肉は一ポンド、正確にそれより多くても少なくともならぬ。どんなにわずかな誤差であろうともおまえは死刑、財産はすべて没収となる。

シャイ

なっ？ ならば、元金だけでもって。

ネリツサ

異議あり！ この者は法廷でおおやけにそれを拒絶したのだ。だから証文どおりに。それだけだ！

バツサ

「ダニエルさまだ！ まったくダニエル様の再来だ！ 礼を言つてやるぜサンドバッグ。悲劇が喜劇に変わるぞ！」

みんな、シャイロックを見つめる。

シャイ

ちくしよう、どうにも勝手にしやがれ。こんな問答聞いていられるか！

ネリツサ

待て、トートバッグ。法律のほうはまだおまえに用がある。

シャイ 何ッ！

ポーシャ タイキック、おまえは間接的にも直接的にも被告の命を奪

おうとした。それは明白なことだ。よつてきさまをベニス
の法律により裁かせてもらおう！ もしくはひざまずき、
公爵にお慈悲を乞うがいい。

パッサ 偉大なる裁判官様、ありがとうございます！ ありがとうございます

ございます！ アントーニオ！ これで僕たち……

公爵 静粛に、それではこれにて判決を下す。商人アントーニオ
は無罪。ライザップはそなたの財産は半分国の収入とな
る。アントーニオのものも忘れるでない。では、これにて
閉廷。

全員、口でライザップの曲。一同、ポーズ。

浅川、自慢の肉体美を披露。

しかし、地球上には彼しかいなくなる。

浅川 あ、あれ？ みんな、待ってよー！（追う）

和久田、前髪をなおしながら出てくる。

和久田 では続いて俺たちのベニス！

【シーン2】 和久田班

語り、入ってくる。

語り 人という生き物には、いつも欲望という感情が付きまとい

ます。

それは時として、その人自身の人間性すら破壊してしまう
ものです。

さて……今から私が語るのは、ヴェニスという町で起きた小
さな奇跡。

欲にまみれた人間から人々を救った、一人の英雄の物語で
す。

どうぞ、心行くまでお楽しみください。はっはっはっはっ
はっはっはっ！

オーケストラ調の曲。

アントーニオ以外の人達が順番に入ってくる。

裁判長 被告人アントーニオの、入場です。

バロ 言った！

シャ いや言っていない！

バロ 言った！

シャ 言っていないといってるだろ！

バロ いや確かに言った！

シャ 私が言うはず無い!

裁判長 静粛に! 言った・言わない、の発言は控えなさい。

バロ 言ったくせに!

シャ 言っていないだろ。

裁判長 黙りなさい!

ポシ あの、これは一体どういう状況なのでしょう?

裁判長 ああ、そういえば。あなたは急遽この事件の担当になった

裁判官の方:

で、よろしいでしょうか?

ポシ はい。あまりに急な決定だったため、あまり事件の概要を

把握していません。

裁判長 なるほど。それでは説明もかねて、もう一度状況を整理し

ましょう。被告人のアントーニオさん、あの時の様子を話

してください。

アン 分かりました。あれはいつもと何ら変わらない、平和な日

のことでした。

アントーニオとバロックを残して全員去る。

アン バロック! 久しぶりだな。

バロ アントーニオ! 元気だったか?

アン あたりまえさ! それより、どうしたんだ? お前のことだか

ら、何か俺に頼みでもあるんだろ。

バロ よく分かったな。実は、近いうちに結婚することになった

んだ。

アン それは本当か! あの、年齢イコール彼女いない歴だった

お前がか?

バロ ひとこと余計だな。だけど、一つだけ問題があるんだ。

アン 問題?

バロ ああ。実は結婚相手の彼女は、とんでもないほどのお金持

ちなんだ。

だけど比べてこっちは、いくらも持ってないただの平民。

だから、少しまとまったお金を用意したいと思っているん

だ。

アン なるほど。それで俺に、金を貸してほしいってことか。

バロ そういうことなんだけど、どうかな?

アン そうだなあ、いくらくらい必要なんだ?

バロ ……三千ダカット。

アン 三千ダカットか。

バロ そんな金を持っているのは、お前だけなんだ。どうか、頼

めないだろうか。

少し考え込む。

アン よし、分かった! 任せておいてくれ。

バロ 本当にいいのか!?

アン だが、今手元にお金は無い。だから、別の人から借りてき

たお金をお前に渡そう。

バロ 分かった。本当にありがとう！

使用 かしこまりました。

笑顔で握手する二人。

去る使用人と、入れ替わりに入ってくるシャイロック。

ストップモーシヨン。

不気味な明かりに切り替わる。

シャ それで、一体何の用だ？

語り入ってくる。

アン 貴様に金を借りに来た。三千ダカットを、少しの間だけ貸してくれ。

語り

しかし、彼らの考えは決していいものではありませんでした。彼らがお金を借りた相手は、なんとシャイロックだったのです。シャイロックとはとても強欲なユダヤ人なのですが、お金持ちの反面、とんでもないほどのエゴイストでした。そんな性格ゆえ、アントーニオは彼と対立してしま

シャ

ほう、貴様は私をあんなに毛嫌いしていたのに。都合の良い頭だな。お前は私を○○(日替わり)と罵ったこともあったし、蹴り飛ばしたこともあった。それなのにお前は、私

出来るのは、シャイロックだけだったのです。

アン

のが筋なのですか。

語り去り、アントーニオが舞台上に。

シャ

おそらく私は、これからお前のことを○○(日替わり)と罵るだろう。蹴り飛ばすこともあるかもしれない。そんなに金を貸すのが嫌なら、敵に貸しを作るつもりで、金を貸したら良い。

アン

いるかシャイロック！

アン

まあ落ち着け、別に貸さないとはいってないだろ。三千ダカットだったか、私が何とかしよう。

使用

少々お待ち下さい。

シャ

ふん。お前にも、人の心があったんだな。言ってくれるな、全く。一つだけ条件がある。

アントーニオに近づくと使用人。

おう。

もし期限内に金を返せなければ、貴様の肉一ポンドをもらおう。

使用

ようこそおいで下さいました。

アン

シャイロックと話をさせてくれ。

何、ただの冗談だから安心しろ。ただ、もしもということもあるからな。

アン 分かった、その条件を受け入れよう。

シャ 交渉成立だな。それでは、法廷で。

ストップモーション。

全員入ってくる。

裁判長 しかしあなたの財産の入った金庫が、家ごと焼かれてしまった。

目撃証言によると、〈ぼつちやり・三十代・首に蛇を巻いた人〉が火を着けた……

ということでしょうか。

アン 間違いありません。

ポシ そういふことでしたか。

シャ ああああ！もうこんな茶番充分だ！早くこいつの肉一ポンドを切り取らせる！

バロ 何を言っているんだ……骨と皮だけのこいつに肉なんてあるわけないだろ。

なあ裁判官さん、頼むよ。法律を曲げてでも良い。彼を助けなさい！

ポシ 法律は絶対です。変えることはできません。

シャ おお、なんと賢い。名裁判官わかめ様の再来だ！

ポシ ただ、あなたさえよければ、彼に慈悲を与えるつもりはありませんか？

今回は、お金を受け取るだけで我慢してはいかがでしょう。

う。

何を言っているんです。契約書には肉一ポンドと書いてある。よって、それ以外のものを受け取るつもりは無い！

そうですか。それでは、肉を切り取る準備を。

分かりました。ふっふっふっ！これでアントーニオもここまでだ！

タアアアア！

待ってください！肉切れると、思っていました？

何！

家を燃やしたの、あなたでしょう！

なぜそれを！

見ましたから、ずっと。

肉を切りたいですか？

切りたい……でもそれじゃあ！

血が出ちゃうんだよなあ！

はっ！

お前の契約書には肉一ポンドとしか書いていない。

ゆえに、肉を切り取る時に一滴たりとも血を流してはいない！

くっ！分かった。今日は金だけでもらって帰らせてもらう！

金ならここにある！

それはなりません！先ほどもいったとおり、契約書には肉一ポンドとしか書いていない。よって、それ以外のものを受け取ることは出来ません。しかもあなたは、己のたくら

アン 本当に、なんでも好きなものを持って行ってください。
ボシ 分かりました。せつかくの申し出ですから、遠慮なく。
それでは……あなたの、肉一ポンドをもらいましうか。

(チャンチャン)

和久田 最後は坂井班だぜ。

【シーン3】坂井班

声(のみ) 正文！ 被告人シャイロックは商人アントーニオが三千
ダカットを返せないのをいいことに、肉一ポンドを切り落
とそうとした。この残酷な要求は他に類を見ないのであ
る。よって被告人はこれを極刑をもって償うべきである。
まずはどこにも行かないように足を切り落としましょー
ウ！

小畑 そしたら暴れないように手を切り落としましょーウ！
最後に目だけを残して舌と耳を切り落としましょーウ！
シャイロック！ おまえは今日から達磨や！
ナレ シャイロック、彼は昔は純粹な子供であった。それがどう
してあのような悪人になってしまったのか。時は四十年前
にさかのぼる。ここは悪徳商人のはびこる街、ヴェニス。

ここでは日々悪徳商人が使用人たちを酷使していた。これ
は、まだシャイロックが幼い時に仕えていた、使用人たち
が見た、真実の記録である。

坊っちゃん出てくる。

坊 まったく、何してんだ……さっさと仕事しろ。

執事長入ってくる。

執事 お坊っちゃん、少しは大目に見てやってください。この人
たちは忙しいんですよ。

坊 やだよ、馬車馬のように働け！

ナレ このように当時の使用人たちは酷使されているのだった
……。

小畑 黙れ、また注意されたら困るだろう。
執事 ところで彼らは何を使っているのです？

坊 実はない、知人から松坂牛一ポンドが届いたんだ。だからこ
いつらにすぎ焼きをつくらせているんだ。

ナレ そう！我々の主人は、ベニスの商人という作品でもっとも
重要な「肉一ポンド」の件りをこうしてむりやり回収しよ
うとしているのである！
うるせえって！

坂井 だからそれくらい横暴だつてことだよ！
ナレ そんなに食べるんですか坊っちゃん？

執事 それくらいいいじゃん。だつて僕まだクリスマスプレゼント
坊 30個くらいいいしかもらつてないんだもん！

執事 十分じゃないですか……？

坊 やだー足りないの〜そんなに言うならお前がサンタを探

して来いよ〜！そうすればサンタからプレゼントを搾り
取れるじゃないか！

執事 そんな無茶苦茶な…

坊 いいから探してこいよ！

執事 仕方ないですね…俺一人サンタ探してこれるかな…？お
いちよつとお前ら手伝つて！

使用 はい！！

執事長と使用人去る。

ナレ こうして、執事長と使用人による壮絶なサンタ探しが始

まったのであった。

坊 はやくすき焼き作れ！あ、おい逃げんな！待て！

去る。

執事長と使用人2人入ってくる。

サンタ はい、紅洲^{ベニホト}サンタ協会です。なんか用ですか？

執事 はい。私たちはあるお坊つちやまの世話をしているものな

のですが、お坊つちやまが今年のクリスマスプレゼントが
足りないというのです。そこで、おたくに追加のサンタを
出して頂きたいのですが…。

サンタ わかりました。オプション料金はこれちらです。

執事 よろしくお願ひします。

サンタ はい。じゃあ呼んできますね。…あ、やっべ！

執事 どうしたんですか？

サンタ いやあ今思い出したんですけど、もうクリスマス終わっ

ちやつたじゃないですか、それでうちのサンタ皆実家に
帰つちやつたんですよ…。やべ〜な〜どうしよつかなく。

波 え！本当ですか！？

サンタ サンタいないすよね〜どうしよつかなく。

小畑 ていうかなんでそんな重要なこと忘れてたんですか！

サンタ いやあ僕今日バイト初めてなんで…。

波 じゃあどうするんですか！

サンタ どうしよもないっすね。すみませんお引き取りくださ
い。じゃあね！

サンタバイト、去る。

三人 えええ！ちよつと待つてちよつと待つて！！

坊つちやん、入ってくる。

坊 僕は裕福な商人の家に生まれた。欲しいと言ったものは何

でも買ってくれた。家も、別荘も、農園も作ってくれた。
その農園で僕はトマトを育てていた。実はそれしかするこ
とが無かつたんだ。僕はそのトマトを毎日見つめていた

んだ。どういう風に育っていくのか見ていようと思った！
だが！その時僕が優雅にトマトを見ている後ろで畑で働
いていた使用人がぶつ倒れた。

じい
フオオオオオ！

ばあ
じいや！じいや！

坊
僕は冷房をつけてあげた。ゴオオオオ。

2人
あー生き返るわー！

2人、去る。

坊
何が言いたいのかというと、僕は使用人達に、とつても優
しい良い主人なのである！

去る。

3人
はあはあ…。紅洲の町中をくまなく探したが、サンタはど
こにもいない…。このまま帰ったら俺らは処刑だ。

浮浪者出てくる。

浮浪者
お、やった！十円みーっけ！

小畑
ま、まさか！

波
あの白い袋を肩に背負ったお方は！

執事
ま、まさかお前らあいつがサンタクローズとか馬鹿な考え

を起こすんじゃないだろーな？あいつはどう見てもただ
の浮浪者だ。

波
いや、いやいやいや、いけるいける大丈夫！なんかよく見
たらサンタに見えなくもない。

小畑
そうそうそう！それっぽい衣装着せれば何とかなる！

執事
ホントに大丈夫？

2人
大丈夫大丈夫！（必死に説得し続ける）

執事
うーん…大丈夫か！よし！そうと決まれば捕獲開始
じゃー！

2人
おー！

3人でサンタを捕獲する。

波
さあ！おとなしくお縄につきな！

3人去る。坊っちゃん出てくる。

坊
すき焼きうめえー！

3人出てくる。

執事
坊っちゃん！坊っちゃん！

坊
あ、お前らお疲れ。サンタ見つかった？見つからなかった

ら処刑って言ったよね？

執事 はい！はい！見つかりました！

坊 じゃあ早く連れてきて！

執事 はい！分かりました！お前ら、連れてきなさい！

サンタ来る。

土屋 この方です。

サンタ え？プレゼント？渡せばいいの？

波 そうですそうです！ぜひ坊っちゃんにプレゼントを渡してください！

サンタ わかりました。えっとくありました！どうぞ！

サンタ、坊っちゃんに人形を渡す。

3人 イエー！（拍手）おめでとうございます！はいありがとう
ございました！（サンタ強制退場）

サンタ去る。

土屋 いやーよかったよかった！可愛らしいですねーその…クマ！そうクマ！クマ！素晴らしい！これで満足しました
でしょうか？

坊 お前ら……何だこれは……！

坊っちゃん、人形を投げる。

土屋 うわあああ！何でせっかくサンタさんにもらったクマ投
げるんですか！

坊 お前ら、これをよく見てみる。腹から綿が飛び出してるだ
ろ、ハラワタが飛び出てる人形は呪われてるって相場が決
まってるんだよ！ 怖いよー！ 怖いよー！

坊っちゃん、去る。

土屋 坊っちゃん！

土屋、坊っちゃんを追いかけるようにして去る。

小畑 そうだ！ 穴があいてるならサンタに不良品交換しても
らわなきや！

波 おお、そうだなそうだな！（人形を取る）

小畑 おい！ やっぱやめろ！ その人形は不吉だ！ う
わああああ！

坊っちゃん、人形に呪われ、出てくる。

坊 あああ！ すき焼きイ〜！ ああー！

執事 あー、坊っちゃん人形の呪いにかかってしまった！

二人、去る。センターに人形が残り、サス。笑い声。サンタ出てくる。

サンタ ヴェニスつて何だ？

サンタ、センターの人形を拾い、去る。

【EPILOGUE】

カーテンコール。

石塚 まことに僭越ながら、役者紹介をさせていただきます。

かっこいいタイトな照明の中、それぞれのグループごとにポーズ。

石塚班、ポーズ。

和久田班、かっこよくポーズ。

坂井班、しぶくポーズ。

全体を整理させる坂井。

坂井 イタリアのみなさん、グラッチェ！

一同 グラッチェ！

拍手につつまれる。

終わって、一人、息をついている小畑。

塩澤 小畑さん、面会です。

小畑 はい。

パスタ娘3、花束を持って来る。彼女は小畑の頑張りがわかっていいのだ。

パスタ娘3 オバタさん、オバッタ、ガンバッタ。

きりつと立つ小畑。

着ぐるみの吉川、入ってくる。

小畑 吉川さん！ 無事だったんですね！

歓喜のファッション・モンスター。

小畑、得意満面のポーズ。

幕

【②-4 上演記録——プログラム】

●CAST

石塚班

石塚 薫（ネリッサ）

浅川龍太郎（バッサーニオ）

小林 蓮(アントーニオ) 大野暁春(シャイロック)

澁谷新生(ポーシヤ) 中山雄暉(村人/公爵)

和久田班

和久田碧惟(ポーシヤ) 神林純太郎(シャイロック)

内田悠嗣(音響) 塩澤優希(語り)

石崎哲士(アントーニオ) 坂本和俊(パロック)

坂井班

坂井治樹(サンタ) 小畑亮雄(使用人2)

古田 匠(照明) 土屋龍斗(執事長)

波田野大祐(使用人1) 近藤 陸(シャイロック)

高橋開成(音効)

● STAFF

演出 坂井治樹 脚本 獨協太郎 照明 古田 匠

音響 内田悠嗣 音効 高橋開成 衣装 神林純太郎

舞台監督 石塚 薫 イラスト 石塚 薫

協力 内海直希 守田立吾 六川文裕 吉川 潤

田中勇作 加藤雅也 相原孝太郎 丸山裕也

中村健太郎 箕輪雄太 薦田 翔 井上 修

柳本 博

● 演出の言葉

どうも演出もどきのサムシングです。今回は部全体で3班に分かれ、各班で同一テーマのもと15分ずつの芝居を作り、合体！して上演することになりました。そんなこんなで不思議な？ことも起こるかもしれません。どうぞ生暖かい目で……。インディカ米。

● STORY

なぜかイタリア・ベネチアで公演を終えた獨協演劇部一行。興奮冷めやらぬ中、謎のイタリアンマフィアに先輩がさらわれた！

解放のための要求はただ1つ。明日までもっとマトモな芝居を作れ——！

「ベネチアとベニスって違うんすか」「同じ都市を指します。【VENICE】英語読みがベニス、イタリア語がベネチアですな」「ヴェトベは？」「同じですな」

【②-5 総括】

結果は「演出構成本力」を評価しての特別賞(出場全18校中の第3位相当)。

ミソはすべて同じシーンをつくったという点にある。わりとオーソドックスにストーリーを追った石塚班から、クライマックスを力技で成立させた和久田班、最後が破天荒な坂井班とバランスがとれていたようである。ひとつの鉾脈というにふさわしい。

また、合宿ふうには、部内でも表彰をした。優勝チームは最初の班として頑張った石塚班、MVPは奮闘した神林、新人賞は近藤となった。私には忘却の彼方にあつたが、現高2が中1の合宿の試演会で「幸福の王子」をモチーフに作ったことがあつたようである。そんなこともあつてうまくいったチャレンジとなった。



「吉川は預かった」「何ッ！」



「裁判を前に」(石塚班)



「シャイロック混乱」(和久田班)



「サンタ捕獲開始」(坂井班)

権の晋律との差異を強調する結果となった²⁰。玉門花海出土《晋律注》によると、晋律は河西地区に広汎な影響をあたえ、河西律学を継承する家にあつては現実を見ることなく、当時頒布されていた晋律を深く研究せず、廃棄され用いられなくなった漢律令のみを研究することは不可能だった。陳氏は《晋律注》の写本などを見ることができなかつた故に、河西地区の律学研究の中での晋律の占める重要性や杜預の注が広がったことなどについては軽視することになったが、これもまた（当時としては）一般的な認識で、我々は先学を責めることはできない。このことも一面で玉門花海出土の《晋律注》がもつ貴重な価値を反映しているといえる。

20 陳寅恪氏はまた次のように指摘する。「総じて北魏の刑律は実際には中原土族の伝える漢（律）学および永嘉の乱後西方に流遇してきた儒家が保持し、あるいはこれを発展させた魏晋文化を結集し、併せて江南政権の継承した西晋以来の律学を加えたものであり、故に当時（の律学）の集大成を為したものと見える。もし南朝が受け継いだ晋律からこれを論ずるなら、おおよそ漢律にくらべ進化しているように見える。しかし、江左の士大夫たちは刑律を研究することを潔しとしなかつたため、大きく発展することはなかつた。しかも漢律の学は非常に深い内容を持っていたにもかかわらず、江南政権下では失われていった。そして河西地区で保持されてきた漢代以来の学術は独自に発展し、北魏初期に中原に残されていたものとも相違するものだった。したがって、北魏前後に制定された律は、（諸律を）総合的に比較し、その精華を取り入れて広く活用した。故にこの偉業を成し遂げた者は、誠に広く知識を結集した功績を有している。決して偶然の産物ではない。」陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』、上海古籍出版社1982年版、第111頁。（268—②）

に基づくと次のように考えることができる。すなわち、当時法令が発せられると、人々に周知させるために、板上に書き写し里門および亭傳に掲げるのが一般的な方法だった¹⁴。晋律の全国への頒行にあたって、当然西北の河西地区も含んでいた。

西晋の南渡後、五胡十六国の各政権は漢魏晋の刑律を継承し、あるいは取舍選択して民衆を統治した。西北地区から見ると、新疆樓蘭尼雅出土の漢文紀年文書に永嘉4年(310年)と6年の年号を記したものがある。しかし、それ以前のものでこの紀年に最も近いものは、泰始6年(270年)のものである。我々は第679号文書に注目した。(この文書には)「西域長史營写鴻臚書到、如書羅捕、言会十一月廿日、如詔書律令。」とある。これは西域長史が中央政府の詔書を転送したものであり、これは西晋の政令と法律がまた西域においても施行されたことを物語っている。1979年吐魯番アスターナ332号墓から出土した十六国時代の文書中の若干の訴訟文書も、あるいは晋律と関係があるかもしれない¹⁵。玉門花海《晋律注》の出土は、一層強く河西地区における前涼および西涼以来晋律が用いられていた歴史的状況が実証された。

《晋律注》の出土は、北魏律の淵源の一つとなっている河西の律学が、ただ漢律を包摂しているだけではなく、同時に晋律の要素も伴っているということ論証しようとしている我々に新たな史料の根拠が提供された。

北魏律の淵源について、程樹徳・楊廷福の両氏は等しく「漢律説」を唱えている。程氏は「北魏はおおむね漢律を受け継いでいる¹⁶」とし、楊氏は「後魏律は漢代の法に依拠している¹⁷」としている。しかし陳寅恪氏は「三源説」、いわゆる「北魏律は中原・河西・江左の三大文化の要素を結集し、その中から精華を抽出したもの¹⁸」と主張している。

陳寅恪氏は北魏律の成立過程を論ずるとき、以下の如く推論を展開する。「則ち(崔)浩は漢律に精通している人物である。当時の士族は礼法を最重要視していた。礼律は古代において、もともと混通の学であり、当時の学術活動の多くは世襲的に継承されていくものであった。故に崔浩父子が漢律に通曉していることは怪しむに足らない。また崔浩と胡方回とも関係がある。胡方回は西北地域出身であり、中原の永嘉の乱以降西北地方の一角は漢魏晋の学術を保持し続ける地域となり、方回の律学(の内容)を論理的に推論すると、まさに漢律の系統であり、さらに江南政権下の専門家が西晋の刑律を用い、律学を家学とする学者は張斐・杜預の注釈の範囲を超えるものではなく、(両者は)同じからざる所があるとすべきである¹⁹。」とする。ここにおいて、陳氏は河西地方の文化の要因の主要なものは漢律であり、晋の張斐・杜預の律ではないことを指摘している。

以上の陳氏の主張は必ずしも正確なものとは言いがたい。胡方回は西北出身ということは自然なことでは誤りではない。しかし、西北がなぜ漢律系統の律学であったのか、陳氏は未だ具体的な事例を提示してはいない。陳氏は「西北の一隅に漢魏晋の学術が保たれていた」と指摘しているが、同時に氏は河西律学が漢律の系統をなしていることを強調し、河西(の律学)と漢律学との一致を強調し江南政

14 中国文物研究所・甘肅省文物考古研究所編『敦煌懸泉月令詔条』、中華書局2001年版、第339頁。(267-①)

15 新疆吐魯番文管所「吐魯番出土十六国時期的文書—吐魯番阿斯塔那382号墓清理簡報」『文物』1983年第1期。(267-②)

16 程樹徳『九朝律考・後魏律考序』、中華書局2001年版、第52頁。(267-③)

17 楊廷福『略論唐律の歴史淵源』、『唐律初探』、天津人民出版社1982年版。(267-④)

18 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』、上海戸籍出版社、1982年版、第107頁。(267-⑤)

19 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』、上海戸籍出版社、1982年版、第104頁。(268-①)

陳氏が、晋人は「増撰周官為諸侯律一篇」したという見解については、法律文書の内容上からは根拠を探し出すことはできない。漢代の諸侯の法禁と『周礼』とは関係がないことに至っては、現在直接的資料で説明を加えることはできない。

(三)「諸侯律」は決して八王の乱を誘発していない。

「諸侯律」と八王の乱との関係は長きにわたって解決を見ていない問題である。何人かの専門家は諸侯律が八王の乱を誘発したと考えている。

例えば陸心国氏は「(晋)は『周官』を撰じて諸侯律を作った。・・・晋の武帝は、曹魏が一族を諸王に封ずることを禁じたことで帝室が孤立し、権臣の司馬氏が実権を掌握し魏に代った教訓に習い、秦漢以後の王侯を封ずる慣例を一変させ、周代の分封制を復活させ、宗室を封じて王と為し、且つ「授以職任、又詔諸王皆得自選國中長吏」(『資治通鑑』晋紀1参照)、同時に州郡の軍備を解き、王国が軍を置くことを許し、「八王之乱」を引き起こすに至った」としている¹⁰。

また、張建国氏は次のように指摘する。「諸侯律は晋が分封制度を実行するために編纂されたのであり、その作用がどのようなものであったかは疑ってかかる必要がある。天下が統一されてからあまり時間がたたないで「八王之乱」が起こったことは(その)主要(な要因)が宗室諸王の軍事権と非常に深い関係があったとしても、諸侯法制がまた影響しなかったわけではない¹¹。」

また、この種の説に反対する専門家もいる。呂思勉氏には早くに鋭い論説がある。「内乱を招いた所以は実に分封した宗室諸王の権限が強大なことにあり、州郡の弊害が蓄積された後を受け、宗室諸王を地方方鎮に赴かしめた¹²。」唐長孺氏は呂思勉氏の見解をさらに一步展開させているが、そこでも宗室諸王の出鎮が結局八王の乱発の根源的要因であるとする¹³。

新出の諸侯律条文に拠るならば、我々は(次のように)いうことができる。西晋諸侯律と漢魏以来の諸侯法禁は同じ流れをくむものであり、その立法精神が拡大して大諸侯を大量に生み出す傾向にはない。諸侯律と「八王之乱」の勃発には何の直接的関係もない。法律自体は八王の乱を誘発しなかったし、宗室諸王の出鎮と領軍監督が「八王之乱」の真の原因とすることは言えない。

五、玉門花海《晋律注》と河西の律学との関係

晋律は晋武帝泰始4年に頒布された。『晋書』刑法志には「是時侍中蔡琰、中書侍郎張華又表、『抄新律諸死罪条目、懸之亭傳、以示兆庶。』有詔從之」とあり、この種の制度は正に秦漢時代のものを継承してきている。西北地区の(甘肅省)懸泉置出土の泥壁上に書かれた前漢哀帝時代の「月令詔条」

9 陳寅恪「崔浩与寇謙之」『金明館叢稿初編』所収、上海古籍出版社、1980年版、第129頁。(265-①)

(訳者注、陳氏論文に引用に当たって曹氏論文は「晋書卷參拾伍」とするが「卷參拾」の誤り。また漢代の經文と漢律との関係の箇所「漢律之文比博」とするが「漢律之文比傳」の誤記である。)

10 陸心国『晋書刑法志注釈』群衆出版社、1986年版、第70頁。(266-①)

11 張建国「魏晋律令法典比較研究」『中華法系的形成与發達』所収、北京大学出版社、1997年版、第227頁。(266-②)

12 呂思勉『兩晋南北朝史』、上海古籍出版社1983年版、第29頁以下参照。(266-③)

13 唐長孺「西晋分封与宗王出鎮」『魏晋南北朝史論拾遺』中華書局、1983年版、第139頁。(266-④)

朝」とはまさに漢王朝を示している。諸侯律のこの条文は、諸侯の貢賦が、時期がきても貢納されたいときは、時期を考慮せず罰則を履行するというものである。

(5)「擅□土田□□□」は正に違法に私的に土地や奴婢を占有することを指している。張家山漢簡『二年律令』『戸律』では「閔内侯九十五頃」「徹侯受百五宅。」と制限されている。『漢書』燕刺王旦伝には「後坐藏匿亡命、削良郷・安次・文安三県。」とあり、『晋書』高陽王睦伝には「咸寧三年、睦遣使募遷徙国内八県受逋逃、私占及變易姓名、詐冒復除者七百余戸、冀州刺史杜友奏睦招誘逋亡、不宜在国。有司奏、事在赦前、宥原。詔曰『中山王所行何奈至此、覽奏甚用憮然。広樹親戚、將以上輔王室、下惠百姓也。豈徒榮崇其身、而使民逾典憲乎。此事当大論得失、正藏否所在耳。苟不宜君国、何論于赦令之間耶。其貶睦為県侯』乃封丹水県侯。」とある。

(6)「賊周能將(得?) 発□。」の双行の小注には「□□徳行毀其功名市□□□王者即□□□□」とあり、「□□不辜没政荒国」の双行小注には「謂不聴」とあり、「□斂其度政以□」の双行小注には「王□也」とある。以上は正に諸侯の種々の乱行を示している。前引の『華陽国志』李必伝には、後漢時代に李必が尚書郎を以て河内温県令になり、「中山諸王每過温県、必責求供給、吏民患之。」彼の(県政の)再建を経たのちは「後諸王過、不敢煩温県。盜賊発河内余県、不敢近温、追賊者不敢経界。」とある。

(7) 諸侯の罰則について。「削五分□一」およびその他の罰則減免の特殊規定を包括している。(これも)多くが漢の制度と比較対照してみることができる。その中の処罰方法では削県・削郡が多い。『漢書』燕刺王旦伝の記載には「後坐藏匿亡命、削良郷・安次・文安三県。」とあり『漢書』高五広王伝の斉思王は終始淫乱で「有詔削四県」となり、同伝に載る楚王は乱行により東海郡を削減されている。『漢書』文三王伝の梁平王襄は不孝を理由に削県されている。前に引用した『晋書』高陽王睦伝には「咸寧三年、睦遣使募遷徙国内八県受逋逃、私占及變易姓名、詐冒復除者七百余戸」とあり、その結果王より県侯に落とされ、封地も削減されたのが事実である。『後漢書』光武十王列伝の任城王尚の子貞安が嗣ぎ「安性輕易貪吝、数微服出入、游観國中、取官属車馬刀劍、下至衛士米肉、皆不与值。元初六年、国相行弘奏請廢之。安帝不忍、以一歳租五分之一贖罪。」した。晋に至って「削五分□一」はすなわち、去年一年の租の5分の1を削って贖罪にあてた可能性が強い。

以上の内容は晋朝下の諸侯法禁は多く秦漢の制度を踏襲していたことを表している。

(二)「諸侯律」と『周礼』とは関わりはない。

陳寅恪氏は晋の「諸侯律」は儒家の經典『周礼』を以て法律条文と為したものと認識していて、その影響は甚だ強い。氏はこう指摘する。「司馬氏の帝王としての大業は、当時の儒家大族の推戴があつて初めて成し遂げられたものであり、故に西晋の曹魏からの帝位の篡奪は、また後漢の儒家大族の復興ともいうことができる。……その最も注意すべき点は、刑律を規定し、周官を増撰し諸侯律一篇を為した点にある(『晋書』卷30刑法志を見よ)。両漢時代に盛んに經典を根拠に折獄を議論し、また政事を議論するとき経伝の解釈は往々にして儒家の教義を取り、漢律の文と比較して新たな解釈を生み出したものの、漢の法律は実に元々秦代のものに基づいて、馬・鄭等諸儒がこれを解釈(『晋書』刑法志を参照)したものの、未だかつて儒家經典を以て法律条文にしたことはない。そうであるなら『周礼』のような中国の儒家政治の理想の如き書は、司馬氏以前には、もとより聖經と尊ばれたが、西晋以後は国法となった。これは古今の中でも最も大きな変化であり、その原因を類推すれば、実に司馬氏が後漢の儒家大族出身であった結果である⁹⁾。(しかし)《晋律注》所載の諸侯律の条文内容と漢の事跡を対比してみると、晋の「諸侯律」は正に漢律を継承しており、『周礼』とは直接関係がない。

王□也

□□□削五分□一

□諸侯□凡他罪□

□而諍（譚？）及犯不□

□皆不坐若？□

諸侯□法律

減刑□□

□諸侯□

□□職所□

□□□百九十七

文五万二千冊言

諸侯犯律應□

諸侯律注第廿□

以上の内容の主要なものは次の7点に集約できる。

(1) 「□諸侯謀反反叛」「曰皆依法□」。これは諸侯の反叛の厳禁と、(反叛を) 刑法で罰する規定で、諸侯律第一条であり、諸侯律の中でも最も重要である。『後漢書』光武十王伝中の楚王英伝には永平「十三年、男子燕廣告英与漁陽王平・顔忠等造作凶書、有逆謀、事下案驗。有司奏英招聚奸猾、造作凶讖、擅相官秩、置諸侯王公將軍二千石、大逆不道、請誅之。」とある。

晋代に反叛を起こした諸侯についても以下のように処罰された。

『晋書』楚王瑋伝には、「帝遣謁者詔瑋還營、執之于虎賁署。遂下廷尉。詔以瑋矯制害二公父子、又欲誅滅朝臣、凶謀不軌。遂斬之。」

『晋書』東海王越伝に「勒命焚越柩曰『此人乱天下、吾為天下報之。故燒其骨以告天地。』天下歸罪于越、帝發詔貶越為梟王。」とあり、惠帝が詔書を発し東海王越を梟王としことは、諸侯律に拠っての処置であろう。

(2) 「納谷」は、おそらく諸侯王の封戸が納める処の賦税をいかに分配するかの問題であろう。『初学記』卷27宝器部所引『晋故事』には「凡民丁課田、夫五十畝、取租四斛、絹三疋、綿三斤。凡属諸侯皆減租谷畝一斗、計所減以增諸侯。絹戸一疋、以其絹為諸侯秩。又分民租戸二斛以侯奉。其余、租及旧調絹二戸三疋・綿三斤、書為公賦、九品相通、皆輸于官、自如旧制。」とある。

(3) 「擅自征兵」これは漢代に淵源がある。居延出土の西漢施行証書目録中に「郡国調列侯兵、四十二」というものがあり、ある学者は「これは呂后元年詔以後、景帝後三年詔以前のもので、まさに文帝の治世のものである。この詔はまさに郡国が列侯の兵を調遷することを述べ、史書には記載がない。『晋書』地理志には王国を建て軍を置く制度を記載しており、大国で5千人、次国で3千人、小国で1千5百人である。」(とする)

(4) 諸侯は「貢賦□廢王職不」である。『漢書』惠帝紀に三年「六月、發諸侯王・列侯徒隸二万人城長安。」とあり、当時諸侯王が中央政府に対し尽くすべき服役義務を明らかにしている。『晋書』礼志には「魏制、諸王不得朝覲。魏明帝時、有朝者皆由特恩、不得以為常。及泰始中、有司奏、『諸侯之國、其王公以下入朝者、四方各為二番、三歲而周、周則更始。若臨時有故、却在明年。明年來朝之後、更滿三歲乃復朝、不得違本數。朝礼皆親執璧、如旧朝之制。不朝之歲、各遣卿奉聘』奏可。江左王侯不之國、其有受任居外、則同方伯刺史二千石之礼、亦無朝覲之制、故此礼遂廢。」ここにある「旧

漢晋律の関係からすると、西晋「諸侯律」の内容は本来兩漢の諸侯法禁条文の中から推測できるはずである。漢代の諸侯法禁については沈家本・程樹徳・張維氏らの研究がある。その中でも張維氏の研究が最も詳細である。

張氏は次のように指摘する「漢初に諸王を分封するとき、当時は必ず法令を立て、王国の儀制及び国王の行動について制限を設けた……。ここに漢法の中の諸侯王に関する重要なものを列挙すると、(1)天子の儀制を国王は窃用することはできない。(2)国王は恣意的に人に爵位や大赦をすることはできない。(3)国王が吏を置く場合は須く漢の法に従う。(4)国王は逃亡人を受け入れ、あるいは亡命者を匿うことはできない。(5)国王に虎符がなければ、兵を発することはできない。(6)国王は国内において塩の生産、鉄の鑄造はできない。(7)国王は外戚と私的に関係を取り結ぶことはできない。(8)国王は私的に他国の王と会うことはできない。(9)国王は決められた時期に入朝する。(10)国王は入朝するも、京師に逗留することはできない。(11)国王は朝廷の大臣たちと相互に恩賞を与え合うことはできない。(12)国王の私行(不孝・淫乱)はまた漢法の制限をうける⁸。」

以上はすべて推論であり、信憑性は薄い。但し、西晋「諸侯律」の内容と張氏の上述の兩漢の制度とは類似しており、棺板文書に載る晋律条文がこの点を証明している。まず、原文を示す。

諸侯律注[□]廿録

大

諸侯謀反反叛

曰皆依法[□]

擅[□]

□

・内谷^{□□}

・大^{□□□□}

・征兵之兵

・貢賦[□]廢王職不

・擅[□]土田^{□□□}

・賊周能將(得?)發[□]

□德行毀其功名市^{□□}

王者即^{□□□□}

□不辜沒政荒国

謂不聽

斂其度政以[□]

8 張維華「西漢一代之諸侯王国」『漢史論集』所収、齊魯書社、1980年版、第228頁。西漢時代に諸侯王の制限に関する事例は非常に多い。以下に数例を挙げる。『漢書』燕刺王旦伝に「后坐藏匿命、削良郷・安次・文安三県。」『漢書』高五王伝に齊思王が常に淫乱であったため、「有詔削四県」となった。同伝の楚王は乱行を理由に東海郡を削減された。『漢書』文三王伝にある梁平王襄は不孝を理由に削県された。梁荒王は「謀篡死罪囚、有司請誅、上不忍、削立五県。」となった。『漢書』武五子伝の昌邑王は「即位二十七日、行淫乱」により廢せられた。東漢の諸侯の法禁は西漢の制度を繼承したものだ。『後漢書』光武十王列伝には諸侯王の行為がチェックできないため封地を削減された事例がある。東海恭王疆伝に「子靖王政嗣。政淫欲薄行。後中山簡王薨。政詣中山会葬、私取簡王姫徐妃、又盜迎掖廷出女。予州刺史・魯相奏請誅政、有詔削薛県。」とある。(261-①)

場からの) 距離が百歩以内にある場合、応に郊外にあるのと同様に論ぜよ、というものである。『唐律』「捕亡律」第456条には「鄰里被強盜不救助」「諸鄰里被強盜及殺人、告而不救助者、杖一百、力勢不能赴救者、速告隨近官司、若不告者、亦以不救助論。其官司不即救助者、徒一年。窃盜者、各減二等。」とあり、また第454条には「道路行人不助捕」「諸追捕罪人而力不能制、告道路行人、其行人力能助之而不助者、杖八十、勢不得助者勿論」とある。唐律の規定と秦律(の規定)とは非常に近く、それは、漢晋律の継承関係があったことを十分に明らかにしている。

それから、「賊捕掾游邀」の語句について、玉門花海《晋律注》の記載は次の如くである。

其所舍取放□諸当坐者□

諸首藏匿舍□□□□諸逃亡

賊捕掾游邀皆坐□□

上述の語句の理解について、巖耕望『魏晋南北朝地方行政制度』の「賊曹」条では「晋の諸県はこれを置き、掾あり、史あり。『晋書』職官志にもあり。また『通典』卷33には晋の県に賊捕掾あり。」とする。張家山漢簡の「捕律」には「盜賊發、士吏・求盜部署、及令、丞・尉弗覺智(知)、士吏・求盜皆卒戍辺二歲、令・丞・尉罰金各四兩。」とあり、玉門花海《晋律注》の条文のいうところの「首藏匿舍□□□□諸逃亡」は「賊捕掾游邀」が連帯責任を負わねばならないということである。

以上のような晋捕律の2つの事例検討を通じて、我々は当該律の内容を理解でき、また当該律の若干の条文及び法律用語が秦漢律を継承し、下つては隋唐の律につながっていく道筋を見出すことができた。

四、玉門花海《晋律注》の「諸侯律」についての論考

棺板文書《晋律注》には「□諸侯律注□廿録」「諸侯律第廿□」の篇題があり、また若干の比較的欠字の少ない律文もある。その中の6つの条文の先頭には墨でマークがつけられている。これは棺板文書の性質や《晋律注》(の理解)のためにカギとなる証拠を提供するだけでなく、以下の3点の問題の理解のために、一次資料を提供するものである。第一に西晋「諸侯律」にみられる諸侯に関する法禁、第二に「諸侯律」と周礼との関係、第三に「諸侯律」に大諸侯を生み出す条文の存在の有無、および「諸侯律」が「八王の乱」を誘引したか否かである。

(一)「諸侯律」に見える処の諸侯の法禁

長い間「諸侯律」の原文を見ることができなかつたため、学界にはその内容に関して少なからざる推測の言説があるのみだった。例えば、程樹徳の『九朝律考』は次のように指摘している。「凡諸侯上書言及諸侯不敬、皆贖論(『北堂書鈔』卷44所引晋律)」、「諸侯応八議以上、請得減收留贖、勿髡鉗答(同上晋律)」推測するに、この2条は諸侯律の佚文の可能性がある。」

漢代に「諸侯律」という律名および律条文があったかどうかは史実の上では明らかでない。但し、諸侯の法禁に関しては相当完備していたようだ。『漢書』晁錯伝に「錯又言宜削諸侯事、及法律可更訂者、書凡三十篇、孝文帝雖不聽、然奇其材。」とあり、ここから文帝以前に若干篇の旧法があり、晁錯に至つて更に三十篇を定め、これらはみな諸侯の行動に対して制限するところのもので、惜しむらくはこの法が後世に伝わらず、詳細な考察ができないことである。

及諸捕罪人

滿五人也若滿五人以□□当五□

其將吏□伍長不能捕得罰？金？

不將蓋坐 □

其□傷伍人罰金一斤

吏不坐也 罰

卅日中能尽捕得除其罪不□

独者謂□捕盜賊九人独得

不得 ……余賊

……難

奴婢の逃亡に関しては、『晋書』高陽王睦伝に注目すると、「咸寧三年、睦遣使募遷徙国内八県受逋逃、私占及變易姓名・詐冒復除者七百余戸、冀州刺史杜友奏睦招誘逋亡、不宜在国」とあり、その中の「變易姓名」は恰も上引の《晋律注》の「變易姓字」と一致する。上引の《晋律注》の「誘導奴婢令亡与同罪至斬□□」は則ち奴婢の逃亡を誘導した者は逃亡者と同罪でただちに斬首の極刑に処すると規定している。

このほか、《晋律注》に見える「捕律」中の相当数の条文は官吏が逃亡者を捕捉するときの規則や罰則を規定していて、張家山漢簡の「捕律」の関連条文と非常に近い。《晋律注》の「卅日中」の如き規定は一時期のものであるが注視すべきである。

張家山漢簡の「捕律」に「群盜殺傷人、賊殺傷人、強盜、即發県道、県道亟為發吏徒足以追捕之、尉分將、令兼將、亟詣盜賊發及之所、以窮追捕之、毋敢□（140）界而環（還）。吏將徒、追求盜賊、必伍之、盜賊以短兵殺傷其將及伍人、而弗能捕得、皆戍辺二歲。三十日中能得其半以上、尽除其罪、（141）得不能半、得者独除、死事者、置后如律。大痲臂臑股胫、或誅斬、除。与盜賊遇而去北、及力足以追逮捕之而官□□□□□逗（142）留畏吏弗敢就、奪其爵一級（級）、免之、毋爵者戍辺二歲、而罰其所將吏徒以卒戍辺各一歲。興吏徒追盜賊、已受令而逋、以畏吏論之。（143）」（とある）

上述の漢律条文は具体的に地方官が盜賊を逮捕するときの権限、工程および賞格を規定している。その中で最も注意すべきは三十日という期限が晋律及び唐律に継承されていることである。唐捕亡律第451条に「諸罪人逃亡、將吏已受使追捕、……即非將吏、臨時差遣者、各減將吏一等。三十日內能自捕罪人、獲半以上、雖不得半、但所獲者最重、皆除其罪。…限外、若配贖以后、能自捕得者、各追減三等、即為人捕得及罪人已死、若自首、各追減二等。」（とある）

（二）法律述語の踏襲

玉門花海《晋律注》にみえる「捕律」の内容と漢唐の法律との関係は十分に密接な関係にある。上述の条文の他、また少なからざる法律熟語、例えば、「造意」「容止」「發檄捕」「諸下書捕死罪」「以力能助而不助」「賊捕掾游邀」などの語が受け継がれ使われている点に現れている。

「以力能助而助」の語は玉門花海《晋律注》中には、

□、追捕罪人与相

竇以力能助而不助

睡虎地秦簡の「法律答問」には「有賊殺傷人衝術、偕旁人不援、百步中比壘（野）、当賞二甲」この意味するところは、ある人が大道上で人を殺傷し、近くの人が救援に加わらなかったら、その（現

其能自捕獲？

其部界兩

頃明相為

相除也

吏二歲刑

當上

者皆三歲刑滿卅日

得亡奴婢

この「盜賊流竄」は社会の治安と秩序を攪乱する。『華陽国志』李宓伝は李宓が統治する温県に盜賊の流竄がなかったことを大きな功績とみなし、「宓從尚書郎為河内温令、……後諸王過、不敢煩温県。盜賊發河内余県、不敢近温、追賊者不敢經界。」(とする)『晋書』王育伝にも同様の事例がある。「司徒王渾辟為掾、除南武陽令。為政清約、宿盜奔逃他郡。」(とあり)当時「宿盜他郡に奔逃す」る状況であり、流竄という犯罪現象が相当広がっていたとみることができる。

この中の「略吏亭」「若取以為庸客及」(という記載)は最も重視すべきである。「略吏亭」は基層の治安機構を攻撃することであり、漢律の規定に照らし合わせるなら明らかに群盜の行動であり、『晋律注』中にも「群盜」の語がある。

逃亡人をかこって庸客とすることを禁ずることについては、『陔餘地秦簡』「封診式」に「捕 爰書、男子甲縛詣男子丙、辞曰、甲故士五(伍)、居某里、迺四月中盜牛、去亡以命。丙坐賊人命。自昼甲見丙陰市庸中、而捕以來自出。甲毋(無)它坐。」整理小組は(次のように)指摘している。「庸は、『漢書』司馬相如伝の注では「即謂賃作者。後世他写作傭。」とし市庸は市場中で雇用される人である」。張家山漢簡の「亡律」は「取亡罪人為庸、不智(知)其亡、以舍亡人律論之。所舍取未去、若已去後、智(其)知其請(情)而捕告、及誦(誦)告吏捕得之、皆除其罪、勿購。(172)」(とあり)その意味は、逃亡罪人を雇用した主人がたとえ事情を知らなくとも匿罪人律に従って処罰すべきであり、即ち、囲っていた時間の長短を勘案して黥贖耐から贖耐までの(中の)刑に処する。事情を知ったのちに捕縛する、或は誦告の官吏が捕縛した場合、罪を免じるが、褒賞を与えるわけではない。玉門花海《晋律注》に含まれる逃亡人および逃亡人を庸客とすることを禁止するという規定は、秦漢律との繼承関係が顕著である。

第3は逃亡した奴婢である。玉門花海《晋律注》に以下のような記載がある。

諸亡相自出他県變易姓字自

本欲入賊… 刑意

正刑者傳(伝?)選接故

從不入賊中…

誘導奴婢令亡与同罪至斬

捕獲亡者皆實所逋関移符

徒歲尽条諸亡人数列獲 首者

吏持人兵捕盜賊逃亡

上捕盜賊必往来輕

謂以守物

通藏□

□…………

□□盜賊刃

□……皆与同罪

……

……

□上皆

……置署屯部

□□

□□□会征□及随軍征行

随□

→ 有欲入寇賊

随□輕重

□各加罪一等 女人

□□之地

・寇賊吏降及臨戰 # □□□

与頗捕得□□告者罪□

告→□□□？

不□告不得除

衣食寇□婢？亡還論□

ここに載る寇はもともと呉・蜀を示していると考えられる。『三国志』魏書卷3少帝紀、高貴郷公正元元年冬十月条に「詔曰、朕以寡徳、不能式遏寇虐、乃令蜀賊陸梁辺陲」（とある。また）蜀滅亡後はまさに呉をさす。晋律は魏律からの展開の痕跡が明らかで、西晋初年はまた呉と敵対関係にあった。「寇賊吏降及臨戰」の条文は明確にこのことを説明している。

2つ目は流竄する盜賊である。玉門花海《晋律注》には以下の律文がある。

兩三人以

□舍□□□斬

□皆□亡人也即他

□同伍罪二等

□□□下

□□等

□□□□

□□從亡？者方（右？）略吏亭

吏□□□者減罪二等

□□二？家？不滿五日

止□□家？五日以上徘徊？

若取以為庸客及

上□□得者長吏

て晋律を1530条としている。この説は前述の『隋書』刑法志の記載にその本源を見出すことができる。また『通典』巻163が晋律の条文数を630条としている記載に関しては、晋律の原本の620条とは一致してない。『唐律疏議』巻1記載の晋律の条文数は『晋書』刑法志の条文数と一致しているものの、篇目数は8篇多い。

花海出土の《晋律注》に見える晋律篇目数は「四条□二百廿九字、□□律注□□九□凡十三條五百九十六、□諸侯律注□廿録、文五万二千冊言、□律第八、盜律六百一十八字」とし、その中の「晋律廿□諸侯律注□廿」（の記載）（訳者注、ここでの引用では上記の史料にない「晋律廿」という記載がある一方、「廿録」の「録」字が脱落している）は我々が棺板上に貼られた文書が確かに《晋律注》であることの主要な根拠であり、諸侯律は晋律の最後の編目であり、廿は二十で晋律の編目は二十篇である。その後にある「文五万二千冊言」については《晋律注》の全条文の字数を示しているであろう。

我々が注目するのは、『晋書』刑法志で晋律の編目を「合二十篇、六百二十條、二万七千六百五十七言」と記載している点である。1973年に出土した馬王堆帛書の『戦国縦横家書』第十五章から十九章までは、章の末尾ごとに文字数の総数があり、十九章の末尾にはこの章の文字数「三百」以外に、続けて「大凡二千八百七十」とあり、（これは）まさに5章全体の字数の総数である。《晋律注》の文例はこれと同じである。

このほか、《晋律注》と棺材蓋板上貼付の《晋律注》以外の紙文書中には、「亡逋令」、「如諸獄律」、「制在葬令」、「雜律」など晋律令の編目に関する情報を見出すことができる。

以上の議論を通して我々は花海出土の《晋律注》に見出せる晋律篇目数から『晋書』刑法志の記載が正確なものであると証明でき、（篇目は）即ち20篇である。

三、玉門花海《晋律注》の「捕律」論考

棺板文書《晋律注》には「捕律」の篇題があり〔棺板文書「□律第八」。『唐六典』に記載されている篇目の配列順から考えると、この□には“捕”字を補えるであろう〕、その中の条文内容は非常に豊富である。『睡虎地秦簡』『秦律雜抄』には「捕盜律」が存在し、その後出土した張家山漢簡『二年律令』中にも「捕律」「亡律」がある。『唐律疏議』には「捕亡（律）」が18条で一巻をなしている。我々は《晋律注》の若干の条文について、秦・漢ならびに唐律の律条文をあわせて参照することで、各条文の淵源を垣間見ることができる。以下、二つの事例を挙げて説明を試みよう。

（一）警備対象は基本的に同じである。

我々は以下で、晋の捕律の主要な対象となる三種類の人間に注目しよう。

1つは征伐軍に従軍し、逃亡して寇賊側についた人間である。《晋律注》には以下の規定がある。

□律第八

軍□有所違

入寇賊中□作□□還

……

諸□盜賊印□□物？

題に対応する必要が生まれるなら、人員不足を口実に言い逃れをすることはできない。

「得亡奴婢」「欲売未…謂数人共得亡奴」「婢一人以妻妾奴得亡奴婢及以為」「妻妾奴婢之同罪□…」「而放言□□論諸獄律」も《晋律注》中の双行小字注にあり、主要（な内容）は奴婢を捕えた際の褒賞に関するものと、（奴婢の）逃亡を放任した罰に関する解釈である。

杜預の《晋律注》は伝存していないが、その文体の風格は彼の著名な『春秋経伝集解』の注釈文からもうかがい知ることができる。例えば、『集解』の宣公三年の杜注に「報、漢律淫季父之妻曰報」とあり、宣公十五年の杜注に「略、取也、奪也」とあり、僖公十五年の杜預の注に「逋、亡也。」とあり、僖公十九年の杜預の注に「賊、傷害也。」とある。これらの記事から杜預が《左伝》に精通し、また漢律にも熟知していたとみることができる。花海出土の《晋律注》は比較的簡潔・具体的で、その注釈文は漢律に近く、杜預の『春秋経集解』の文体に比較的近い。

我々が注意すべきは、杜預の《晋律注》が当時においては全土に頒布された官側の注釈テキストであり、その影響は比較的大きかったはずである点である。情理の点から推測すれば、杜預は官位も高く、政治力もあり、晋律の制定に参与し、律の注釈は彼の手でなされた。彼はまた司馬氏と姻戚関係にあり、司馬昭の妹の高陸公主を娶って妻とした。したがって、杜預の《晋律注》は詔勅により天下に頒布されたのである。花海出土の《晋律注》は杜預の手になり、全土に頒布されたテキストである可能性が高い。

張斐の注は、彼の『律注要略』中の晋律二十語に対する釈文から大体（の内容を）伺い知ることができる。「其知而犯謂之故、意以為謂之失、違忠欺上謂之謾、背信藏巧謂之詐、虧礼廢節謂之不敬、兩訟相趣謂之斗、兩和相和謂之戲、無變斬擊謂之賊、不意識犯謂之過失、逆節絕理謂之不道、陵上僭貴謂之惡逆、將害未發謂之戕、唱首先言謂之造意、二人對議謂之謀、制衆建計謂之率、不和謂之強、攻惡謂之略、三人謂之群、取非其物謂之盜、貨財之利謂之賍」（とあり）玉門花海《晋律注》双行小注と明確に対応する事例がない。その上張斐の注が明確に官側の命令によって頒行されたものか否か歴史学上明らかではない。

以上の考察に基づくと、花海畢家灘の墓地から出土した棺板文書は、当時使われていた《晋律注》の一部であり、その作者は杜預であろう。

（二）『晋律』は二十篇である。

晋律の編目と条文（数）について、文献の記載には異同があり、620条と記載されたり、630条としていたり、あるいは1530条とあったりする。

『晋書』刑法志の記録は基本的なものであり、またもっとも古い記載である。その原文には「[晋律] 就漢九章增十一篇、仍其族類、正其体号、改旧律為刑名・法例、弁囚律為告該・系訊・斷獄、分盜律為請贖・詐偽・水火・毀亡・因事例為衛宮・違制、撰周官為諸侯律、合二十篇、六百二十条、二万七千六百五十七言。」（とあり）これによると晋律は20篇、620条であったとみられる。

その後晋律の多くは散逸した。南齊期にはなお王植之の集注本があり、（晋律の内容を）見ることができたが、梁武帝期にはこの集注本さえも散逸した。『隋書』刑法志は「[梁武帝] 時欲議定律令、得齊時旧郎陽濟蔡法度、家伝律学、云齊武時、刪定郎王植之、集注張・杜旧律、合為一書、凡一千五百三十条、事未施行、其文殆滅。法度能言之。于是以為兼尚書刪定郎、使損益植之旧本、以為梁律。」（とする）（訳者注、原文は「経籍志」とするが「刑法志」の誤りである。以下の引用も同じ）『唐六典』はすでにある記載を混成し、晋律の本来の条文数を刪定郎王植之の集本と混同して、誤っ

の紀年はおそらく西暦314年の甲戌の歳、(すなわち)西晋愍帝建興二年、前涼張寔永安元年の可能性が高い。《晋律注》以外の紙文書の内容はその書写年代がおそらく西晋末の人の筆になるものであろうことを明らかにしており、これも《晋律注》の書写年代の検討のために参照(すべき情報を)提供している。

以上の4つの点を根拠に、我々は《晋律注》の書写年代を非常に高い確率で西晋末年のものと推定する。

二、《晋律注》の作者と篇目

この《晋律注》の作者は誰なのか?写本に記載されているところの晋律篇目は従来の(晋律に関する)見解に何を補うことになるのだろうか?これが続いて検討すべき問題である。

(一) 作者は杜預の可能性がある

文献記載によると晋律には2つの注がある。一つは杜預の、もう一つは張斐のものである。

『晋書』杜預伝には「(預)与車騎將軍賈充等定律令、既成、預為之注解、乃奏之曰、「法者、蓋繩墨之断例、非窮理尽性之書也。故文約而例直、聽省而禁簡。・・・今所在皆網羅法意、格之以名分。使用之者執名例以審趣舍、伸繩墨之直、去析薪之理也。」詔班于天下。」『晋書』刑法志には「其后、明法掾張斐又注律、表上之」とある。

南北朝時代の『宋書』孔稚圭伝もまた「江左相承用張杜律二十卷」などとしている。こののち、『隋書』経籍志の記載によると、唐初期にはなお見ることができた晋代の法律書には、杜預撰二十一卷本『律本』、晋僮長張斐撰一卷本『漢晋律序注』と張斐撰二十一卷本『雜律解』があった。

以上の史料によると、晋律には杜(預)・張(斐)二種類の注釈本があった。杜預の注釈本はただ序言の片言が残っているのみだが、張斐注釈本、即ち『律注要略』は『晋書』刑法志中に残っている。玉門花海出土の《晋律注》は畢竟そのどちらにあたるのだろうか?検討の結果、我々は玉門花海《晋律注》の選者はおそらく杜預であったと考える。その最も主要な根拠は注釈文章の文体と杜預の注釈による『左伝』の文体とが近いことである。この点を説明するために、我々は玉門花海《晋律注》の中から文意の比較的明確な注釈文を探し(その中の“=”は文字重複記号)、対照してみよう。

「発謂始発所也」は《晋律注》の双行小字注にあるが、張家山漢簡の捕律の「盜賊発」「盜賊發及之所」の中の「発」と同義である。「発=而」は《晋律注》の中の双行小字注にあり、盜賊の追捕の際に用いるが、前後の文は「発=而不足及知賊所而住」とある。原文は盜賊が出没する地域においては地方官吏が十分な人員を派遣し追跡捕縛すべきであるというもので、「発」は発兵の意味である。上文は断片ながらも、文意は基本的に理解できる。原文は続けて、もし派遣した兵が盜賊を追捕するのに足りない場合と盜賊の追捕が遅延した場合、どのような罰に処すべきかにも言及している。(この場合)張家山漢簡の捕律にある「県道亟為發隸徒」中の「発」と同義である。

「逋=食=」は《晋律注》の双行小字注に用いられているが、原文は「□逋=食=不得以人力不足為解也。」であり、(これは)「逋食、逋食不得以人力不足微界也。」と理解することができ、関係する上下の文は逋律条文の文字の解釈に属するものである。「逋」は欠損の意味で、「逋食」とは即ち食料の欠乏のことである。もし食料不足のためにミスを生じさせたことに対応する、あるいは起こった間

次に（指摘できるのは）、写本の抄写形式は漢晋時代の写本のそれと一致することである。《晋律注》は界欄、すなわち烏糸欄で、双行の注がつき、篇題があり、墨で記号をつけており、末尾の題記は抄本の各編の律文条文数、字数およびおそらくは《晋律注》の総字数を記載しているのであろう。その中の末尾題記に字数を掲載するというやり方は長い伝統を有している。武威漢墓出土の『儀禮』簡冊や、銀雀山漢墓出土の『孫臏兵法』、馬王堆三号漢墓出土『周易』・『老子』・『戦国縦横家書』・『経法』帛書および著名な「東漢熹平石經」、「曹魏正始石經」のごときはすべてこれと同じ（形式）である⁴。このことは《晋律》編目の研究についても意義がある。我々は以下で詳論しなければならない。

中国の古典に注釈を記すための双行小注が魏晋期に登場したのは、おそらく紙の普及と関連があるだろう。それ以前の書籍は正文と注文は別々に抄写された。双行小注は敦煌出土の晋人手抄本『孫子兵法』残巻の「形」篇の冒頭のように、その中の双行小注で「辺」を「相親」とし、「覆」に注して「敗也」としている。また、20世紀前半に新疆楼蘭尼雅で出土した東漢～十六国時代の文書中に『左伝』昭公8年夏4月辛丑の残章断句があり、篇番号662号文書であるが、その中にもまた双行小注がある。しかし内容は杜注とは相違する⁵。

その三、棺板文字が出土したM24号墓の埋葬年代の下限はおそらく4世紀後半であり、もっとも遅くとも西涼李嵩庚子4年（403年）を下らない。このことは畢家灘のその他の墓中より出土した9枚の木牘に書かれた随葬衣物疏中の紀年内容から推測できる。随葬衣物疏は死者の姓名と埋葬した年月日を記していて、これは埋葬と出土文書の年代確定に対して重要な意義を有している。53の墓から出土した9枚の衣物疏の内、紀年は前涼建興29年（341）（訳者注、原文では「建興十九年」となっているが、西暦341年は建興29年である。ここでは西暦に合わせて29年とした）から西涼李嵩の庚子4年（403）までである⁶。《晋律注》写本が棺板に貼られ土中に埋葬された時期はこれによって大体推定できる。

その四、そのほかの文書材料の佐証について。我々が注目している、棺材の蓋板の上に貼られた《晋律注》以外の紙文書中に以下の如き内容がある。

- 變火□
- 四海？興亂
- 歲在甲
- 一流？河決？西陰
- 天驚九州

我々は再び推測をたくましくすると、この内容は、おそらく西晋永嘉の乱の惨状を述懐したものであろう。『晋書』孫惠伝では東海王越の書を掲げ、「天禍晋国、構茲厄運」とあり、『晋書』王鑒伝にある元帝への上疏文の文頭に「天禍晋室、四海顛覆、喪乱之極、開闢未有」とあり、『晋書』沮渠蒙遜載記の、蒙遜が東晋皇帝への上表文中にも「上天降禍、四海分崩、靈輝擁于南裔、蒼生沒丑虜」とある。（また）前世紀の50年代広州客村晋墓出土の墓磚の銘文に「永嘉世、天下災。但江南、皆康平。永嘉世、九州空。余吳土、盛且豊、永嘉世、九州荒。余広州、平且康⁷」とある。したがって、「歲在甲」

4 陳夢家「由実物所見漢代簡冊制度」『漢簡綴述』中華書局、1980年版、第291頁以下。（250-①）

5 林梅村『楼蘭尼雅出土文書』文物出版社、1985年版。（250-②）

6 馬雍「吐魯番出土高昌郡時期文書概述」『文物』1986年第4期。張俊民「甘肅玉門花海畢家灘出土的衣物疏」『湖南博物館館刊』第7輯、岳麓書社、2010年版。（250-③）

7 陳寅恪「述東晋王導之功業」『金明館叢稿初編』上海古籍出版社、1982年版。第68頁。（251-①）

ものとなっている。2002年6月甘肅省文物考古研究所は玉門花海畢家灘の五胡十六国期の墓群の緊急発掘を行い、M24号墓中の棺の蓋裏の側面から《晋律注》を貼り付けた文書を発見し、久しく失われていた晋律が再び日の目を見たのである。棺の蓋の相対的位置はすでにバラバラになっており、棺板文書は9つに分かれ、残存していたのは僅かに4234字+289字のみではあったものの、依然として今回の発掘の中で最も価値のある重要な発見である¹。

本文は《晋律注》についての初歩的研究を行ったものであり、この《晋律注》は西晋末の写本で、撰写されたものは杜預の律注の可能性があると思う。これに関する考察と同時に我々は《晋律注》文書を秦漢魏晋における法の発展過程の中に位置づけて考察し、特にその中の「捕律」と「諸侯律」について、(また)北魏律の淵源および河西の律学の要素などの問題についての考察を進め、若干の新見解を提示し、今後の晋律の源流などの問題について更に踏み込んだ認識に達することを願っている。

一、《晋律注》写本の年代

《晋律注》の写本の年代の確定は、我々が最初に検討する問題である。関連する資料の比較検討を通じて、我々はこれが西晋末の写本の可能性が最も高いと考えている。その根拠を次に列挙しよう。

まず、この晋律注の字体の書法はこの魏晋時期の特徴をもつ。我々はこの時期の、西域で出土した晋人手抄の『三国志』(即ち『呉書』虞翻伝、『呉書』孫権伝、『魏書』臧洪伝と『呉書』步騭伝)残巻、敦煌出土の晋人手抄本『孫子兵法』残巻、スウェーデン国立民族学博物館所蔵の、未発表スウェーデンヘディン発見の3-4世紀楼蘭紙文書の字体と照合し、この3者の文書の文字の類似点を見出した。これらの(文字の)筆圧は比較的強い。ただし、前2者は隸書的な要素が濃く、後者は楷書的な趣きが明らかである。(したがって)玉門花海《晋律注》と楼蘭文書とは近い関係にある²。これらはみな簡体(の文字)を使用する傾向があり、「與」はみな「与」と書き、また用いる偏と旁も後世の規範とは違う。例えば、「惶」を「蝗」としている如くである。我々はまた《晋律注》をこの地域で出土した十六国時代の文書、例えば吐魯番出土の文書および有名な李柏文書と照らし合わせてみると、後者は楷書と草書の趣が顕著であるが、前者の時代はおそらく後者よりやや早いだろう³。

1 張俊民「玉門花出土〈晋律注〉」『簡帛研究 2002—2003』(広西師範大学出版社2005年版)、張俊民「玉門花海出土〈晋律注〉概述」『考古与文物』2010年第6期、張俊民『甘肅玉門花海畢家灘出土〈晋律注〉釈文』が間もなく刊行される。(248—①)

2 以下の2件の論文参照。郭沫若「新疆新出土『三国志』残簡」『文物』1972年第8期、李遇春「吐魯番出土『三国志・魏書』与仏経時代の初歩的研究」『敦煌学輯刊』1989年第1期。郭氏の論文には、1924年新疆鄯善県出土の『呉書』虞翻伝と1965年新疆吐魯番出土の『呉書』孫権伝とを対比してみると、字跡から見ると前者は東晋時代の抄本で、後者は西晋時代の抄本だと思われるが、しかし両者の年代はそれほど離れているわけではないという指摘がある。李氏の論文では、『魏書』臧洪伝(抄本)の字は隸書八分体をなしており、同出の『呉書』孫権伝(抄本)の筆跡はどちらかといえば小さく、筆圧もそれほど強くはない。これは明らかに同一人物ではなく、1924年の鄯善県で出土し、現在日本に所蔵されている『呉書』抄本残巻の筆跡にやや類似している。この抄本残巻中の多くの別字体に至っては、上述の鄯善県出土『呉書』残巻中の書写形式と大体一致しているとの指摘がある。したがって、この『三国志・魏書』も東晋十六国時期の写本に属する。楼蘭(出土文書の)文字は、富谷至主編『流沙出土の文字資料—楼蘭尼雅文書を中心として』(京都大学出版会、2001年)中の文書(B)1993-27-2, agr78, (図5-6)参照。(249—①)

3 国家文物局古文献研究室・新疆維吾尔自治区博物館、武漢大学歴史系編『吐魯番文書』第1冊図版、文物出版社1981年版。前涼李柏文書(一稿)(二稿)。『蘭亭論弁』図版拾貳、文物出版社1977年版。(249—②)

(翻訳) 曹旅寧「玉門花海所出《晋律注》初歩研究」

社会科 兼 田 信一郎

解説

ここに翻訳した曹旅寧氏の論文「玉門花海所出《晋律注》初歩研究」は、氏の著書『秦漢魏晋法制探微』(人民出版社、2013年4月)に収録されている論文である。初出は『法学研究』2010年第4期に掲載された。ここで考察の対象となっている《晋律注》とは、2002年に甘肅省玉門市花海郷の西北部に位置する畢家灘で発掘された55の墓の内、M24号墓から発見された紙文書であり、最初はこれが西晋泰始律であるとの情報が入ってきた。その後この文書は泰始律の注釈書である可能性が強いことが指摘されてきた。

この文書の発見時の状況を伝え、最初に考証を行ったのは張俊民氏で、氏の「玉門花海〈晋律注〉概述」(『考古与文物』2010年第6期所収)は曹氏の著書に「附録一」として採録されている。曹氏の本論文中の注によると、間もなく張俊民氏の手になる『甘肅玉門花海畢家灘出土〈晋律注〉釈文』が刊行される予定だそうである。

1970年代の雲夢県睡虎地秦律の発見、張家山出土二年律令の発見、そして北宋天聖令の発見と近年中国法制史に関わる重要資料が次々と発見され、秦から唐までの法制研究が飛躍的に深化を遂げる中、律令法典の変遷の中で、律典と令典の分化という画期的な転換があった西晋泰始律令に関する資料が見出し得なかった中でこの発見は、中国法制史の研究を一層深める意義を持っているし、具体的な条文を通じて法の展開を追求できるようになってきた。そのような中でこの《晋律注》の公開は大変意義のあるものとなる。その《晋律注》の書写年代や一部の条文を検討しながら法制の展開の考察をしている本論文は、今後の《晋律注》の研究の出発点となる諸見解を提示していると考え、今回翻訳して紹介することとした。

翻訳文中の()は文意が通ずるように訳者が補ったものと訳者の注である。また、曹氏論文では注番号が頁ごとに打ち直されているので、翻訳にあたっては通し番号にし、各注文の末尾に()で曹氏著書の頁数と注番号を掲げておいた。

拙い訳文で多くの誤解があるのではと恐れているが、曹氏論文の意義を考え、敢えて訳出した。御指正いただければ幸いである。

玉門花海出土の《晋律注》の初歩的研究

曹旅寧

西晋泰始律は西晋武帝の泰始4(268)年に頒布された。この律は漢律・曹魏律を継承し、また唐律につながる、中国法制史上重要な法典である。しかしながら、泰始律自体は早くに散逸し、また、『晋書』刑法志の叙述は簡略すぎるため、後世の晋律研究は律条文の分析を欠き、推測の部分を多く伴う

- Urry, J., 1990, The tourist gaze : leisure and travel in contemporary societies, Sage, London

INSEE

- Insee Conjecture Provence-Alpes-Côte d'Azur no 5 – mai 2015, 'Le transport de marchandises mis à mal'
- Afflux de touristes étrangers conforte la reprise a PACA en 2010
- Afflux de touristes étrangers conforte la reprise a PACA en 2011
- Atlas Socio-economique de la Nice Ville et ses quartiers,2002
- RP2011

ニース市資料

- Grand Projets, dossier de press 2013
- Nice - la lumière naturellement

ニース空港 Aéroport de la Côte d'Azur

- Rapport Annuel, 2014

ガイドブック

- Berlitz, Nice, Cannes & Monte Carlo, second edition 2012
- CITYPACK TOP25, Nice, AUTOMOBILE ASSOCIATION DEVELOPMENTS 2008
- INSIGHT GUIDES, NICE & THE FRENCH RIVIERA, 2010
- Lonely planet, Provence & the Côte d'Azur
- MARCO POLO, FRENCH RIVIERA NICE, CANNES & MONACO, 1st edition 2012

インターネット

- about.com
(<http://gofrance.about.com/od/nicetravelguide1/>)
- kwintessential (Tourism in Nice France)
(<http://www.kwintessential.co.uk/articles/france/tourism-in-nice-france/601>)
- Nice Travel Guide
(<http://www.nileguide.com/travel/destination/nice>)
- Planet Ware
(<http://www.planetware.com/tourist-attractions-/nice-f-az-ni.htm>)
- World Guides
(<http://www.world-guides.com/europe/france/provence-alpes-cote-dazur/nice/>)

Abstract

To discuss the situation in international cities as tourist destinations, I used the method of studies on international cities first, and then touristic sites, because issues in globalised cities might be caused in internationalised touristic cities. In this paper, a case study in Nice, a well-known tourist destination, will be given, as many immigrants from Maghreb countries as well as Italy live in Nice, so that this study will tell us that immigrants' existence from each nation might affect Nice's tourism in each way.

参考文献

- ・ 内田州昭「文化的観光再考—“観光的魅力”に関する試論—」 in 前田勇編『現代観光学の展開—観光行動・文化観光・国際観光交流—』(学文社、1996年)
- ・ 金沢まちづくり市民研究機構5Dグループ『外国人にとっても魅力があり来訪しやすい国際観光都市金沢を考える』研究成果報告書(2008年)
(<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/data/open/cnt/3/12295/1/5D.pdf>)
- ・ 須藤廣『観光化する社会—観光社会学の理論と応用』(ナカニシヤ出版、2008年)
- ・ ダニエル・ブーアスティン、星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代—マスコミが製造する現実』(創元社、1964年)
- ・ 堀泰則『飛騨高山 国際観光振興の取り組みと現状』(2013年)
(<http://www.chubu.meti.go.jp/a31tokai-kyougikai/sagyoubukai1/4-5hidahoterupuraza.pdf>)
- ・ ジョージ・リッツァ、正岡寛司訳『マクドナルド化の世界』(早稲田大学出版部、2001)
- ・ Bhattacharyya, D. (1997) 'Mediating India: An Analysis of a Guidebook', in *Annals of Tourism Research* 24: 371-89
- ・ Friedmann, J., 1986, "The World City Hypothesis", in *Development and Change*, Volume 17, Issue 1, pages 69-83, January 1986
- ・ Foster, J., 1964, "The sociological consequence of tourism," in *International Journal of Comparative Sociology*, 5(12), pp.217 - 27
- ・ Gimmel, G., 1950, *The Sociology of Georg Gimmel*, The Free Press, Glencoe
- ・ Lequin, Y., dir(1988), *La mosaïque France : histoire des étrangers et de l'immigration*, Larousse, Paris
- ・ Mauco, G., *Les étrangers en France. Leur rôle dans l'activité économie*, Paris, 1932
- ・ Rainero, R. H., "La crise de la main d'œuvre italienne à Nice dans les années vingt et trente" in *Cahiers de la Méditerranée*, 2007, vol 74
- ・ Reclus, O., *La Côte d'Azur, Site et Momuments*, 1900
- ・ Shor, R., "Les Italiens dans les Alpes-Maritimes, 1919-1939" sous la dir. de Pierre Milza, *Les Italiens en France de 1914 à 1940*, 1986, École française de Rome, Rome
- ・ Sassen, S., 1991, *The global city : New York, London, Tokyo*, Princeton University Press
- ・ Smith, V, ed., 1989, *Hosts and guests : the anthropology of tourism*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia
- ・ Souza, R., de, *Nice capital d'hivier*, 1913

いる観光客には特にイタリア的な色彩は魅力となろう。南欧の地中海を観光魅力と感じている人々にとってもフランスの中のイタリア的な要素は、想定外の驚きと感動を引き起こしうる。国民国家としてはフランスに入っている一方で民族的にはイタリアとも深い関係のあるニースは、現在でも例えば Rue de France には住民や店員の間でイタリア語による会話が交わされている。観光イメージと密接に結びついているイタリア系の人々が多くいる一方、移民比率ではマグレブ系移民は非常に高く、観光客が目にする可能性も高い。Thiers 界隈はフランス国内とは思えないほどマグレブ的色彩の濃い街区である。宣伝されたイメージと親和性のある移民とそこには描かれていないため事前の認識がされていない移民が国際観光都市には生活している。観光満足は観光都市には中長期的な来訪を期待する上で不可欠な要素であるがゆえ、イメージされるものと実態との相違から生ずる観光満足の高低は重要な課題となる。グローバル化の中で生じた都市の国際化と、今後より一層進んでいこうとする都市の観光化を論ずるため、現地調査の結果を用い、イメージと期待、想定外や予想外、予定外といった心理的作用と感動／失望が関連していることを示した。

グローバル化する現代社会の一つの帰結として、国際観光都市における移民に着目した。国際化や観光化の進展が同時に起こり、場合によってはその流れが推進されていく社会において、観光客と都市のマイノリティやサブ・カルチャーとの出会いはより不可避になっていく。そしてその影響は、文脈によっては良くも悪くもなることを明らかにした。中等教育課程では、より広い多様性の許容性を育めるよう指導していくことが求められていこう。

論文要旨

「国際観光都市」に関し、各々の特徴を有する「国際都市」と「観光都市」という2つの視点からアプローチする。「国際観光の都市」ではなく「国際都市の観光化」の帰結に「国際観光都市」を見ることで観光市場の国際化から生ずる問題、畢竟観光的問題ではなく、都市の国際化という国際都市において生ずる点を指摘する。観光が国際化した都市においても流動性の結節点としての国際都市に生ずる問題が起こることは否定しきれない。本小論ではその一例として移民問題と観光との関係を指摘するため、ニースの事例に着目する。現地調査で移民のプレゼンスが観光に影響を与えていることが確認できたためである。

Résumé

En considérant la notion « la cité touristique internationale », on peut référer deux aspects, « la cité touristique » et « la cité internationale ». C'est là, la cité globale, que des difficultés citadines provoqué par globalisation, comme sur immigrés, par exemple, ont surgi. Cet article s'intéresse le tourisme à Nice, parce qu'il est une grande destination touristique très connu dans le monde, et aussi le taux immigrés est très haute, en comparaison de situation à Paris. L'analyse souligne alors les tentions autour desquels touristes et immigrants à Nice, ou la rencontre inattendue ou imprévu parmi les immigrants et touristes.

不可避であるケースもある。フランスはマグレブ諸国から移民を多く受け入れてきており、フランス人にとって街にマグレブ系の人たちがいるのは日常的なことであり、特に違和感がなかったことは指摘しうる¹⁸。実際、調査時にも「マグレブ系とは？」という質問は英語の質問票での回答者に多く、フランス語では皆無であった。ニースの場合は国鉄駅や宿泊施設、主要な観光資源である海浜部やショッピング街、ニース料理を堪能できる飲食店などとマグレブ系の色彩の強い街区とが無関係ではない位置にそれぞれある。特に彼らが事件を起こしたということでもなくとも、事前の情報収集によって得られなかった点と目の前の空間とを比し、印象と異なる予想外な光景が好ましいものか否かで観光客は自らの文化的背景などから直感的に反応することが確認できた。

4. 結 論

グローバル化と無縁で過ごすことはほぼ不可能で、それゆえに今後の世代を育てていく教育には現状の把握だけでなく、将来生じるだろう状況に対応・解決できるような指導が必須となる。しかしグローバル化を考えるアプローチだけでも多様である。その中で展開されていく世界・社会の再構成、再編成は現実的な形で我々に現前する。実際に体感することになるのは都市空間であろう。また、グローバル化の中でさらに推し進められていくだろう国際都市化ということになると、単一の考え方で紐解くことも困難である。

国際都市の観光化という視点から国際観光都市について論ずるため南仏ニースの現状に触れた。国際都市としての要素を持つ観光都市であるためである。国際都市の形成には移動を引き起こす要因が必要であるが、今後各都市で進んでいくことが予想される。これまでは大都市に近接した大規模空港という前提があったが、航空業界のハブ化という考え方は地方都市の国際都市化も引き起こす。そして観光化が模索され、施策されるとより多くの国々から人々がやってくることになり、民族的多様性が増す。多様さの在り方は一様ではなく、それ自体がまた各都市の相違となっていく。

国際観光都市という複合的な空間について考察をする手段を得るべく、都市論や国際社会学を用いた。国際都市に見られる移民は、都市が観光化されると単なる住民というレベルを超え、都市の空間や光景の一部となる。観光化のプロセスで人々は各種メディアを通して観光対象となる都市に対するイメージを構築するが、初めての訪問の際には事前情報として持っているものがガイドブックやインターネット上の情報、市によるアピールなどと限られた手段となっている。さらに観光客に対しイメージしやすくなり、また観光目的地の一候補である状態から多くの人々に選ばれる都市になるべく、こうした情報においては都市が持つ観光魅力の純度が高められ、一か所の観光地ではなく観光都市として認識されるよう重層的・複合的かつ総合的なキーワードが都市イメージとして用いられる。ニースにおいては「フランス国内の地中海的な高級南国リゾート」という部分に絞られた情報が流布され、かつ固定的なものとなる。しかし都市の全てが人々に伝達されるとは限らない。ニースの観光を対象とすることでイメージされるものとそこには描かれないものを提示できた。国際都市には国境を越えて人々が集まってきており、その不均一さは各都市の特徴となり、都市であるがゆえにサブ・カルチャーを成立させる。国際都市としてのニースは歴史的・地理的な理由からイタリア系およびマグレブ系移民の多い場所である。得られた事前情報と親和性の高いイタリア的雰囲気や、同様にフランスにおいてはサブ・カルチャーになるマグレブ的文化との観光客の出会いの間には反応に違いが生じていることが現地調査で確かめられた。ニースの歴史的な背景ゆえ、フランスへの観光を念頭に置いて

ブ系のものである。そもそも観光と地理的に密接に結びついている街区に大通りから裏手になる場所があり、そこにマグレブ系移民が多く集まっている。このようにして観光客と移民とが接触することとなる。

観光客と移民の接触による影響を調べるべく、2012年夏に質問紙票を用いた調査を行った。質問紙はフランス語のものとして英語のものを用意し、回答者がフランス人であるか、それ以外の出身者であるの区別を試みた。観光対象や活動、出発前と到着後のニュースに対するイメージの変化、観光満足などを質問したが、本小論の中心的関心についての部分のみに限ることとし紙幅の関係で詳細な分析は別の機会に譲る。ニュース住民の民族的な分類はフランス人、イタリア人、マグレブ系、アジア系の4つにした。それぞれの民族について、イメージしていたものと実際に訪問してから抱いたイメージと比べて「多いと感じた」「イメージ通りであった」「少ないと感じた」となったもの、および質問紙票の使用言語により計24通りになる質問への答えと観光満足の高低に関する分析を行う。フランス語回答によるもので、フランス人が実際の印象として少ないと感じた人に観光満足の高低があるなど、幾つかの特徴を得ることができた。ここでは「国際都市における移民が観光に影響を与えているのか。ある場合にはどのようなものか」という点にのみ指摘する。印象としてイタリア人が多いと感じた人たちについて、英語回答のものでは「イメージ通り」「印象よりも多い／少ない」に大きな差異は認められないが、フランス語回答のものでは「印象よりも多い」と感じた人に観光満足が高めの傾向がある。それに対しマグレブ系の人たちに関する質問と観光満足度について、フランス語回答ではイメージ通りであると観光満足度が高く、少ない印象・多い印象と事前のものとの相違がある場合には満足度が低かった。英語回答のものでは事前の印象通りである場合はフランス語回答のものと同様、観光満足には影響が少ないが、少ないと感じた場合には満足度が高く、多いと感じた回答には低い満足度が見られた。出発前のイメージと近い印象を実際の訪問時に感じると観光満足度が高い点はプーアスティン(1964)の「現実が疑似イベントにしたがう」(p.53)という指摘やリッツァ(2001)による「真正性を探求する代わりにシミュレートされた経験を期待し、実際にそれを経験」(p.262)など、観光客の観るものが事前の印象に支配されるとした点を確認できたと考えられる。しかし事前のイメージとの相違がある場合、それが「期待以上」となれば観光満足に結びつくが、ある種の裏切りのようなものになれば失望につながる。つまり、ここで重要なことはイタリア人の多さと観光満足度の高さ(フランス語回答)およびマグレブ系の多さと観光満足度の低さ・少なさと高い満足(英語回答)という関係である。

観光は各種メディアを通して抱いたイメージを持って観光地に向かうことになる¹⁷が、そこにはすべてが描かれているわけではない。ガイドブックにはイタリア系やマグレブ系に関する高く特徴のある移民比率や失業の問題などは触れられていない。そこに書かれていたのはエレガントな街並みや花の香り、南欧の地中海文化、高級リゾートであった。しかし実際の訪問では都市の構造上、出会いが

17 実際、Bhattacharyya (1997) はメディアによるイメージ形成とのかかわりにおいて観光のあり方を問うことが、観光社会学の非常に重要な課題であると主張している。

18 概して南仏は移民が多い。ニュースは政治的に右派が強く、2012年に社会党オランドが大統領に就任することになった選挙でもUMP(Union pour un Mouvement Populaire; 国民運動連合、2015年の党名変更で共和党Les Républicains)が大勢を占めており、FN(Front National; 国民戦線)も安定的に強い。両党とも移民に対しては厳しい政策を出す傾向がある。これらのことからフランス人の間ではニュースにマグレブ系移民が多いという印象を事前にとっていただ可能性もある。

ある。パリにマグレブ系移民の問題が存在していることは1996年のサン・ベルナルでの不法移民たちによる立てこもりや2005年フランス全土に広まった一連の暴動がパリ郊外サン・ドニでの事件がきっかけとなったことなどを想起するまでもない。またイタリアはスペインとともにヨーロッパにおいて長く移民送出国であり、今日では各ホスト国での滞在が長期化しているため、マグレブ系移民と比べると、おおよそ社会的統合が進んでいると考えられている。再びニースにおける移民の比率に着目すれば、イタリア系およびマグレブ系移民両者の高さやそれぞれの社会的状況は移民に関して議論を深めていく上で興味深い。

3.2 ニース市内の特徴と観光—民族的特徴を中心に

ニースを訪れる人たちが事前に抱いている印象は南国や地中海、イタリアを彷彿とさせる雰囲気をもつ高級リゾートである。ホテルに限定してみても、4つ星以上のホテルの宿泊数はここ数年非常に伸びていることはINSEEの2010年及び2011年のデータが示している。その一方で幅広い観光客が訪れるニースには無星から3つ星のホテルもある。4つ星以上のホテルはおおよそ海岸沿いにあり、3つ星以下、特に2つ星以下になるとrue de France（フランス通り）や大聖堂の裏の街区にある。大聖堂はニースを南北に通るAvenue Jean Médecene（ジャン・メドゥサン大通り）にある観光目的地

表2：ニース及び各街区の産業構造（各100%中）

	食品販売	宿泊施設	外食産業
ニース全体	11.06%	3.04%	16.09%
Thiers	9.94%	7.76%	17.08%
Médecine	3.99%	6.06%	16.91%
Rue de France	8.35%	5.64%	17.16%
St. Roch	12.53%	0%	11.98%
Pasteur	17.71%	2.08%	14.58%
La Madeleine	15.89%	0.47%	16.82%
Ariane	33.62%	0%	6.03%

Atlas Socio-economique de la Nice Ville et ses quartiers, 2002より作成

に海岸方面へ出よう¹⁶とすれば通らざるを得ないところであり、観光客と無縁とは言えない地帯である。そのため、非ヨーロッパ系の人たちと観光客との接触機会が多い。これはニースの都市構造と無関係ではない。表2はニースの各街区と産業構造を示したものである。駅周辺部については駅のあるThiers、やそこから海岸へ直線的に向かうと通ることになるRue de Franceやショッピング通りであるMédecineといった街区が該当し、それ以外は住宅区で、Pasteurを除くと郊外に位置する。宿泊施設や外食産業はこれら3街区に多いことが読み取れ、観光産業を担っていることが分かるが、このデータを参照しつつ実際の各街区の特徴を述べるならば、Rue de Franceで営業されている外食産業はピッツアやスパゲッティといったイタリアのものであるのに対し、Thiersではケバブなどのマグレ

の一つで、ここを訪れないとしても大通りには飲食店や商店などが並んでいるため、観光客のほとんどがこの通りを利用することになる。しかし、この大聖堂の裏一帯にはマグレブ系の移民が昼夜を問わず集まっており、肉屋には「ハラル」ミートであることをアラビア語で表記していたり、電話サービスの店もアフリカとの通話を想定していたりと、マグレブ色が強い。また中華やベトナムなどのアジア系レストランも少し離れたところがあり、大聖堂の裏一帯は非ヨーロッパ的な印象のある街区になる。この辺りは国鉄駅からジャン・メドゥサン大通りを通らず

16 海岸の東側へ出る際はジャン・メドゥサン大通りを通ることは現実的であるが、海岸の東側にある観光スポットはマセナ広場や旧市街、城壁跡であり、西側にはホテル・ネグレスコやカジノ、また宿泊施設も多くある。

えるが、それは 20 世紀前半の段階であり、今日においてはすでに国際都市としての様相を呈しており、同時に観光化も進んでいるため、本小論によって示される「観光化した国際都市」の文脈で分析することが適切である。

3.1 国際都市としてのニース

ニースの国際的な側面としては、玄関口であるニース・コート・ダジュール空港 (L'Aéroport Nice Côte d'Azur) や住民の人種的多様性から指摘しうる¹³。空港の年次報告書 (Rapport Annuel 2014) に

表 1：出身国別移民人口の比較

	ニース	パリ
ポルトガル	4.91(0.83)	6.58(0.71)
イタリア	11.93(2.01)	3.40(0.37)
スペイン	1.71(0.29)	3.43(0.37)
EU27 各国	11.10(1.87)	13.33(1.44)
欧州他国	7.53(1.27)	5.67(0.61)
欧州計	18.63(3.14)	18.99(2.05)
アルジェリア	9.72(1.64)	8.95(0.97)
モロッコ	11.73(1.98)	8.10(0.88)
チュニジア	18.04(3.04)	5.29(0.57)
マダガスカル計	39.50(6.66)	22.34(2.42)
アフリカ他国	11.85(2.00)	14.11(1.53)
トルコ	0.72(0.12)	1.00(0.11)
他国	10.76(1.82)	30.15(3.26)
計	100(16.87)	100(10.81)

数値は総移民人口比、カッコ内は全人口比
Insee, RP2011 より作成

によると、ニース・コート・ダジュール空港は、フランス国内でみるとパリに次いで 2 位、グループ¹⁴としてはヨーロッパで 2 位のビジネス利用客 (p.10) をほこる。またニースを出る航空機の目的地は直行便だけでも 101 か所 (p.16) になる。国境を越えた人の移動の結果、ニースには多くの移民が住んでいる。表 1 はニース市 (Ville de Nice) の移民人口を、国際都市として広く認識されているパリ市 (Ville de Paris) と比較して、出身国別に表したものである。総人口はニース市 344,064 人に対しパリ市は 2,249,975 人、そのうち移民はニース市 58,056 人、パリ市 243,284 人となっている。ヨーロッパ諸国出身者は両市とも大きな違いはないが、パリはヨーロッパやアフリカ以外の国からの移民が多く、国際色豊かであることがわかる。ニースは全人口比でパリの 10.81% と比して移民比率が高く 16.87% になっている。内訳をみ

るとイタリア出身者とマダガスカル出身者が多い。イタリア系の多さについては地理的的近接性もさることながら、ニースがフランスに併合されたのが 1860 年で、それ以前サルデーニャ公国領であり、フランス本土では普仏戦争や両大戦による領土の変更を除くと最も遅い国境線変更が行われた地域でもある。そのため、ニースでは人々の交流は対フランス間というよりはイタリア側との間で行われていた¹⁵。Rainero (2007) は 1920 年代から 30 年代に見られたニースへのイタリア系移民の実態を分析しているが、外国人の流入総数に占めるイタリア出身者がおおそ 80% であった。マダガスカル諸国からの移民が多い理由は地理的なもので、地中海を挟んだ対岸に位置していることがある。

パリに比してニースにおける移民のデモグラフィはイタリアやマダガスカル出身者の多さが特徴的で

13 ニースは地中海に面しているため、空だけでなく海からも入ることができる。しかし港は浅く、大型船は直接ニース港に入れられないこともあり、Insee Conjecture Provence-Alpes-Côte d'Azur(2015) によると利用客は 2014 年のデータで 130 万人程度とマルセイユの半数程度である。

14 ニース、カンヌ、サン・トロペの 3 空港

15 イタリア、特にトリノからニースへの人の流れは 14 世紀ころにはあった。詳しくは Lequin, dir.(1988) を参照。

な五感を刺激するといった古来の雰囲気醸し出し、料理や建造物での色彩の豊かさは南国を連想させる。こうした伝統的な観光地でありながら、近代的な設備も整っているという街がニースであるとされているのである。

2.4 ニース観光イメージとマイノリティ

ニース観光の魅力として描かれているものは、ガイドブックやニースの観光用資料では「歴史ある地中海の高級な南国リゾートで、その歴史性や料理の独自性」であるが、インターネット上での描かれかたは Mauco の見たニースと近く、「フランスという国家の中で味わうイタリア・地中海」といったものも付け加えられる。本小論において、こうしたイメージを持ったニースへの観光客が実際に体感することとの関係性は重要になる。

入手可能であった観光用資料を基に、観光客は都市に対してある程度固定性のあるイメージを持って訪問し、目にしたり五感を通して体感することになる。国際都市が持つ民族的多様性は、都市の観光資料に描かれている場合にはイメージとの親和性の高い民族性がある一方で、負の影響のある人たちが存在する可能性が指摘しうる。Smith らの研究やカヤン族の例で見たような、民族性自体が観光資源となっているケースと異なり、国際都市にそもそも備わっている複数の民族的要素を、都市観光の文脈で考察する必要性が生じる。

3. ニースにおける移民

国際都市が観光化することの諸側面に関する考察を実際に適用する方法としてニースにおける移民の分析を試みる。ニースの国際性や観光化を、その歴史から鑑みると 18 世紀には避寒地として観光化されており、19 世紀から 20 世紀にかけて有名になっていった。ニースにおける観光化の契機は 1864 年に鉄道駅が建設されたことであった。鉄道の開通によって多くの観光客を呼び込むことが可能となったのだが、当時のニースは街が整備されてはいなかった。1840 年ころに始まっていた海浜部の開発は 1860 年代に *Camini dei Anglès*¹⁰ の整備・拡充というかたちで加速化したが、観光業の主要な部分を担っていたのは、今日の「旧市街」にあたる街区であり、観光資源である海からは距離があった。さらに駅と旧市街を結ぶ *Avenue de Gare*（駅大通り）には商業施設などはなく、観光地としては不十分であった。またこのころの旧市街は衛生面や宿泊施設でも問題を抱えており長期滞在にはむいていなかった。1900 年頃にサン・モリッツがウィンター・スポーツというスタイルを打ち出すと避寒地ニースは打撃を受けたが、1912 年にホテル・ネグレスコが始業しマセナ広場にギャラリー・ラ・ファイエットやラ・リヴィエラがオープンすると贅沢品や装身具を扱う店が多く展開されるようになり、レストランの開業も相次ぎ、「冬の都」¹¹ や「コート・ダジュール、ヴィラと冬の町、堂々たるホテルの豪華な館やカジノの、海の魔術的なパノラマの、芳香かおる温室」¹² などと形容されるようになった。そして第一次世界大戦中にアメリカ人傷病兵がコート・ダジュールで療養したことから夏の快適さが広まることとなった。歴史的にみると、現在のニースは「国際化した観光都市」であるとい

10 ニース語であるが、これは今日の *Promenade des Anglais* である。

11 Souza (1913)

12 Reclus (1900)

2012年夏に行った現地調査の際、多くの観光客がインターネットを情報源としているとの回答があった。そのため about.com や World Guides、nile guilde、kwintessential、Planet Ware を参照した。そこで描かれているニースは太陽や紺碧の海、日光浴のような南国リゾートの性質や上流階級の人々が集うという高級感、芸術と歴史などに触れている。Planet Ware はこうした要素に加えフランス・イタリア間の編入・割譲の歴史を述べている。概してインターネットでのキーワードは①南国リゾート②高級感③歴史性であり、③については Planet Ware がフランス編入への経緯に触れている他は格式を彷彿とさせるような描写をしている。

ガイドブックはニースのみで発行されているもの(CITYPACK TOP25)やニース主体のもの(INSIGHT GUIDES)、カンヌとモナコも掲載しているもの(Berlitz や MARCO POLO)、南フランスを広くカバーするもの(lonely planet)とがあり、構成によって割かれるページ数に制約が出るため詳細さが異なる。共通しているのは歴史的事実を踏まえ、ニースが世界中から観光客を集めてきた海浜部の高級リゾートであるとしている点である。ギリシア時代からなど比較的長めに歴史のページが用意されている CITYPACK TOP25 や INSIGHT GUIDES にはフランスへの併合にも触れられるというように、イタリアとの関係の深さにも記述がある。

インターネットやガイドブックの他、ニース市⁹によるものもある。ニース観光局は『Nice - la lumière naturellement』という冊子を用意し、ニース全般に関する紹介や観光スポットについて説明を加えている。同冊子に基づいて俯瞰し、ニース市の意図を考察する。

ニースはアルプスとコルシカ島、イタリアとの中継点であり、気候は穏やかで夏は暑すぎず、冬も寒すぎない(p.9)。エレガントでありながら親しみやすく、ニンニクやオリーブオイル、バジルを使った様々な国の料理を堪能できる(p.19)。ニースでの有名人の一人ガリバルディの名を関したガリバルディ広場については赤いサルデーニャ風のファサードや緑のニース風雨どいの建物に囲まれた、旧市街発展の最初の地(p.23)である。大聖堂は近代初の宗教的建造物でイギリス流儀を取り入れたものであり、19世紀に戻ったような感覚になる場所となっている。ニース文化に関してニース語の存在や料理に関する記述があるが、特に料理についてはファルシや揚げパン、ニース風サラダなどのニース料理を紹介しつつ、ファルシ、ズッキーニの花の揚げ物、ニース風サラダ、ラタトゥイユなどではトマトが使われる(p.40)のだが、様々なニース料理で共通して調理されるものの印象を与える。また、海でのアクティビティの紹介がされており、ショッピングもニースでできることが述べられている。買い物はフランスでパリに次いで2番目に大きなギャラリー・ラ・ファイエットと繊細な香りの漂うサレヤ広場といった、近代的なもの土着のものとが並べて記述されており(p.50)、広いニースを実現しているかのようである。

ニース市による資料はニース独特なものを、客観的事実に基づいて紹介するといった形式をとっている。建物や街並みに関しては「エレガント」であることがたびたび表現され、「花の香り」のよう

9 2013年に Grand Projets (大プロジェクト)と称して都市開発の方針を打ち出している。

その目的は①エコな都市の模範となり地中海の緑の街となること②地中海の生活様式を体現し、旅行者の要望に対して責任を果たすこと③市の真正さを守り、訪問者に対してはおもてなしの質を保証する④短期滞在者にとって欠かすことのできない目的地になること⑤これらの目標を実現するために、住民や観光客の将来の生活様式を再定義すること(p.3)で、②～⑤には観光との密接性がある。①についてもエコ化の一環で観光客の利便性向上が図られることや環境に優しい国際展示場を建設することで国際会議や関連宿泊施設も標準があり、ニース市の新たな観光対象化の意図が見える。

ワイでは観光の経済規模が総生産量の4分の1に相当し、3人に1人が何らかの形で観光業に携わっているとされている。日本人を除けば観光客の多くが「白人」であり、ホストの側は、例えばホテルのルームメイキングはフィリピン系、バスの運転手はネイティヴ・ハワイアン⁸、タクシーの運転手はベトナム系、ハワイアンショーでフラを踊るのはハワイ以外からのポリネシアン系と明らかな区分けがなされている。ハワイ観光の魅力の1つとしてメディアなどで描かれているのはエキゾチックなフラ・ダンサーであるが、その彼女たちは白人でも、黒人でも、またネイティヴ・ハワイアンでもなく「ハバ・ハオリ」という半分白人の空想上の女性たちである。このイメージは現在でも流布しているもので、実際にハワイのパフレットにはフラを踊る「彼女たち」が多く描かれている。ハワイのように実際には存在しない女性を観光魅力としてアピールする例もあるが、須藤(2008)はタイ北部のカヤン族について触れている。カヤン族は「首長族」と呼ばれ、女性は真鍮のコイル状リングを首に巻いており、視覚的に目立つ。カヤン族はもともとミャンマー東部から逃れてきた難民で、当初は難民キャンプにいたが、その視認性から観光化が模索され、メーホンソーンに作られた観光村へ移送された。観光化に成功している観光村では女性たちが土産物屋を営み、観光客に写真を撮られることを厭わない。しかし彼女たちは、伝統が見せ物として扱われ、観光客から通り一辺倒な問いかけやコメントに対し、不満を覚えていると述べている。Smithらは民族性が観光資源になったことにより、マイノリティの復権や自文化への誇りを再び起こさせるようになったことを指摘しているのに対し、「ネイティヴ・ハワイアン」やカヤン族の例では、彼らの日常が奇妙なものでしかないと認識されたり、そもそも実態が伴わない／異なるケースがあったりするため、民族性が少数民族側に好転的な機能をするわけではないことを示しているが、両者に共通しているのは観光の源泉が異質性や特殊性にあり、相違は観光化の帰結に見られるものである。

2.3 文化とニース観光

地理学者の Mauco(1932) はニース、カンヌといった地中海沿岸の多くの都市で、貧しい大衆が集住する街区を通れば南イタリアの町にでもいるような感じがし、フランス語が外国語になっており、カフェとイタリア食品店でごったがえしている (pp.334-335) と記述している。このころ見られたニースにおけるイタリア人に関するデータは 1926 年当時に関する Shor (1986) が最も近いが、女性 48%、高齢者が 13%と高めであり、20 歳以下が 15%と子供が少ない。移民は単純労働に従事する男性単身に始まり、その後妻子を呼び寄せる形で定住化が進むことから、移民初期においては男性の比率が高くなるため、このデータからすでに 1920 年代にはイタリア系移民はニースにおいて安定的な生活が営んでいたことが分かる。20 世紀初頭のニースのイメージはイタリア的なものであり、実際にその雰囲気は強かったようである。Mauco のような見方、すなわち都市のイメージと民族的文化とが結びつくことはしばしば起こる。ここではニース観光でイメージされるものを分析する。

観光に向かう際には実際に訪れたことのある知人からの話やガイドブックなどが参照され、複数の目的地候補から絞られていく。刊行物はしばしば手にされるものであり、そこでの描かれ方は都市のイメージ構築に大きな役割を果たす。ニースに関しては市販のガイドブックをはじめ、市が発行しているものやインターネットに様々な情報があり、共通している部分と異なる記述がなされている。

8 ハワイにおけるネイティヴ・ハワイアンに関しては就労機会やホームレス率などに見られる差別の問題がある。2002 年立命館アメリカプロジェクトに若干の記述がみられる。

その度合いの高低によって他との差別化が実現できる。しかし外国人観光客を呼び込もうと画策する場合、観光客との相違が大きくなるため受け入れ側にとって日常的なものであっても観光客からは珍しい事柄に見える。ゆえに新たなものを創出する必要性は少なく、普段の日常的な光景だけでも観光客にとってはみるべき対象になる。

2.1 民族文化と観光（1）—観光と結びついた民族性

集住や店舗などに一定の民族的な特徴を備えていると、その地域がエスニック・タウンであると人々に認識されるようになる。観光化が行われる場合、当該地域と無関係であるようなものがアピールされることは少ないため、エスニック・タウンになっているとその街の民族性が観光対象として認知されることもある。

民族性と観光の関係に着目したのが Smith, ed (1989) である。彼女らは文化人類学の見地を観光分析へと応用することで、文化や民族性が観光対象となることの意義を様々な事例から検証した。その序文の中で彼女は観光の類型として少数民族観光、文化観光、歴史観光、環境観光、レクリエーション観光の5つを挙げている (pp.4 - 6) が、レクリエーション観光以外のものは何らかの形で観光対象が少数民族であることと関係する⁷。同書には少数民族観光の例としてエスキモー (3章) やクナ族 (4章) などが扱われているが、Nash による2章「Tourism as a Form of Imperialism (帝国主義の一形態としての観光活動)」は少数民族観光を生じさせる要因に関し、Foster (1964) を引用しながら人を観光地へと向かわせるものとして費用と異質性を挙げている。費用とは輸送手段が適切で安価なこと、そして観光目的地の生活水準がわずかに低いことで、異質性とは観光客の衝動やニーズを満たすようなものでなければならない (p.219)。観光の条件となる異質性とは Gimmel (1950) が strangerhood (見知らぬこと) と表現したまさにそれであるとしている (Smith, ed. (1989) p.45)。「見知らぬこと」とは観光対象となっている人々の持っている本質的な部分を共有することのない一時的な滞在者が抱くものとし、結果的に両者の相互作用は一般的で非個人的に行われ、それぞれが単なる「対象」でしかない。そしてこの「見知らぬこと」によって観光する人々は文化的差異を感じる (p.46)。3章のエスキモーの事例では観光によって失われていた彼らの文化が復興・復権したこと、4章のクナ族の事例では土着文化の観光化が国家のプロジェクトとなった後でも少数民族が観光開発のイニシアティブを握っている必要性を主張したものである。少数民族の文化とは、観光の文脈では観光者との差異に意義があるため、双方の日常性の相違が観光への源泉となる。また、少数民族にとっては新たな収入源ということ以上の意味がある。

2.2 民族文化と観光（2）—観光における希少性としての民族文化

少数民族が観光化される例としては他に「ネイティブ・ハワイアン」とカヤン族が挙げられる。ハ

7 環境観光と少数民族との関係性については示唆に富む部分もあるが注意も必要である。彼女の説明によると、それは見慣れない風景を体験するために行う観光で、学究的旅行者が人間と土地との関係を観察するために車で旅行するものである (p.5)。確かに少数民族もしくは特別な儀式を経た者のみが入ることを許される場所を訪問するという場合、少数民族観光と環境観光とが関連するが、いわゆる「秘境」と呼ばれるところの場合、少数民族が関連しない場合もある。しかし人が世界中いたる所へでも出かけられるようになった今日において、実際には未踏の地はほぼ残されておらず少数民族によって守られてきた場所がほとんどであるという事実を考慮すれば彼女の指摘はかなりのケースで言い得ている。

- ① 観光対象が存在している
- ② 知人間や各種情報発信・受信により観光地として広まる
- ③ 個々の観光地単位ではなく観光都市として認識されるには複数・複合的・重層的な観光魅力を有し、それらがセットとなって統合され、人々にイメージされる。

観光対象とはその場に特別・特殊なもので、他に例を見ないようなものである。エディンバラでは産業革命時に消え去ってしまったことの多い旧市街の光景とその後の新市街の共存である。こうした観光対象が各種メディアを通して観光魅力として広まっていくのだが、寺院や市街地単体では観光地でしかなく、それが観光都市となるには複数の観光対象が例えば「歴史」や「(街特有の)文化」というキーワードによって統合され、さらに人々にイメージされる必要がある。エディンバラの例に再び戻るならば、旧市街だけでは古い町並みというだけであるが、それと対照的な新市街とセットになることで稀有な観光体験への結実が可能となる。エスニック・タウンでは独特な文化的体験ができる複数の施設がまとまって街区を形成している。また、現代における観光を考える上では前近代に比し情報量と拡散の速度は格段に増しているため、広報活動を含む各種メディアが大きな役割を果たしていることも忘れてはならない。

1.3 「国際観光都市」—観光化した国際都市

ここまで本節では「国際都市」および「観光都市」に関する各々の既存の研究を俯瞰してきた。浮かび上げようと試みた国際観光都市の像は、「観光都市」の国際化ではなく「国際都市」の観光化の帰結としてのそれである。この相違は、国際都市としての様相を所与のものとするか否かにある。観光都市が国際化することによって、その都市は国際都市としての要素を持つことになるが、観光都市の国際化という視点からは国際都市的要素の分析が難しい。ゆえに国際社会の中に位置づけられた都市の観光を分析することで、国際都市としての性質をもった都市の観光という視点を得ることができる。ここでは国際都市の観光化によって成立した国際観光都市を、本章で確認した点を総合し「グローバルな人やモノの、不均衡で不均一な流れを一時的・中長期的に集約してきた地点としての都市が、その結果として備えた異質性や特殊性を観光魅力として特定の具体的イメージにすることで、人々が観光魅力に基づく観光満足が得られると期待する都市」と定義する。国際都市には世界各国から人々が集まるため、都市内部には多国籍性が生ずるが、その多様性は都市によって異なり、都市レベル／都市内部の異質性や特殊性がどのように観光客に受け止められるのか論点がある。

2. 観光とマイノリティ

国際都市にはさまざまな国から人が集まってくるため、住民の民族性も単一であることは少なくなる。そこで国際都市が観光化されることの様相を分析するために本章ではマイノリティと観光の関係について考える。

観光を国際的レベルで考える、すなわち国際観光を論ずる際には国内観光で指摘される観光資源とは異なる次元がある。ターゲットを国内の人々に限るならば、文化的背景や歴史的知識をある程度共有しているため、人々の持っている認識や意識、知識を深められるようなものであったり、レジャーやリフレッシュを目的とするにしても受け入れ側は来訪を想定する人々と共通している基盤を多く持っている。ゆえにサービスや料理の郷土性など自分たちの持っているものの純化や高度化を図り、

取捨選択③選択された情報をもとに「描かれたもののイメージ」を形成④観光への衝動と経済的・時間的コストとを検討⑤イメージ作りが繰り返されることで観光地に対する「思い入れ」を感じ、旅行への意思の高まり⑥観光地への訪問、体感⑦移動前と比して期待以上である場合人々は大きな感動を覚え、観光魅力を感じる（①～⑦の番号は同書に依拠）ということになる。プーアスティンの「疑似イベント論」を論拠としているのだろうが、「本物らしさの確認」ではなく観光客の抱く心象⁵に帰結させている点は重要であり、畢竟移動前に人々が触れた情報と訪問時・帰宅後の印象の比較という方法が提示され、後にみるように観光魅力として計ることができるようになる。

移動に伴うコストを払ってでも選択される観光地には「特別なもの」、換言すれば「特異性」や「特殊性」を源泉とした他に類を見ないような経験・体験への期待があり、そうしたものが都市自体とその都市イメージとして結び付けられていることで観光への衝動となる。観光魅力となる要素には様々なものがあるが、都市と観光が結びつく場合には歴史が挙げられる。現在におけるそれぞれの国の相違は歴史的に説明されるものでもあるが、その国の中に位置づけられている都市は、国家レベルでの歴史の変遷の影響を受けながらも、各都市固有の時代を刻み込んできている⁶。エディンバラと奈良を概観することで、都市と観光とが歴史というキーワードによって結びつくケースに見られる点を指摘する。

エディンバラはスコットランドの主要都市であるが、グラスゴーと比類する。両者とも大聖堂を有し、教会自治都市としての機能を担っていたが、産業革命期の急速な都市化への対応が今日の異なった姿に帰結した。すなわちグラスゴーでは都市機能の整備過程において旧市街が姿を消したのに対しエディンバラでは都市部の拡大という形で対応したがゆえ、今日でも在りし日の街並みを垣間見ることができ、新市街とともに観光対象となっている。歴史性を観光資源としている都市に奈良を挙げることに異論は少なからう。東大寺や法隆寺など歴史的建造物も多く、観光都市としての歴史も長いように思われるが、実際に奈良の観光化が進展したのは1940年頃で、この頃に奈良市観光協会が発行した非売品の観光パンフレットに「二千年来の歴史」や「奈良朝文化の美術」、「古都奈良」という表現が出てきている。これらは昨今の奈良についてイメージされるものとほぼ同一で、その後も繰り返したイメージの定着が図られてきた。

観光業と観光都市とが結びつくには、観光対象が観光地や観光都市となる必要がある。ここまで観光魅力という概念に即して観光業を考えつつ、それが都市と結びつけられる例としてエディンバラや奈良に触れてきたが、おおよそ観光都市としての成立要件には以下のものがあると考えられる。

5 ここでは個人レベルのものを検討するが、観光客自身の印象はサイードの「オリエンタリズム」を根本的な要因とし、実際の体験では観光の文脈での「観光のまなざし」(Urry, 1990)を考えることもできる。

6 構築された「レトロ」をどのように位置づけるかは再検討が必要である。歴史的建造物がそのままの形で公開されている場合と、歴史を感じさせる建築物とを同様に扱うことが可能か否かという問題は、双方とも歴史を観光資源としている点で共通していると考え、本小論では詳細な議論を行わない。歴史資料や建造物がオリジナルなのかコピーなのか、それを観光客がどう捉えるかは観光学やメディア論などで重要な論点となるが、事実と無関係の場に構築される歴史的建造物は存在が難しい。例えば北九州市門司港のレトロ地区は保存状態の問題などから再建されたものである。また同地区については国が進めるウォーターフロントの観光化とを併せて考えなければならず、複雑な要因がある。再建であるためオリジナルそのものではないが、歴史性やその(演出された)雰囲気は観光資源となっているという点で都市の歴史が重要な観光形態であると考えられる。

国境を超えた移動を経た都市が形成されていると見るものである。

この考えに再検討を加えることで現代の国際都市が抱えている諸要素が見えてくる。確かにグローバル化の一要素として欧米化の拡散を挙げることはできる。しかし、完全に均質な都市が国境をまたがなくとも存在しないことは言うまでもない。西洋式のものが情報や物流によって広まってきたのは事実でも、それを解釈するのは各々が経験してきた文化的背景を通してである。ゆえに同一のものを手にしていても、用いられ方や再生産によって表出されたものは多様になる。世界各都市は共通の基盤を持つように思われるのだが、実際には多様であり、その源泉を2つ挙げることができる。1つはどのような人々がその都市に集まって来るのかによって都市のイメージは異なったものになる。インフラのような外見上のものが同じであっても住む人々の人種的な色彩がまったく同一となるような複数の都市は存在しえない。2つ目は普遍性や多国籍化ゆえの無国籍性を持つ都市に様々な出自の人々が住んでいるからこそ、より独自性を住民が求めるというものである。例えばサブ・カルチャーは都市部に多く発生するが、それは単一性が高まることと連帯感の喪失は、よりコアな趣味を持つ人々同士を惹きつけあうためである。結果、その都市が持つと認識される色彩とは異なったものが都市や地域内部に生じてくる。共通に思える基盤の上に形成される地域差は当該地域の独自性、地元性でもある³。こうした独特のものは観光資源となりうるが、観光には担い手と受け手があり、それが観光化されるか否かは両者の見解の肯定／否定で決定される。つまり問題はそのサブ・カルチャーが観光対象に「組み入れられる／排除される」、「なる／ならない」といった4次元から考えることができる⁴。2つの問いに対する最終的な決定は観光客が行うものであるが、後者の選択において「ならない」という見解が示された場合はそもそも当該文化の担い手が観光化を意図していないことも考えられる。しかし前者の選択における否定的見解は観光市場での競争への参入画策が実らないことになる。

1.2 観光と観光魅力、都市

ある都市・地域が観光地として成立するためには、それらが観光の目的地として認識されていなければならない。日常的な外出と「観光」とを峻別するものは、その目的地が観光地であるのか否かという側面もある。本節では都市を観光都市たらしめるものとして観光魅力を考える。

ある場所なり都市が観光地として成立しているのは、そこに観光魅力を人々が感じているためである。観光魅力が形成されるプロセスについて内田（1996）が挙げている7段階（pp. 52-53）を要約すると①写真・映像や文章などを通して観光対象が「描かれるもの」として発行・拡散②人々による

3 グローバル化とローカル化の相克はこの文脈に読み取ることもできる。1つはRinaudo（2005）によるニースのカーニバルの考察である。カーニバルの誕生から知名度の確保までの経緯から、観光の国際化への模索ゆえに始まった祭りがローカル・アイデンティティの拠り所へとなったことを指摘している。こうしたものへの愛着は、現代社会の中で再考察を試みるのが肝要となるが、グローバル化とローカル化という今日の問題に対してテンニースに再び着目することで新たな次元に発展させようと思われる。すなわち、グローバル化というゲゼルシャフトな関係性の構築のありようが、結果生み出された（ゲゼルシャフトな）国際都市においてゲマインシャフトな紐帯が求められているという現代社会の姿が浮かび上がる。

4 例えばアニメと結びついた秋葉原は「アキバ／Akiba」（両者は記号論を参照したメディア論の立場をとる観光学では別のものであり、畢竟各々から想起される魅力は異なるものと考えられる）としてイメージされている。大久保は韓流の街というイメージが固定化され、昨今では多国籍・無国籍化が進んでいるにも関わらず、完全には払しょくされていないと思われる。西船橋のインド化などは進行中で、固定的な都市イメージとして結びつき、広く観光化される可能性もある。このように、観光化の可否は様々な形態をとっている。

かる。2つには企業や金融がグローバル化していく中で資本や労働力が国際的に移動している世界的なシステムによる流動性がある。国家間の取引に伴うコストを捨象すれば、一見国内での経済活動との類似点もあり、相違点はその規模だけであると考えられもするが、例えば労働力移動は余剰分が不足している箇所に再配置されるという単純なものではない。国内での移動であれば、出身地／目的地は双方とも一国内にあり、帰郷や再出稼ぎの繰り返しも比較的容易ではあるが、国際的な移動となると難しくなる。また、労働者自身の負担するコスト—それは移動そのもののコストもあるが、出生地を遠く離れることやそれまで築いてきた社会資本をある程度は捨てるということ、異文化地域内で新たな生活基盤を構築することなども含まれる—も加味しなければならず、国際的な視野による分析が必要となる。なぜならば、各都市にはそれぞれの出身国特有の世界観や価値観を保持した人々が一つの空間を共有することによる文化などの多様性が少なからず存在しているためである。

このようなグローバルな流動性の中に「国際都市」は置かれているのだが、その都市に関わりうる国家の政策、すなわち流入・転出に関する政策や都市デザインの意思決定が各都市を特徴づけている。ある国に見られる人的な流入の様相は地理的的近接性だけでは説明できない。国境管理は国家による重要政策の1つであるが、移民の流入と国家の政策との関係は、アメリカの1924年移民法に見られた出身国別割当制度を端的な例として、ある国での移民数や出身国は国家の政策と無関係ではない。また、特にヨーロッパでは1960年代、アフリカ諸国の独立とともに、旧植民地から宗主国へという流れもあり、国家間の関係も大きな要因となっている。都市デザインとは、その都市に集まってきている人々のニーズやライフスタイルに合わせて変更が加えられていることである。限られた都市の地図に配置するものとしてレストラン／スーパー、スポーツ施設／集合住宅の選択を理念的な例として挙げてみると、高所得ホワイトカラー労働者／未熟練ブルーカラー労働者の街の特色があることも考えられる。

ここまで見てきたように「国際都市」は3つの次元、すなわち世界規模での流動性、国家および都市の意思決定を経ることになり、資本や労働力の過不足の調整といった国際経済学的要因のみでは説明できないような流れが存在し、結果としてデザインされた各都市はそれぞれに特徴を持ったものとなり、独特な空間となる。

1.1.2 都市研究から見た国際都市—都市の形成過程としての国際都市

歴史的にみて都市は少なくとも古代世界においてすでに形成されていたことは間違いない。しかし現代社会における都市という点で鑑みると、すなわち現代的なパースペクティブで都市について考える際には、産業革命以降の特徴と見るべきである。前近代の都市は宗教や民族、職業などある一定の範疇に属する人々が集住していたため、統一的な空間であった。しかし産業革命は農村から工業都市への人の流れを生み出し、近代社会へ適合させるべく様々な社会的装置を用意してきた。こうした労働力の過不足の調整は近隣都市間で行われていたが、移動技術の改良により数の上だけでなく距離でも大規模化し、国際色をもった都市を創出させた。また帝国主義帝国の展開は西洋スタイルの拡散を引き起こし、フォーディズム型資本主義とグローバル化によって世界的な標準化が進展し、地理的には離れているが一定の共通性をもった都市が世界中で見られるようになった。近代的で、ある程度均質的な都市は、衛生面や利便性などが欧米的水準で確保されており慣れ親しんだ生活様式が移動先でも期待できるため、より多くの国からの人々を集める。近代化の中で起こった交通や通信手段などのインフラ整備や生産・消費、文化などのシステムの構築による共通化した都市化のプロセスによって、

な入込客数の増加だけでなく、国内観光市場の場合と比して1人あたりの滞在期間の長期化とそれに伴う周辺諸観光地との相乗効果も得られる可能性がある。国内観光の場合、最短日帰りのような観光スタイルもあるが、国際観光では数日の滞在が見込まれ、結果として宿泊施設や土産物、飲食店などにも経済的メリットが期待できる。しかし、こうした「国際観光都市」とは「国際観光の都市」の意味であって、「観光の都市」が国際的に評価されるために、どのような施策をするかということが着目されることになる。換言すれば、観光地が既存であるか新規創設であるかに関わらず、その魅力を海外に発信し、外国からの観光客にどのような満足を提供していくかが問題となる。そのために行われることは観光対象を国際観光市場に照準を合わせて再解釈していくことや英語をはじめとした外国語での対応、文化的・宗教的背景の異なる人々に対する配慮などがある。だが、都市へ到来する人々の国際化が進展することでその都市の国際化、特に人的・民族的な多様化が促進される。エスニックな色彩を帯びた街を、その特徴によって観光化することも可能となる²が、都市の多国籍化やホスト国とは違う文化によって特徴づけられることは国際的な流動性の中から生ずるものであるため、この点は「観光都市」というよりは「国際都市」として検討されるべきものである。観光地とその特色や文化、これらと観光との関係性を考察することで「国際観光都市」の性質に対する示唆を得ることができる。すなわち、本章では「国際都市」および「観光」について検証することで、それぞれの機能を担ってきている「国際観光都市」の特徴を考える。

1.1 国際都市

ある都市が国際的なものであると認識されると、その都市は「国際都市」であると考えて問題ないと思われるが、「都市」が「国際的である」とはどのようなことか。ここでは国際社会学から見た「都市」と都市研究におけるグローバル研究を参照し、その包摂点に「国際都市」を考える。しかし、言うまでもなく双方ともに様々な研究業績があるため、本小論では俯瞰するのみにし、それぞれの分野における詳細な検証は別の稿に譲る。

1.1.1 国際社会学からみた国際都市—世界的レベルにおける都市

国際社会学では世界規模のフローから都市形成に着目することで国際都市を描写する。ここでは国家内部に位置づけられているものとしての都市からは見ることはできない、すなわち地理的な場としては国家内部にあるがその活動は越境しているような活動などを考えることが求められる。1つはFriedmann (1986) の「世界都市仮説」やSassen (1991) の「グローバル・シティ」などに代表される、資本のグローバルな流れの結節点となる都市に関する研究である。前者は新国際分業の立場をとり、グローバルな展開をする企業の活動を分析する中で生産過程地の世界規模での分散から世界都市のヒエラルキーを明らかにした。後者は世界都市におけるサービス業の高次/低次の分化の仕方に着目し、底辺サービス業における高い移民比率を指摘している。これらの視点からは、企業などによる経済活動がグローバルな規模での展開を通して、世界中に点在する都市の中でも生産・販売の効率性から世界都市として挙げられるような、限られた都市に結果としてフローが集中している様態がわ

2 チャイナ・タウンはおおよそどの国でも大都市圏では見受けられるものである。それらの形成過程を紐解くことは本論文の域をはるかに超えているが、それぞれのチャイナ・タウンが持っている文化的な色彩も多くの人々を惹きつけている一因であることは疑いの余地がない。だが、「チャイナ・タウン」と認識されてはいたとしても実際には中国的な街というよりもエスニック・タウンであるケースは多い。

ると、観光政策の中でも進められることは確かであろう。②都市レベルにおける観光イメージの固定性は知名度の高さゆえ、安定的な観光客数を確保するためには観光地として更新されることが必須にも関わらず、刷新することは困難であり、実態との相違点が多くなった場合の対応も難しい点は考慮に入れなければならない。③移民と観光の関係性を見るために、観光イメージと観光満足を包摂点としたが、双方の間を埋めるものとして認知や心象といった心理学的アプローチが必要であろう。

複数の状況を分析する1つの方法としてはそれぞれについて緻密に考えていくというものであるが、ここではあえて全体像を見ることを選んだ。今後進められていこう国際観光都市化の問題は「国際都市」や「観光」が密接かつ複雑に絡んだ「移民」についてのものとなると思われるからである。フランス南東部のニースを舞台とした理由はこれらの要素をすでに持っているためである。観光都市であるニースは国際的にも有名で、各国から多くの観光客が来ている。住民の移民比率も高い。ここでも割愛した部分が多分にあるが、特に③との関連性が高いと考えられるのは移民比率の高さと低学歴化という実態や観光自体の問題である。ニースは避寒地として注目されたことが観光化のきっかけとなったが、現在は夏の観光地である。2月にカーニバルがあるが、観光収入はそれでも夏に大きな比重があり、季節労働を強いられる人々が多いこともある。こうした都市問題が観光や印象と無関係とは言い切れない。

様々な不足はあるが、国際的な観光都市ニースを題材にすることでグローバル化する現代社会の一つの様相として、現在進められている各地の国際観光都市化の帰結を考える。また、都市やその空間、特質などの環境を一般化・独立変数化し、その中に移民を位置づけることで、彼らの実態を考察する特殊研究であるようなニースにおける移民を他の都市研究や移民研究へ応用する可能性や手法も示すことにもなると期待する。つまり、国際学における観光都市、観光学での国際都市を論じつつ、移民研究においてはニースという都市に対してではなく国際観光都市という文脈の中に移民を位置づける試みとなる。これらの要素の総体としてグローバル化や現代社会について議論を深めることで、今後の教科教育や総合学習にも活かされることを望む。

1. 国際観光都市

「国際観光都市」という言葉自体はしばしば耳にされ、自治体レベルでも国際観光都市化を図るべく政策が執られている¹。日本における法的な枠組みで見ると「国際観光文化都市」や「国際会議観光都市」といったものがある。前者は「国際観光文化都市の整備のための財政上の措置等に関する法律」により温泉など地域文化に基づく観光の国際化を推進するものであり、後者は「国際会議等の誘致の促進及び開催の円滑化等による国際観光の振興に関する法律」により認定された都市で、会議場が整備されること、政府登録国際観光旅館などの宿泊施設が整備されること、国際会議等の誘致と開催支援の体制が整っていること、当該市町村またはその近くに外国人に適した観光資源があることがその要件となっている。これらで語られる「国際観光都市」とは、各地域の持つ観光対象や施設を他国にもアピールすることが目的として考えられ、畢竟都市や地域を国際観光市場の中に位置づけることを画策するものである。国内市場のみならず国際的な市場で観光客を獲得していくことは、単純

1 例えば金沢や飛騨高山などが挙げられる。詳しくは金沢まちづくり市民研究機構5Dグループ(2008)や堀(2013)を参照。

国際観光都市における観光イメージと移民 — ニースを事例に

青木輝憲

0. はじめに

昨今の教育現場ではグローバル教育の重要性が高まっている。今日の状況を表す言葉として「グローバル化した現代社会」があるが、この表現自体、グローバルという部分と親和性の高い英語と、現代社会について考える社会科といったように、考えるには複合的な視野が求められる。

本小論ではグローバルで現代社会的な論点として「国際観光都市」を考える。地球資源の有限性が広く認識される中、開発に持続可能性が求められるようになったが、観光は環境への負荷が少ないため、その選択肢の一つとして重要性を高めている。さらに国内だけに限ることなく世界中から観光客を集めることができれば、市場規模の大きさゆえ多くの収益が見込める。しかし観光は現代に限られたものではないという批判はありうる。実際、英語の travel か tour かの相違を無化するならば古代から観光は行われ、巡礼のように、居住地を離れて一時的・中長期的にどこかへ目的を持って移動してはいた。だが、現代の観光は旅客機の発達もあり、移動可能距離は飛躍的に伸び、結果として国境をまたいだ目的地へと多くの人々が向かうことになった。人数や距離などが大規模であるのは現代観光の特徴である。現代社会の一要素として観光を挙げたが、国境を越えることが多いため、それはグローバルなものでもあるということになる。観光客が集まるのは移動手段の結節点であったり、機能の充実した都市部であったりするため、現代の観光を考えるには都市や都市形成も無関係ではなさそうである。

これらのことから、国際観光都市を論ずることはグローバル化した現代社会について考察することになりそうだが、国際観光都市とはどのようなものか。国際観光都市という言葉は2通りの解釈、すなわち「国際化した観光都市」か「観光化した国際都市」かが成り立ちうる。「観光都市」では対応やサービスの多様化が求められるのに対し「国際都市」では人々や文化の多様性が増す。今日謳われている国際観光都市とは前者の立場にあるのではなかろうか。

しかし実際には国際観光都市は後者の立場にあり、そこからでないと思えない問題がある。この考えに立脚し、まずは国際学や国際社会学、都市研究を参照しながら国際都市の性質について考察する。そこから観光へのアプローチを試みることで、インフラやサービスが多様化する中でさらに世界中から人々が集まりやすくなり、都市内部の多様性が増大するという都市としての様相を指摘し、こうした都市の観光化を考える。次に観光化の意味を、独自性や差異を源泉とする観光魅力がイメージとして定着していく過程から考察する。この中で都市が国際化することにより生ずる民族的色彩の多様化を観光の文脈へ組み込むこと、およびその課題を指摘する。そして具体的な問題としてニースの状況を見る。住民の人種的構成を参照しつつ、ニース観光のイメージを対比させ、「国際都市における移民が観光に影響を与えているのか。与えている場合にはどのようなものか」について論ずる。

紙幅の関係で十分に考察できていない点が観光都市について2つ、方法論について1つはある。

①インフラやサービスの多様化は都市形成過程の中で生ずるとしたが、国際観光という文脈を考慮す

to the indefinite persons (No. 4 and No. 6⁵). As for the pronoun *T*, the addresses to the general readers account only for 5.6%, and the exceptional uses which seem to be adverse to the context account for 16.9%, though they can be regarded as the effective literary device as we see in the preceding chapters. Indeed we should keep in mind that it is not completely fair comparison, because the total number of the pronoun *Y* is too small to produce any really exceptional or interesting uses. However, we can safely say at least that the detail shown in Figure 4 represents the stability of *Y* as a pronoun of respect and as a general pronoun, while the pronoun *T* is not so stable in its grammatical function and sometimes used with confusion and ambiguity, which results in giving us some literary effect as we have seen through this papers.

Conclusion

In *Emaré*, two forms of second person pronoun *T* and *Y* have a distinction of number, and other distinctions which are not merely grammatical. They show the hierarchal differences between those who address them, or other asymmetrical relationships like mother and son, ruler and follower. Indeed, some choices seem more likely to depend on demand of rhyme or conventional pattern than on contextual one; though the use of pronoun *Y* as a honorific pronoun seems rather stable. There are some confusing uses between the pronouns *T* and *Y*. However, through the close examination of each case, we can find even those apparently inexplicable uses of two pronouns are effectively working as a literary device to express the disorder and confusion in the characters' minds. Especially, *Emaré*'s uses of two pronouns seem to represent the theme underlying this story: the autonomy and power of the heroine in her facing with the disastrous situation. In this way, from the point of the pronominal uses, we can reread this conventional-looking romance verse as one of creative, interesting literature in Middle English.

Works Consulted

- Brown, Roger. and Gilman, Albert. "The Pronouns of Power and Solidarity". *Sociolinguistics : The Essential Readings*. ed. Christina Bratt Paulston and G. Richard Tucker. Oxford: Blackwell, 2003. pp.156-176.
- Shimonomoto, Keiko. *The Use of Ye and Thou in the Canterbury Tales and Collected Articles*. Gifu: Shimonomoto Kazuo, 2001. pp.1-62.
- Tajiri, Masaji. *Studies in the Middle English Didactic Tail-rhyme Romances*. Tokyo: Eihōsha, 2002.
- 家入葉子著.『ベーシック英語史』東京：ひつじ書房, 2007.
- ジョン・ガワー著.『恋する男の告解』伊藤正義訳. 東京：篠崎書林, 1980. pp. 140-199.
- 中世英国ロマンス研究会訳.『中世英国ロマンス集. 第二巻. エマレ』東京：篠崎書林, 1983. pp.153-87.

5 I judge the No.6 as the indefinite pronoun *Y* meaning all the indefinite subjects; it is used by King's wretched mother imperatively to forbid harboring *Emaré*, in the letter disguised as written by King himself.

The normative pattern in the address to general readers

We have examined so far mainly the contextual, stylistic choice of pronouns according to the hierarchy. In the pronominal choice in the address to general readers, however, we can find no special meaning other than that of number, singular and plural. Calculation based on Figure 1 shows that the address to the general readers accounts for 5.6% of the total use of pronoun *T*, and 10% of pronoun *Y*. The frequency of pronoun *Y* can be reasonably explained by its invariable function as a grammatical marker of second person plural number, which works as a general pronoun. There seems to be certain normative pattern automatically chosen at the demands of rhyme or metre.

Pronoun *T*

For sothe, as y may telle the. (l.46)

As thykke ar they aette, / For soothe, as y say the. (ll.95-96)

Thykke of stones ar they sette, / For soothe, as y say the. (ll.143-144)

Pronoun *Y*

Of mykyl myrghyt y may you telle, (l.20)

I say yow for certeyne. (l.381)

Both pronouns co-occur with the verbal terms as “telle”, “say” and adverbial phrases “for soothe”, or “for certeyne”. They are work as discourse markers, which are supposed to be inserted at intervals⁴ as a means of modulation of rhyme. The close resemblance between line 96 and 144 is supposed to be caused by an analogy between the line 95 and 143. In this way, the two pronouns in the address to general readers are chosen automatically as a part of some conventional phrases or as a device for rhyme, which occur irrelevantly with the story.

Grammatical function in the use of pronoun *Y*

Figure 4. Detail of address : pronoun *Y*

1	Follower to Ruler	10(50%)
2	Daughter to Father	3(15%)
3	Wife(Queen) to Husband(King)	2(10%)
4	Narrator to General Reader	2
5	Burgess to Queen	1(5%)
6	Follower to Queen	1
7	Ruler to Subjects	1

Unlike the pronoun *T* in Figure 3, there seems to be no remarkable use which adverse to the hierarchal or stylistic demands of the context. Pronoun *Y* used irrelevantly to the hierarchal demand accounts for 15% of the total occurrence, all of which can be explained as an address

4 Address to general readers occurs in line 20, 46, 96, 144, 381, 966. Whether this frequency can be explained by any mathematical rule is not sure in my research.

There seems to be certain co-occurrence pattern in these examples: the reverential title “syr” with “swete” followed by the mixed use of reverential *Y* and familiar *T*. We may be allowed to think that this combination should be a carefully chosen one, because it works as an effective device not only to express the mixed feeling of respect and affection to one’s spouse, but to alleviate the instructive tone which might be sound too ‘unnatural’ in the patriarchal hierarchy. This pronominal switching can be classified into the rhetorical type, which seems carefully and intentionally used by Emaré as a witty wife. In this way, the switching of *T* and *Y* in Emaré can be regarded as a device to produce some dramatic effects.

Co-occurrence pattern of pronoun and title

In lines 1012-13 treated in the preceding chapter, the pronoun of respect “ye” is used with the title “Syr”, which is the masculine title to mean a man superior in rank and frequently used as a form of polite address (Shimonomoto 47-48). Therefore it seems to be a very natural pattern especially in the pleading style. However, “Syr” does not always occur with “ye” in any pleading scene in *Emaré*. In the lines 896-97, for example, the Emperor (Emaré’s father) uses *T* to burges in the pleading to concede the little child (Segramour).

The kynge called the burgeys hym tyll,
And sayde, “Syr yf hyt be thy wyll,
Yyf me thys lytyll body!” (ll. 896-98)

In this sentence, the polite style in making request and the higher state of King to burges are thought to be the cause of the co-occurrence of “Syr” and pronoun *T*. This pattern of address is repeated in another address just after twenty lines.

“Syr, yf your wyll be,
Take me your honde and go with me,
For y am of yowr kynne! .” (ll. 919-21)

Although these two addresses are similar in their pleading style using “Syr” followed “yf” subjunctive, they have different pronoun according to each context.

As well as “Syr”, “Lord” is the title mainly used to a feudal superior and appears with pronoun *Y* (Shimonomoto 48). However, the co-occurring pronoun is *T* in both the addresses by Segramour and Sir Kadore treated in the preceding chapter. However, sometimes “Lord” is used with pronoun *Y* correctly in *Emaré*. As far as my research proves, the choice of pronoun is depending mainly on the contextual demand.

Though the examples are limited, we may be allowed to think that the normative pattern of co-occurrence between the pronoun and the title is by no means fixed, but they are used rather properly to meet each contextual and stylistic demand.

That was thy thowghthur dere.” (ll. 1004-08)

“Syr, and ye wyll go with me,
I shall the brynge with that lady fre,”(ll. 1012-13)

There are some notable points in Segramour’s addresses. We can find the mixed use of *T* and *Y* in the same context twice, in lines 1004-08 and in lines 1012-13. In both of these scenes, Segramour asks the Emperor (his grandfather) for coming with him and meeting Emaré. There seem to be no affectionate, rhetorical, or stylistic reason for these switchings.

Segramour uses sometimes *Y* correctly, and at other times mixes *T* and *Y* inexplicably. In lines 919-24 below, he address to the same King using the same style of pleading as he does in lines 1004-13, where the respect pronoun *Y* coherently appears.

“Syr, yf your wyll be,
Take me your honde and go with me,
For y am of yowr kynne!
Ye shull come speke wyth Emaré
That chaunged her name to Egare
That berys the white chynne.”(ll. 919-24)

Indeed, these irregularities show that the switching of two pronouns in *Emaré* cannot always classified into certain types, nor easily explained by the correlation with its context and stylistic demand. However, it seems worth attention to the fact that Segramour is described as a “little child”, who may be unable to choose the correct pronoun as adults do. If this incoherency in Segramour’s use of pronoun can be interpreted as coming from his immaturity, it should be another literary device in *Emaré*.

Wife(Queen) to Husband (King) (Figure 3. No.5)

Another example of switching is shown in lines 965-66 and 971-72, both of which are addressed by Emaré to King of Galicia.

And, swete syr, yn all thing,
Aqweynte you wyth that lording,
Hyt ys worshyp to the.” (ll. 964-66)

“Now, swete syr, whatever betide,
Ayayn that grete lord ye ryde,
And all thy knyghtys wyth the.”(ll. 970-72)

might be associated with a sense of solidarity, intimacy, cajolery, or condescension (Shimonomoto 29). Rhetorical switch arises from a deliberate manipulation of the speaker to produce a certain effect on the addressee. Style switching is more automatic change of pronoun depending on the style of address as didactic one, sermon, or invocation etc (Shimonomoto 39). To what extent and how, these switching system can explain the confusing use of pronoun in *Emaré*? Let us see closely each case at the next chapter.

Pronoun switching in Emaré

No. 3 and 5 in Figure 3 are interesting examples in their incoherent choices of two pronouns in the same context, as well as their reverse to the normal assumptions of social hierarchy and of its context.

Follower to Ruler (Figure 3, No.5)

1. Sir Kadore to King of Galicia

“Lorde, why sayst thou so?
Art not thou a trewe kyng?
Lo her, the lettur ye sente may se,
Yowr owene self the sothe may se;
I have don your byddyng.”(ll.764-68)

Just before this scene, Sir Kadore unjustly reproached by King of Galicia under the suspicion of the exile of Emaré. He feels unexpected angry and disappointment toward his respectable master, and shows his feelings in the lines above. The use of pronoun *T* in lines 764-65 ignoring the power semantic has a great effect to express the confusion in his mind and add the intensity to his utterance. In the next sentence, however, he appropriately use pronoun *Y*. The restoration of reverential pronoun *Y* shows the restoration of the soberness in his mind and proper relationship between follower and ruler. It can be said that in this context the switching from *T* to *Y* can be classified into the affective type, closely associated with the emotional and attitudinal change of the addresser.

Next, let us see another switching use of *T* and *Y* addressed by Segramour.

2. Segramoure to Emperor (Syr Artyus)

“Lord, for thyn honour,
My worde that thou wyll here.
Ye shull come speke with Emaré
That changede her name to Egare,

the figure of the resourceful and strong-willed woman, as which these recent critics seem to have recognized.

One of the most interesting uses of pronoun *T* in *Emaré* appears in lines 667-68, in which Emaré, who is wrongly accused and forced to drift in the sea with her little child, is addressing the sea.

Wele owth y to waryr the, see,
I have myche shame yn the!"(ll.667-68)

The drifting in the seas, one of the common themes in the Constance legends, can be regarded as a signification of all the hardships destined to fall on heroine. Emaré personifies the sea, to which she expresses her unendurable emotions. Her address sound so assertive that we can recognize her as someone more than a 'calumniated wife'—she refuses to reconcile to the passive obedience to her destiny. Clearly the use of pronoun *T* is adding the intensity of her address, and produces the literary effect to show the hidden strength of her mind.

Her challenging spirit is shown at the very time she faces with hardships. When steward tells her that he was ordered to set her adrift by her husband King, she admonishes him not to mourn, with the pronoun *T*.

"Be style, syr," sayde the qwene,
"Lette syche mornynge bene;
For me hace thou no kare.
Loke thou be not shente,
But do my lordes commaundement,
God forbede thou spare. (ll. 625-30)

After chiding her servant kindly in this way, as Tajiri points out (83), she utters even threatening words to her husband. It should not be interpreted as mere sour grapes, because it seems to be recalling her self-esteem as Emperor's daughter. In other words, the use of pronoun *T* in these utterances is working as a literary device to show her fortitude and recall us her true identity as a royalty.

Three types of pronoun switching

According to Burnley(21-22³), there are three types of switching between *T* and *Y*: affective, rhetorical, stylistic. Affective type of switching can express the confusion of character's mind—the sway or sudden burst of their emotions. Generally speaking, shifting from *T* to *Y* often connotes a detachment, formality, objectivity, rejection, or repudiation. The contrary switch from *Y* to *T*

3 Burnley, J.D. *A Guide to Chaucer's Language*. London: Macmillan. 1983. quoted by Shimonomoto 29.

can say that the pronominal choice in *Emaré* depends on the context, the kind of characters and story to a certain extent.

Demands of hierarchy and style

As we saw in Figure 3, the use of pronoun *T* is most frequently seen in the address by mother to her son, especially when she is exercising her authority to him.

Mother		Son	
Emaré	→	Segramour	12
Queen Mother	→	King of Galicia	3
Total			15

In the first example below, the evil Queen Mother is imperatively forbidding her son, King of Galicia, from marrying Emaré.

As thou lovest my blessynge,
 Make thou nevur thys weddyng,
 Cryst hyt the forbade!" (ll.449-51)

The most frequent use of pronoun *T* is observed in Emaré's address to her son Segramour, where she exercises her skillfulness and maternal power to regain her (their) original status.

When the Emperour kysseth thy fadur so fre,
 Loke yyf he wyll kysse the,
 Abowe the to hym sone; (ll.979-81)

The coherent uses of pronoun *T* in these examples meet with the imperative and instructive discourse styles as well as hierarchal relation between mother and her son. They are working as a device to show the authority and superiority of mothers.

Pronoun *T* as a literary device

The discussion about *Emaré* and its heroine has been more popular recently, in which not a few critics notice that *Emaré* is certainly something more than a 'calumniated wife' in romance convention (Tajiri 84-85). Laskaya and Salisbury point out the off-stage directions by Emaré are notable in its demonstration of her hidden strength: 'she is not completely helpless in the face of adversity.' (148-49²). Let us find whether the use of pronoun in Emaré's addresses contributes to

2 Laskaya, Anne and Eve Salisbury, eds. *The Middle English Breton Lays*. (TEAMS Middle English Texts Ser.) Kalamazoo, Michigan: Western Michigan U, 1995. quoted by Tajiri 84-85.

In *Emaré*, the total occurrence of *Y* is less often than half of *T*'s. This is noteworthy considering that the norm of the second-person pronoun is *Y* in romance-type tales, in which typical main characters are courtly figures (Shimonomoto 15, 29). However, this norm does not seem to be applicable to *Emaré*. Firstly, *Emaré* belongs to the Constance saga where the noble characters (heroines) are destined to be falsely accused and slandered (Tajiri 103-4), so the atmosphere in the story is wild and disastrous rather than "courtly". As other relevant stories in *Confessio Amantis* or *Man of Law's Tail show*, nobilities like the King and Queen are not always described as respectful characters: they are moralistically guilty in having the desire for incest or murder. Secondly, *Emaré* is a romance written in verse style with tail-rhyme stanza composed of twelve lines, where the choice of vocabulary is more restricted by its conventional form like the repetition of phrases and terms, jog-trot metre, twice-told plot (Tajiri 24) than those written in prose style. Therefore, it is naturally expected that the choice of pronoun in *Emaré* is sometimes anomalous and not always linked with the style or the context.

However, neither the rhyme nor the number of people seems to be the decisive factors at all in the choice of pronoun in *Emaré*. Let us see the distribution and detail of the use of *T* in the next chapter.

Close Analysis

Address with pronoun *T*

Figure 3. Detail of the address : pronoun *T*

No	From and To Whom	Figure
1	Mother to Son	15 (28.3%)
2	Ruler to Follower	9 (16.9%)
3	Follower to Ruler	6 (11.3%)
4	Narrator to God /Jesus/ Maria	6
5	Wife (Queen) to Husband (King)	3 (5.6%)
6	Queen to Follower	3
7	Narrator to General Reader	3
8	Father (Ruler) to Daughter (Princess)	2 (3.7%)
9	Ruler to Burgess	2
10	Human being to Nature	2
11	Ruler to another Ruler	1 (1.8%)
12	Husband (Burgess) to Wife	1

As the percentage shows, more than one third of *T*'s uses are found in the address from mother to her son: From *Emaré* to Segramour, and from his Queen Mother to King of Galicia. Second most frequent is pronoun *T* by Ruler to his followers including both King of Galicia to Sir Kadore and Emperor to Segramour. Since all of these top four users of *T* are nobilities, it is only natural that the main characters use pronoun *T* when they address other characters of lower class. The genre of romance, where people in status show or exercise their power, explains the frequent choice of *T* in *Emaré*, though it is against the typical usage of pronouns in romance-tale. Here we

Thou and Ye in *Emaré*

Ruiko Kawabe

Introduction

It is a well-known fact that second-person plural pronouns in many European languages are often used as a pronoun denoting respect or politeness (Brown & Gilman 158-159). Under the influence of French, English also introduced this system in the thirteenth-century, and began to use its second-person plural pronoun Ye/You(pronoun *Y*) when addressing a respectable person, which caused Thou/The(pronoun *T*), a second-person singular pronoun, to work as the pronoun of modest or familiarity (Shimonomoto 3). Although the gradual decline of pronoun *T* toward Modern English made this system itself almost ineffective, Middle English literature retains many interesting uses of these pronouns to be examined.

In *Emaré*, one of the Middle English romances written in the verse style called Breton lays, these pronouns sometimes confusingly and coherently appear. This research discusses how the pronoun *T* and *Y* are used in the correlation with its context and the literary effect do these pronouns have on Middle English.

Examination¹

Figure1. The occurrence of *T*

	To sg.	To pl.	To general	Total
n. Thou (Thow)	21	0	0	21
o. The	12	0	3	15
g. Thy/ Thyn	14/2	0	0	16
r. The	1	0	0	1
Total	50	0	3	53

n: nominal o:objective g: genitive r: reflective

Figure2. The occurrence of *Y*

	To sg.	To pl.	To general	Total
n. Ye	8	0	0	8
o. You(Yow)	2	0	2	3
g. Your(Yowr)	7	0	0	7
r. You	1	0	0	1
Total	18	0	2	20

n: nominal o:objective g: genitive r: reflective

1 This examination is based on the *Emaré* Concordance offered in the class by prof. Nishimura and held in the Faculty of Department of English in Kyoto University. Citations are from the downloaded text *Emaré*. Teams Middle English Texts.
<<http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/tmsmenu.htm#menu>>

- 大久保康雄 「あとがき」 M. Mitchell, (1977) [大久保康雄・竹内道之助 (訳) 『風と共に去りぬ 5』]
- Sagan, F. (1954) *Bonjour Tristesse*. [(1955) 悲しみよこんにちは (訳) 朝吹登水子 新潮文庫]
- 酒井邦秀・神田みなみ (2005) 『教室で読む英語100万語—英語多読授業のすすめ』 東京:大修館書店
- Stowe, H. B (1852). *Uncle Tom's Cabin*. Reprinted in 1999. Hertfordshire, UK.: Wordsworth Edition.
- 豊田昌倫 (2010) 「リーディングの問題点と新たな視点」 木村博是、木村友保、氏木道人 (編) 『リーディングとライティングの理論と実践: 英語教育学大系 10』 大修館書店
- Wei, H. (1999) *Shanghai Baby* (2001) Translated by B. Humes. Hong Kong: Constable & Robinson.

1999). Besides, readers, in first language and second language alike, will not appreciate literature they do not understand.

Each of the original and abridged texts has its advantage. The best approach would be to read both, probably first an abridged, then moving on to the original if the former seems as good as Terasawa's

Conclusion

The glorious days in the South are gone with the wind but what legacy has this masterpiece left? It is a book rich in humanity. It has kept readers intrigued worldwide for over four generations. It puts readers deep in thought as they discover caring under the mask of cruelty, weakness under bravery, and strength under tenderness.

The book has value as a war book as well. Few books are as eloquent as *Gone with the Wind* in showing mistrust, fear and pain resulting from war. The book has opened a huge controversy concerning its historical view, which gives us a chance to be more critical.

Terasawa deserves equal credit as Mitchell. Thanks to its comprehensibility and beautiful language, her abridged book can prompt English learners like me to go on to tackle the huge volume of classical literature.

All citations in this paper come from:

Mitchell, M. (1936) *Gone with the Wind* Reprinted in (2008). New York: Pocket Books.

Mitchell, M. (2010). *Gone with the Wind*. Adapted by Terasawa, M. Tokyo: IBC Publishing.

References.

Alcott, L. M. (1868) *Little Women*: Reprinted in 2005 Tokyo: IBC Publishing

Celce-Murcia, M., & Larsen-Freeman, D. (1998) *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course* 2nd Ed. Boston: Heinle ELT.

Conroy, P. (2008). Preface. In M. Mitchell, *Gone with the Wind*. New York: Pocket Books (pp.v- p. xvii).

Grabe W. (2008). *Reading in a second Language: Moving from Theory to Practice*. Oxford University Press.

Harada, J. (2014) *Struggles with Extensive Reading*. Presentation made at Saitama JALT. Sep 21@ Harigaya Kominkan.

Hawthorne, N. (1850). *The Scarlett Letter*. Reprinted in 2013 Tokyo: IBC Publishing

和泉伸一 (2009) 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京：大修館書店

小林めぐみ (2010) 「多読の成果と課題」木村博是、木村友保、氏木道人 (編) 『リーディングとライティングの理論と実践：英語教育学大系 10』大修館書店

NHK (2014) *Gone with the Wind Marks 75 yeaes*. News on June 7,

Here Terasawa uses simple vocabulary to vividly illustrate the lifeless state of Gerald. It was not Gerald that Scarlett saw but “a shadow”. It was not Gerald that she heard but “a voice”. The ghostly image of Gerald is well contrasted with Scarlett’s “cry of joy.”

Perhaps the most notable of all is the moment Scarlett accepts a proposal from Rhett Butler. This very dramatic scene requires a lot of subtlety as it is where she makes an instant decision to marry Rhett with Ashley still on her mind.

Terasawa

Scarlett’s thoughts of Ashley faded away as Rhett kissed her. She was helpless in his arms. She felt dizzy and faint. Exciting feelings filled her body. Suddenly she was kissing him back.

“Stop, please,” she whispered. “I’m faint!”

Rhett held her tightly. “I want to make you faint. No one has ever kissed you like that. Not Charles, or Frank or your stupid Ashley. What did they know about you? They never understood you. Now say yes, damn you—”

“Yes,” Scarlett whispered. She said the word without thinking. For a moment she was surprised. But then she felt relief. It was as if someone else had made the decision for her. (P.154)

This is where Terasawa displays her superb skills of conveying a dynamic moment in simple language. The kiss from Rhett had such power that the “thoughts of Ashley faded away”. She was nearly “faint” and almost lost her sense and it was “someone else” that made the decision for her. It is through use of such simple words that Terasawa depicts the most dramatic moment in the story.

III – 5. Abridged VS. Original

Terasawa’s literary talent makes this abridged version as good as the original. It is notable that there are no complex sentences in Terasawa’s text. There are hardly any instances of relative clauses. She punctuates her text very rhythmically and there were few sentences that go over twenty words. Such care makes Terasawa’s version a great page turner and a rich source of comprehensible input for language learners.

Of course, the quality of the abridged is not the same as Mitchell’s original. There is especially a considerable difference in portrait of delicate and complex emotions.木村(2010) is right in saying nothing can beat the authenticity of the original text. However, an abridged book has its role, especially in second language pedagogy. There is hardly any acquisition of a second language without comprehensible input. It is through comprehension that learners can connect the three elements of language: form, meaning, and function (和泉,2009; Celce-Murcia & Larsen-Freeman,

hand, does not refer to this sewing box and fails to show the strong anger burning in Scarlett's heart.

Another point where Terasawa oversimplifies the plot is the scene where Rhett narrowly saved Ashley from getting caught by Yankees raiding the Ku Klux Klan's secret meeting. In the original, it was Rhett's quick wits that tricked the Yankee troops. Rhett dragged Ashley's wounded body into a sleazy night club, and pretended that Ashley got drunk and was involved in a fight. Then the hostess at the bar, Belle Watling, too, made a witty testimony to confuse the Yankees investigators. It was in fact the most humorous part of the story as the fight at the bar was the last thing the conscientious Ashley was involved in and the sleazy woman was the last person that could help Ashley.

Terasawa, however, does not refer to the night club and Belle Watling. She just simply explains as follows.

Rhett Butler quickly rode to the Klan's meeting place. He was able to warn Ashley and other Klan members. "The Yankee will be here very soon," Rhett told them. "If you don't want to be killed, you must get away from here immediately."

The men did not like Rhett. They considered him a Scallywag and a friend of the Yankees. However they knew he was speaking the truth. They listened to his warning. (P.150)

Here, the readers can be puzzled as to how the suspicious Klan members came to believe the warning from Rhett, the Scallywag. Moreover, what is really missing in this simplified description is the excitement of the narrow escape and the humorous character of Belle Watling and her smart wits.

III – 4. How the Abridged Dramatize Events

As discussed above, Terasawa's portraits detract from Mitchell's subtlety in the original. Nevertheless there are many parts where she successfully dramatizes events in simple language. For example, she vividly describes the eerie feeling Scarlett had when she was reunited to Gerald, her father at the devastated Tara. .

Terasawa

Then (Scarlett) saw a shadow on the front porch. Someone was home! She almost cried with joy. But then she stopped. The person did not move or call to her. Something must be wrong, she thought.

"It's me," she whispered. It's me, Katie Scarlett. I've come home."

The shadow moved slowly to her. Then she heard a voice. "Daughter," the voice said. (P.70)

below a small moustache. Then he laughed. (P.9)

This is where the story forebodes something sinister. Mitchell employs a huge vocabulary to provide detailed information about how this short glimpse gave Scarlett uneasiness. Here, Terasawa has shortened the long text but successfully caught the essence of an unsettling feeling by Scarlett, using such simple terms as “impolite” or “bold and dangerous.”

III – 3. What Is Missing in Abridged Version.

Yet, there are some parts where the abridged version detracts from Mitchell’s literary exquisiteness. The first case in point is the scene where Scarlett kills a Yankee soldier who sneaked into her property. Facing the dead body lying on the floor, she is shocked by the fact that she committed murder. But the next moment, she overcomes her distress by convincing herself that it was the right action. It takes some subtlety to describe this sudden emotional change.

Mitchell

She had killed a man, she who took care never to be in at the kill on a hunt, she who could not bear the squealing of a hog at slaughter or the squeak of a rabbit in a snare. Murder! She thought dully. I’ve done murder. Oh, this can’t be happening to me! Her eyes went to the stubby hairy hand on the floor so close to the sewing box and suddenly she was vitally alive again, vitally glad with a cool tigerish joy. She could have ground her heel into the gaping wound which had been his nose and taken sweet pleasure in the feel of his warm blood on her bare feet. She had struck a blow of revenge for Tara—and for Ellen. (P610-611)

Terasawa

Scarlett hurried down the stairs. She looked at the soldier’s bloody face. She was in shock. I’ve killed a man, she thought. I’ve done murder! Oh, that can’t be happening to me!

Then suddenly she felt alive again. Her heart filled with a strange, cruel joy. The murder felt like a victory. The Yankee was a thief. He had deserved to die. She, Scarlett O’Hara Hamilton, had acted rightly. She had defended Tara! (P.83)

Credit goes to Terawasa for using simple vocabulary like “cruel” instead of “tigerish.” But readers may find some abruptness in the part “suddenly she felt alive again.” How, in the world, could the innocent Scarlett turn into a cruel woman so suddenly? As is apparent in the Mitchell’s version, it was the sewing box that brought about the sudden change in Scarlett. The box had belonged to Ellen, and Scarlett was cherishing it as her memento. Initially she was distressed by the sight of the dead body and its blood on the floor, but then she was outraged to see her treasure in his dirty hand. After all, the soldier deserved death and she took pride in what she had done. Mitchell’s subtlety vividly depicts this emotional change that took place in Scarlett. Terasawa, on the other

charm. In her face, the delicate features of her Irish father were mixed too sharply. But it was a striking face. Her eyes were green with thick black lashes. Her skin was as white as a flower. (P.3)

While both start with the same sentence, Mitchell provided detailed description of Scarlett in terms of her appearance and her family ties. It seems as if she wrote it with a portrait of Vivian Leigh in her mind. It is surprising that she had written this long before she met Vivian Leigh herself.

Terasawa, on the other hand, omitted most of the details. She simplified the second sentence "seldom realized" into "did not realize" and sacrificed the subtlety. She skipped the detailed description of Scarlett's facial features and her connection to her mother. She substituted the color terms "Mongolia-white" with "white as a flower. Yet it is amazing work by Terasawa in that she retained the essence of Scarlett as she successfully described her beauty and effects she had on men in a text with a third length.

Next let us turn to how Rhett Butler appears in both texts. It is not until Chapter Six that Mitchell introduces Rhett Butler. Terasawa, on the other hand, does much earlier.

Mitchell

As she chattered and laughed and cast quick glances into the house and the yard, her eyes fell on a stranger, standing alone in the hall, staring at her in a cool impertinent way that brought her up sharply with a mingled feeling of a feminine pleasure that she had attracted a man and an embarrassed sensation that her dress was too low in the bosom. He looked quite old, at least thirty-five. He was a tall man and powerfully built. Scarlett thought she had never seen a man with such wide shoulders, so heavy with muscles, almost too heavy for gentility. When her eye caught his, he smiled, showing animal-white teeth below a close-clipped black mustache. He was dark of face, swarthy as a pirate, and his eyes were as bold and black as any pirate's appraising a galleon to be scuttled or a maiden to be ravished. There was a cool recklessness in his face and a cynical humor in his mouth as he smiled at her, and Scarlett caught her breath. She felt that she should be insulted by such a look and was annoyed with herself because she did not feel insulted. She did not know who he could be, but there was undeniably a look of good blood in his dark face. It showed in the thin hawk nose over the full red lips, the high forehead and the wide-set eyes. (P.134-135)

Terasawa

Then Scarlett realized that someone was looking at her. She turned and saw a tall, dark-haired stranger. He stared at her in a cool, impolite way. Although he was dressed like a gentleman, his black eyes were bold and dangerous. He smiles, showing very white teeth

The abridged version of *Gone with the Wind* this paper focuses on is the one from IBC Publishing retold by Miki Terasawa. According to IBC's count, the text has 34,550 words. Among a number of abridged books, some are worth reading and others are not. I would say Terasawa's version is fairly good. It is through this that I was motivated to move on to the long original version, which is over twelve times as heavy with 416,077 words (<http://src.scholastic.com>).

In order to condense the story, Terasawa has omitted many small events that take place in the original, by using transitional expressions like "Months passed" (P.17) or "After a proper amount of time" (P.159). She has also made the roles played by some characters insignificant. For example, there are no lines by Ellen, so the influences Scarlett received from her mother are absent. Furthermore, there is no appearance of Suellen and how exasperated she was about losing her fiancé to Scarlett is missing.

The slaves in Terasawa's text play less significant roles than in Mitchell's. Most notable of all is the role of Mammy, Scarlett's caretaker. Mitchell gives her a particularly important role in the story. For example, Mammy was the one who witnessed how Scarlett mercilessly accused Rhett over Bonnie's death and drove him deeper into despair. In the original version, it is through Mammy's recount to Melanie that readers can learn how the family broke apart. Mitchell purposefully employed Mammie's tearful recount in her strong dialect to dramatize the fierce dispute and this is what makes the story really difficult to comprehend, yet more interesting. In Terasawa's version, on the other hand, the exchange of bitter words is directly displayed in standard English. Her text may be less dramatic but more appropriate for language learners. Besides, she has the slaves speak grammatical English, which makes her text more educational.

III – 2. Character Portraits.

As I discussed, it is portraits of unique characters that make *Gone with the Wind* fascinating. To assess the values of the two texts, let us compare how Mitchell and Terasawa kick off the story to make a catchy beginning by introducing Scarlett O'Hara.

Mitchell

SCARLET O'HARA WAS NOT BEAUTIFUL, but men seldom realized it when caught by her charm as the Tarleton twins were. In her face were too sharply blended the delicate features of her mother, a Coast aristocrat of French descent, and the heavy ones of her florid Irish father. But it was an arresting face, pointed of chin, a square of jaw. Her eyes were pale green without a touch of hazel, starred with bristly black lashes and slightly tilted at the ends. Above them, her thick black brows slanted upward, cutting a startling oblique line in her magnolia-white skin—that skin so prized by Southern women and so carefully guarded with bonnets, veils and mittens against hot Georgia suns. (P.3)

Terasawa

Scarlett O'Hara was not beautiful. Still, men did not realize this when caught by her

safe return of Ashely, where they are scared of the enemy advancing toward Atlanta, how they narrowly escape the bloody Yankee attacks, where they desperately search for food at the barren plantation of Tara, or where soldiers are staggering with hunger toward home. Mitchell even describes how groundless misconception about the Yankees blindfolded Southerners.

After all, the pain, fear, hunger and sorrow that war inflict on people are the same no matter which side they stand on. There is no political divide in our prayer for peace. We can learn a lot from of her narrative about the brutality and absurdness of war. It was really ironic that the whole world got into another brutal war a few years after the publication of this educational novel.

Among many novels set at the time of the Civil War, *Gone with the Wind* is one of the few written from the Southern perspective. While she has been criticized for her biased view, Margaret Mitchell is known to have been an erudite historian and she provides her deep knowledge. In fact, the Civil War was not simply about slavery and emancipation. It was the war fought by two economies with different interests: the industrial North and the Agricultural South (大久保, 1977). *Gone with the Wind* offers an alternative view on history, and this is what makes it worth reading—reading critically, that is.

III. Pedagogical Value

III – 1 . Original and Abridged Versions

This section of the paper compares the original and abridged versions of the story in terms of literary and pedagogical values. Researchers and teachers alike have been promoting extensive reading, where second language learners can choose books to read according to their proficiency (酒井・神田, 2005; Grabe, 2008, Harada, 2014). Some classic novels are now accessible to novice learners thanks to abridged versions available from a number of publishers including Penguin, Oxford or Cambridge. Their series include works by Charles Dickens, Jane Austin, Emily Bronte, Jack London, or Conan Doyle. These abridged versions are designed for learners with limited reading skills and vocabulary as the texts are simplified and difficult words are replaced with easy ones.

This is where a pedagogical controversy comes in. 豊田 (2010) values authenticity of literature and claims that learners should be encouraged to try reading original versions. He bases his claim on his own experience as an English learner, where he put an extra effort in reading classic novels that were beyond his proficiency level at the time. He states that it was through the exposure to authentic texts of master pieces that he learned to appreciate the true beauty of literature. Abridged versions, according to him, usually fail to preserve the intricacy of the original and often detract from its real literary value. 小林 (2010), on the other hand, argues that what really matters in foreign language learning is comprehensible input, which abridged versions are more likely to provide. The aim of this section is to assess the literary and pedagogical values of abridgement in comparison with the original.

Scarlett? I have told Poke to lay two extra plates for them. Where are your manners?”)

Even if Mitchel tried to display this speech phonetically, there was no reason to change the spelling of “for” into “fer” as both words are phonetically identical. It seems that Mitchell just wanted to play up roughness in the speech to ridicule it.

Most readers are more familiar with the view that slaves had to endure abuse and injustice, as is most typically depicted in *Uncle Tom's Cabin* (Stowe, 1852). According to Mitchell, however, Stow's view itself is biased.

Accepting *Uncle Tom's Cabin* as revelation second to the Bible, the Yankee women all anted to know about the bloodhounds which every Southerner kept to track down runaway slaves. They never believed (Scarlett) when she told them she had only seen one bloodhound in her life and it was a small mild dog and not a huge ferocious mastiff. (P.935)

The second criticism is Mitchell's attempt to justify the Ku Klux Klan. In her narrative, the Klan was established to fight against the injustice of the Yankee rule after the war. She spent a considerable amount of paper space to describe what predicament the Yankee aggression brought to the people in the South, whites and blacks included. She went into quite a lot of detail about how Yankees stole their property or put them into prison for no reason. It was for this reason, Mitchell insisted that conscientious southerners stood up and formed the Klan. In fact, the group has been active up till now.

Outside the South, however, most people see the Klan as an unlawful terrorist group. It is known to have committed a number of violent attacks, including bombing or lynching. It was a major resistant power against the Civil Rights Movement in the middle of the 20th century and earned a reputation as a notorious violent force against non-violence. Quite a few members have been charged and found guilty for their terrorist acts. They are the least popular group even in the South, today.

While there might be some truth in Mitchell's historical understanding, it obviously goes against today's ideology. Most of us would believe slavery is cruel and inhumane and do not want it restored in today's society. The Klan is an outrageous terrorist group promoting discrimination against blacks and it has no place in today's world. In fact Hollywood was aware of the controversy and carefully made some modifications to make the movie more politically correct. Even so, the movie is also considered to be racist and derogatory by today's critiques in spite of its tremendous success 75 years ago. (NHK, 2014).

II – 2 . View on War

Less controversial than these issues is Mitchell's narrative on war misery. Readers can easily become sympathetic with the scenes where Scarlett and Melanie anxiously wait for the

them are abused. Rather they all preserve their dignity. Mammy, in particular, is often assertive and even Scarlett has to obey her. The slaves are treated with such respect that they choose to stay even after they are set free after the War, just as Peter is quoted below.

“No, Ma’am! Dey din’ sot me free. Ah wouldn’t let no sech trash sot me free,” said Peter indignantly.” (P.941)

Mitchell even argues that the slaves had been much better off before the war and it was the Yankee government that made them miserable.

Packed into squalid cabins, smallpox, typhoid, and tuberculosis broke out among (free negroes). Accustomed to the care of their mistresses when they were ill in slave days, they did not know how to nurse themselves or their sick. Relying upon their masters in the old days to care for their aged and their babies, they now had no sense of responsibility for their helpless, and the Bureau was far too interested in political matters to provide the care the plantation owners had once given. (P.912-913)

Mitchell goes on to say that it was on the charity of benevolent white people that lost negroes had to depend.

Abandoned negro children ran like frightened animals about the town until kind hearted ite people took them into their kitchen to raise. Aged country darkies, deserted by their children, bewildered and panic stricken in the bustling town, sat on the curbs and cried to the ladies who passed. (P.913)

Behind her support of slavery lies Mitchell’ prejudice against African Americans. It is most obvious in the following part where she casts doubt in their capability to stand on their own feet. In doing so she even denies democracy.

What good’s a ballot when the darkies have lost their minds—when the Yankees have poisoned them against us?” (P.905)

Mitchell’s lack of respect for African Americans is well illustrated in the way she displays slaves’ speeches. The following is just one of the uncountable instances she mockingly exaggerates their dialect.

“Is ge gempmum gone? Huccom you din’ ast dem ter stay fer supper, Miss Scarlett? Ah done tole Poke ter lay two extry plates fer tem Whar’s yo’ manners?” (P.30)

(Are the gentlemen gone? How come you didn’t ask them to stay for supper, Miss

gentleness earns respect even from Rhett, who calls her “one of the very few kind, sincere and unselfish person” (P.308-309). While waiting for Ashley’s return, Melanie, despite destitute, is willing to offer generosity to tired, hungry soldiers coming in one after another. When Scarlett calls her action nonsense, Melanie replies,

“Oh Scarlett, don’t scold me. Let me do it. You don’t know how it helps me. Every time I give some poor man my share I think that maybe, somewhere on the road up north, some woman is giving my Ashley a share of her dinner and it’s helping him to get home to me!” (P.706)

She consistently loved and trusted Scarlett throughout the story, not seemingly aware of Scarlett’s hate and jealousy over Ashley. The moment Scarlett married Charles, Melanie accepted her as her sister. She always stood by her side, even when she heard about Scarlett’s affair with Ashley. She was the one who stayed at the bedside when Scarlett had a miscarriage.

However, it is her hidden bravery that makes her Melanie Wilkes. When a Yankee soldier broke into Tara, she crawled out of her sick bed with a gun. Despite her ailment she exerted herself to put out the fire a Yankee set on Tara. In so doing, she was gradually earning respect from Scarlett, who had every reason to hate her because of Ashley. The story climaxed as Scarlett realized how much Melanie had meant to her as Melanie was dying at the end. When Rhett called her “A very great lady (P.1431), his quiet voice echoed over the dim sky of Tara, which makes the ending truly memorable.

These four characters put readers on an emotional roller coaster that goes through love, joy, fear, sorrow, anger and jealousy. The images the text creates are as vivid as those in the movie. Mitchell was especially talented in making the four characters’ dialogues full of life, which is really amazing considering the fact she was just a small woman with little social experience, spending most of her life sick in bed.

Part II. Gone with the Wind as a History Novel

II – 1. Mitchell’s Biased View on History

When the book first appeared in the early 20th century, it surely excited a large population in the South, inspiring their pride that had been dormant after their heavy defeat in the Civil War. Conroy (2008) calls it “an anthem of defiant” and recounts how his mother infused Southern pride in him by repeatedly reading him the story as he grew up.

However, Mitchell’s historical views are not favorably taken outside the South. The first criticism is that Mitchell turned a blind eye to the inhumane sides of slavery. In the story appear quite a few slaves working for the O’Haras, among whom are Mammy, Pork, or Prissy. None of

could not resist his wild kiss and marriage proposal after Frank's death. Rhett is an icon of intelligence and masculinity.

However, there is much more to Rhett Butler than this, which makes it really difficult to judge his true color. After ridiculing the Cause, he joined the Confederate Army when they were totally crippled and doomed. After pretending to be distant from Scarlett, he sincerely proposed to her and became a loving husband. He even turned into a caring and understanding father to his stepchildren, Wade and Ella.

He revealed his true character toward the end of the story. After the marriage to Scarlett, he could hardly hold his jealousy toward Ashley. He was totally helpless when Scarlett was in bed after her miscarriage. He broke down over the death of his beloved daughter, Bonnie. Then he was severely hurt by Scarlett's cruel blame. Their marriage fell to pieces after both were too proud to express their true feelings. It turned out that Rhett Butler, a cynical and bold guy, was just another human with his own share of vulnerability. He had been trying to hide his weakness under his mask of mockery. He was a poor man who could not express his love passionately. Under his scornful mask, he was probably lonely. This can explain his irrational decision to join the Confederate Army.

I – 3. Ashley Wilkes

Ashley, who earns Scarlett's admiration, is depicted as being contrastive to her. Intelligent and quiet, he cannot nearly be as aggressive as Scarlett. The difference is quite apparent in the scene where Scarlett confesses her love to Ashley. Her aggressiveness and his vexation are quite contrastive as in the dialogue below.

“Ashely—Ashley—tell me—you must—oh, don't tease me now! Have I your heart? Oh dear I lo—.”

“You must not say those things, Scarlett! You mustn't. You don't mean them. You'll hate yourself for saying them, and you'll hate me for hearing them!” (P.162)

There is also a contrastive difference between the two in sense of morality. While trying hard to be a faithful husband to Melanie, he could not resist seduction from Scarlett. When he advertently kissed her, she was overjoyed with triumph. But then she became bewildered to see Ashley blame himself in despair. There was a sharp difference in the way of living as well. After the war, he was too poetic to live in the business world while Scarlett succeeded in running the mill. He hated himself for having to rely on Scarlett's charity, while she was proud to support him. However as he was becoming spiritless, she finally realized they were too different and became aware of her love for Rhett.

I – 4. Melanie Wilkes

Mitchell gives Melanie Wilkes two personalities: a woman of a sweet heart and bravery. Her

Mitchell herself was weak and ailing. She probably created the character of Scarlett out of her admiration for strong women. Before *Gone with the Wind*, there were two prototypes in 19th century American literature. The first is Hester Prynne in *Scarlet Letter* (Hawthorne, 1850), which was published 86 years before *Gone with the Wind*. She is a quiet woman with strong belief. She keeps her chin up amid humiliation and accusation that she committed adultery, trying to be a good mother for her illegitimate child. In the same century, Alcott (1868) wrote her signature book *Little Women*. Jo, the boyish sister of the Marches in particular, is career oriented. Aspiring to be a writer, she keeps on trying to sell her novels while facing a lot of prejudice against women of that era.

Scarlett O'Hara's determination is no less significant than these pioneering characters'. However, there is more to Scarlett than determination. She keeps her head up against various accusations but she is much more outspoken than Hester as she vocally expresses her anger and frustration. Just like Jo, Scarlett works her way through the old fashioned value to establish her career. Determined to protect Tara, she tries to pursue whatever careers that come her way, which makes her different from Jo, who had nothing but writing in mind. In other words, Scarlett's main interest is not in career itself but in making wealth and a carefree life. While Jo is idealistic, Scarlett is practical.

After *Gone with the Wind*, Scarlett's influence has remained worldwide. A quarter century later on the other side of the Atlantic, an 18-year-old French novelist, Françoise Sagan made her debut with *Bonjour Tristesse* (1954), where she created Cecil, an audacious yet vulnerable girl who challenges her parents, driving her stepmother to commit suicide. Early in this century, Scarlett's influence crossed the Pacific and reached a communist regime. A Chinese writer, Wen Hui, published *Shanghai Baby* (1999), a sensational and really un-Chinese novel, where Coco keeps sleeping with different men with no second thought, struggling to find out what is in her own heart, just like Scarlett does with Rhett and Ashley. Scarlett O'Hara was indeed at a turning point for female characters in literature.

I – 2. Rhett Butler

Just like Scarlett, Rhett Butler is also depicted as a self-centered scoundrel with strong confidence. He also had nothing but himself to believe in and thumbs his nose at the Confederacy and its Cause. When the war started, he boldly predicted the defeat of the South and outraged fanatic supporters of the Confederate Army. As the war went on, while the entire South was going through pain, he made a great fortune by blockading.

Though she was often aggravated by Rhett's mockery, Scarlett was becoming aware that her love for him was growing despite herself. It was Rhett that gave her comfort when she was frustrated about having to keep mourning over Charles's death. It was again Rhett who gave Scarlett morale support when she was totally disapproved by local people for running the mill. In fact, it was Rhett that she often turned to when she was totally helpless. After all, he was the one who knew the way around the chaos and was able to offer a helping hand. In the end, Scarlett

characters.

I – 1. **Scarlett O'Hara**

The entire story is about Scarlett O'Hara and her journey to seek who she is and what she loves. She is an atypical Southern woman in the Deep South. She inspires many readers across the world, with the way she stands up against the conventional value of the old South and overcomes adversity. She goes her own way with her passionate love and strong belief in herself no matter what criticism she receives.

Indeed, Scarlett strikes readers as an overly self-centered woman. She married twice for selfish reasons. First, out of shock of losing Ashley and of having her secret conversation eavesdropped on by Rhett Butler, she rushed to marry Charles Hamilton, with no respect for his dignity. She showed little sorrow over his death after their short matrimony. Instead of remaining quiet in her black mourning dress, she would rather go out flirting with other men. Then, just for money she married Frank Kennedy without loving him again, knowing he was engaged to her sister. Then she drove him to his death as a result of ignoring his advice.

However, many readers, female readers in particular, can often identify themselves with Scarlett due to her strong determination. She desperately helped the ailing Melanie travel under bloody bomb shells. She also bravely stood up against Yankee soldiers who tried to invade her property. While she disregarded the Cause the South was fighting for, she remained faithful to her land Tara. To protect it from confiscation after the war, she dared to go into business, fighting the disapproval from local people believing that it was really unwomanly to get involved in business.

Furthermore, Scarlett had nothing but her own heart to believe in, which is another reason she wins a worldwide support. While she was passionately in love with Ashley, she could not deny the fact she was becoming attracted to Rhett. While she was in a dilemma between the two men, she always tried to be true to her heart, eager to hear her inner voice.

Mitchell effectively incorporates monologues to show Scarlett's mind and this is how many readers feel inspired by her positive thinking. For example, seeing her fellow country people deploring defeat, she talks to herself as follows.

"Why can't they forget? Why can't they look forward and not back? We were fools to fight that war. And the sooner we forget, the better we'll be." (P.1033)

Of course nowhere in the story is her positive attitude more evident than at the ending, where she says the famous line after losing everything, Melanie, Ashley, and finally Rhett.

She could get Rhett back. She knew she could. There had never been a man she couldn't get, once she set her mind upon him.

"I'll think of it all tomorrow, at Tara. I can stand it then. Tomorrow, I'll think of some way to get him back. After all, tomorrow is another day." (P.1488)

The Glorious Days in Tara May Have Gone with the Wind But— Review of the Masterpiece in Terms of Humanity, History and Pedagogy

Jun Harada

Abstract

This paper, discussing Margaret Mitchell's *Gone with the Wind*, consists of three parts. The first part deals with the humanistic aspects of the novel, examining how Mitchell exercised her superb imagination, particularly in the creation of four main characters. The second part reevaluates the value of the book as a history novel. This part critiques Mitchell's historical views and discusses how we should read them. The third part analyzes the book's pedagogical value, in comparison with an abridged version of the story written for second language learners. By investigating the two books' texts, this paper argues that each has its value with different ways to fascinate readers and both authors deserve literary credit.

Introduction

Gone with the Wind is, in no doubt, one of the most widely read novels in the history of American literature with its big fans mostly female readers. Published in 1936, it sold a million copies in the first four months and won the author a Pulitzer Prize that year. Conroy (2008) rates it, along with Tolstoy's *War and Peace*, as the best war novel in the world. Hollywood made the story even more famous worldwide. The blockbuster movie (1939) directed by Victor Fleming won nine Academy Awards including the Best Picture. The unknown actress Vivian Leigh, playing Scarlett O'Hara, became a top star overnight, which is considered to be an epitome of an American success story. The film has sold more tickets than any other and it is considered to be an icon of Hollywood's golden age. The purpose of this paper is to look into the factors behind this huge success and to assess its value in terms of humanity, history, and pedagogy.

Part I . The Four Main Characters and Humanity

Margaret Mitchell's literary talent lay in her brilliant imagination with which she created unique characters and in her marvelous language power that vividly portrayed them. There appear hundreds of characters in the story but the dialogue Mitchell created in the story "grants each of them the clear imprimatur of a unique and completely distinct voice" (Conroy, 2008, P.8-9). The four main characters, Scarlett O'Hara, Rhett Butler, Melanie Hamilton and Ashley Wilkes, in particular, are the four powerful wheels that get the nearly 1500-page story moving forward without tiring out its readers. This section of the paper reviews the roles played by these four

- Kees; Ginsberg, Ralph; Kramsch, Claire. (Eds.) *Foreign language research in cross-cultural perspective. Amsterdam: John Benjamins. pp. 39-52*
- Long, M., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition* (pp. 15-63): Cambridge University Press.
- 長森清 (2014) 英語多読の効果 —村田女子高等学校における実践例— Chart Network 72 (p20-22)
- Nation, P., (2013) *What Should Every EFL Teacher Know?* Seocho-gu, South Korea. Compass Publishing
- Ortega, L. (2009) *Understanding Second Language Acquisition (Understanding Language)* :London. Routledge
- 酒井邦秀「新しい多読法による英語教育」2003年9月25日FTC/RTC 中央大学駿河台記念館
- 酒井邦秀・神田みなみ (2005) 『教室で読む100万語 英語多読のすすめ』大修館
- Sato, R. (2010). Reconsidering the Effectiveness and Suitability of PPP and TBLT in the Japanese EFL Classroom. *JALT Journal*, 32(2), 189-201
- Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning: A tutorial on the role of attention and awareness. In R. Schmidt (Ed.), *Attention and awareness in foreign language teaching and learning (Technical Report No. 9)* pp. 1-64). Honolulu: University of Hawai'i at Manoa.
- Schumann, J. (1978). *The Pidginization Process: A Model for Second Language Acquisition. Rowley: Newbury House Publishers. p. 367-79*
- Skehan, P. (2012) Language aptitude. S. Gass, & A. Mackey (Eds.) *The Routledge handbook of second language acquisition*. London: Routledge (pp.163-176).
- 豊田昌倫 (2010) リーディングの問題点と新たな視点 木村博是 氏木道人 木村友保(編)『リーディングとライティングの理論と実践 —英語を主体的に「読む」・「書く」: 英語教育学大系10』大修館書店

Question

In this situation, an obstinate person means a person who is -----.

- 1) flexible about ideas. 2) generous to his students
3) unable to reject criticism 4) unwilling to change his mind.

NCTUA 2012

In this passage, the guessing process can be simpler than Text A. The clues lie in the part *Mr. Matsumoto is such an obstinate person that he will not listen to them* and continues to spend a lot of time making up jokes for his classes, where the words 'such' and 'that' suggest that Mr. Matsumoto's being obstinate resulted in his not listening to the advice from his colleagues. Therefore the closest meaning to obstinate should be "unwilling to change one's mind." The discourse makers such as "However" also facilitates the guessing, too.

References

- Beglar, D., & Hunt, A. (2014). Pleasure reading and reading rate gains. *Reading in a Foreign Language*, 26, 29-48.
- Doughty, C., & Williams, J. (1998). *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. New York: Cambridge University Press
- Ellis, R. (2008) *The Study of Second Language Acquisition (Oxford Applied Linguistics)*, Oxford University Press.
- Ellis, R. & Shintani, N., (2013) *Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research (Routledge Introductions to Applied Linguistics)* London: Routledge.
- Grabe W. (2008) *Reading in a second language Moving from theory to practice*. Cambridge
- Krashen, S. (1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Krashen, S. (2003). *The Power of Reading: Insights from the Research*, 2nd Ed. Santa Barbara, CA: Libraries Unlimited.
- 原田淳 (2011) 短期ホームステイにおける第2言語習得のプロセス 獨協中学校・高等学校研究紀要
- Harada, J.(2014). About Struggles with Extensive Reading. Presentation at *Saitama JALT* on September 21, 2014. @ Harigaya Kominkan, Saitama.
- Harada, J.(2016). About Struggles with Extensive Reading. Presentation at *ETJ Expo* on January 31, 2016. @ Kanda Institute of Foreign Languages.
- 和泉伸一 (2009) 『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育」大修館書店
- 小林めぐみ (2010) 多読の成果と課題 木村博是 氏木道人 木村友保(編)『リーディングとライティングの理論と実践 英語教育学大系 10』大修館書店
- Larsen-Freeman, D. (1991) *Teaching grammar In Celce-Murcia (Ed.) Teaching English as a econd or foreign language (pp. 279-96)* Boston. Heinle & Heinle.
- Loewen, S., (2015) *Introduction to instructed second language acquisition*. London: Routledge
- Long, M. (1991). "Focus on form: A design feature in language teaching methodology". In De Bot,

his class. They write essays for their homework and *bubu* them in class. Kevin wrote an essay about cell *bibi*.

Passage D

Rate of Nonsense 14% (Seven words out of 50)

Just *jonjon* Tom heard some girls *jejeje* behind them. It wasn't English. "Maybe it's *jojojo*," he thought and looked *jajaja* Jiro. Tom saw Jiro's face get *jujuju*, but not from the sun. "Hey, *jijiji* up?" Tom asked. He looked at *janjan* girls and then back at Jiro.

Appendix 2: Guessing Instruction

The following texts each contain an underlined word, which is probably unfamiliar to most learners. Use the contextual clues and figure out what it means.

Text A

Jane: How's Michelle doing? The last time I met her, she looked a little depressed and said she was worried about her schoolwork

Mary: I saw her yesterday, and she seemed absolutely exuberant.

Jane: Really? I wonder what happened.

Mary: Well, she'd been worried about her math test, but she did really well after all. Also, she's found a part-time job that she enjoys a lot.

Jane: That's great. I'm happy to hear that.

Question

In this situation, exuberant means to be very ----

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1) busy and stressed | 2) happy and energetic |
| 3) hard-working and healthy | 4) upset and nervous. |

NCTUA 2014

Is this dialogue, from Jane and Mary's first line, we can guess the word "exuberant" is an adjective describing Michelle's emotional state. Jane's second line implies that the situation surrounding Michelle changed a great deal. Then Mary's second line suggests that things are going well with Michelle. From these contextual clues we can conclude Michelle is very happy and energetic.

Text B

Mr. Matsumoto is an English teacher who believes English classes should start with a joke. He always tried hard to create funny jokes. Some of his students have complained about his jokes being a waste of time. His colleagues also have advised him not to spend so much time writing jokes. However, Mr. Matsumoto is such an obstinate person that he will not listen to them and continues to spend a lot of time making up jokes for his classes.

settings. Nevertheless theoretical discussion presented in this paper should be sufficient to believe ER is worth trying. It conforms to the principles of L2 instruction proposed by Ellis and Shintani (2013) as it provides a massive amount of meaningful L2 input, facilitates implicit learning, and respects learner differences.

Before closing down, I would like to add that the benefits of ER go beyond L2 acquisition and results in rich cultivation of a learner as a whole person. Reading whether it is in the L1 or in the L2, will broaden a person's horizons. It is a source of wisdom or inspiration. Great literature shed light on humanity (Harada this volume) and biographies of great figures can inspire young readers to strive to do their best. There are also many books to stimulate interest in science or in history. It is my hope that many students will find pleasure in reading. If L2 reading does not appeal to them, why not read in L1. If too much text is a burden, why not appreciate beautiful pictures in books. There is no objective reason to believe one book is superior to another but it is each individual who can decide what is worth reading.

Appendix 1: Unknown Words

The following four passages A,B,C,D each consist of 50 words and some are replaced with the italicized nonsense words such as *hoho*. See how comfortable you would feel reading each passage when the rates of unknown words are 2%, 4%, 10, 14% respectively. (Original Text from *Progress 21*, Edec)

Passage A

Rate of Nonsense 2% (One word out of 50)

After a delicious lunch, the Greens began to walk toward Pier 39. They found a lot of shops along the way. Jiro bought presents for his family and friends. At Pier 39 Dr. and Mrs. Green told the kids to *hoho* the shops while they themselves looked at some pictures.

Passage B

Rate of Nonsense 4% (Two words out of 50)

The Whites live in Kobe. They live in a *minmin* house. It has a big nice living room on the first floor and four bedrooms on the second floor. The Whites sit and talk in the living room. They *fahfah* TV there, too. Laura doesn't study in the living room.

Passage C

Rate of Nonsense 10% (Five words out of 50)

At Kevin's school they use English all *bebe*. The students are from many countries, but everyone speaks English. Their *bobo* teacher is Mr. Ross. They read stories and *baba* in

assistance. I never force anyone to read but welcome whoever is interested in ER. By doing so, I fully respect learner autonomy. The reality is, however, that there is only one or two students coming to attend the weekly practice. One student even accused me for not teaching. It may be that feudalism and Confucian philosophy is so ingrained in this country that students do not feel comfortable with a situation where a teacher is not taking a central role. (Sato, 2010). The biggest cause of difficulty is that some of them do not enjoy reading even in L1. I myself liked reading in Japanese and switching to L2 was not very difficult but how can we expect someone who does not read in L1 to read in L2?

Do we need some push or force to make learners read? In fact in the workshops I have attended, I hear quite a few teachers say they would rather give them obligatory homework. If so, the next question is, do we have to have students read the same text or can we let them choose what to read? The problem with the first choice is we can hardly choose the right level of text for each learner. Some find it too difficult or too easy. The second choice is more agreeable with ER principles but there is a concern that students can make up their reports without reading anything. The third solution would be to set aside some class time for ER so that students have to read under a teacher's monitor. This is what Nagamori (2014) practices and it seems like a reasonable solution. Yet there are many schools under strict syllabus restrictions and teachers can hardly afford any time for ER.

The fourth solution is to let students read whatever they like. For example, Japanese cartoons that many students are familiar with, such as "Doraemon" or "One Piece", are translated into English and they are readily available in Japan. Sakai & Kanda (2005) claim there are some cases where students make good progress by reading cartoons. They can even read texts with no sentences such as a picture dictionary or baseball stats. Such texts are devoid of syntax or morphology but full of vocabulary. The point is we can only expect students to read the type of texts they enjoy reading. It is very unlikely that Japanese students who are only familiar with Japanese manga will enjoy reading Dickens or Hemingway. Instead, they should start from where they feel most comfortable. If they find pleasure in reading, they can move on to literature for young readers then on to classics. After all we teachers can do little about students' taste or what they do outside the classroom. I believe respecting autonomy is the best as it is the fundamental principle of ER.

5. Conclusion

In this paper I have reviewed ER from theoretical, empirical and practical perspectives and argued it is not the one and only approach to L2 acquisition but it has its value if it is well combined with explicit instruction. I have also presented some ideas of explicit instruction that teachers can provide in regular classes. Regrettably however, there is not much empirical evidence to support how ER facilitates L2 acquisition and there is little prospect that the future will soon shed light on a clear advantage of ER due to the difficulty in controlling other variables in school

4-2 Form-focused ER

The second question is how to draw a learner's attention to language form. It is Sakai and Kanda's (2005) first principle of ER not to use a dictionary. It is true that, as Ellis and Shintani suggest, L2 leaning should be predominantly implicit and excessive use of a dictionary hinders the reading process. However, Loewen (2015) argues ER works better when coupled with explicit instruction. The best approach probably is meaning-focused learning with occasional shift of attention to language form as suggested by a number of focus on form researchers (Long, 1991, Doughty & Williams, 1998, Izumi 2009). The question is when and how to draw attention to language form.

Research shows vocabulary development is influenced by not only the frequency but also the intensity of exposure to vocabulary items (Loewen 2015). In other words, what matters is not only how many times a learner encounters the item but how much s/he needs to know it to comprehend the text. From time to time, a learner reading an L2 text may feel a strong urge to use a dictionary when s/he encounters the same words again and again or if s/he intuitively thinks knowing the meaning of the item will greatly help comprehension of the text. In such situations, the reader should break away from the ER principle and use a dictionary.

Of course there is danger that some meticulous students overdo it and stop to use a dictionary every time they come across unknown words. They need to learn to be tolerant for ambiguity and keep reading to get the gist without worrying too much about details. This is where teachers should come in to help. They can remind students that it is not necessary to use a dictionary regularly when reading L1. Teachers can spend class time coaching how to use contextual clues to guess unknown words. Teaching etymology or discourse markers can also help students deal with unfamiliar words. The activities listed in Appendix 2 are a good example. Furthermore knowing how information is made into a paragraph and how multiple paragraphs are made into an essay is a good way to get the gist. This is where teaching reading strategies helps (Grabe, 2008). Many GRs come with glossaries or review exercises. Learners can take advantage of these to increase vocabulary and check their own comprehension.

4-3 How to Get Students to Read

The third question is how to get students to read. This is the most difficult question to answer as I have not been very successful (Harada, 2014). The issue here is how much we can trust students to read on their own. Once, I tried having students hand in reading logs where they had to report about the books they had read but only half the students turned in their homework. A coworker of mine tried to be stricter in getting students to submit their homework but many of their reports were dubious. When asked to report his favorite phrase they found in the text, one of the students wrote down "Copyright Penguin." Recently I refrain from forcing them to read but then many do not even go to the library. I have been holding a so called ER club. It is where students come to the library to read a book of their choice. Here I assume the role of a learner and read a book of my choice while keeping myself available to students whenever they need my

4. Practice of ER

4-1. What to Read

As I have reviewed pros and cons of ER, I turn the discussion to how best to put it into practice. The first question is what to choose for ER. The most popular type of materials is graded readers (GRs) designed for L2 readers. Many famous novels are rewritten into easy text for the sake of L2 learners. Toyoda (2010), however vehemently criticizes GRs because it detracts the original beauty of master pieces. He bases his claim on his own experience as a young English learner. He says his reading was frequently bogged down as his vocabulary at the time was too limited for such classics but only out of such struggle could he learn to appreciate the beauty of great literature. Kobayashi (2010) on the other hand, values the role of GRs in making classic literature comprehensible to L2 learners. She says reading a large numbers of GRs can lead to a wide range of L2 development including grammar as well as vocabulary. Recent SLA research found evidence in favor of Kobayashi's view. For example, Beglar & Hunt (2014). compared a group of learners who tried reading authentic literal works with a group reading simplified GRs. The latter group was able to read more fluently and ended up reading more text than the former. More importantly, the GR group outperformed the authentic work group in the posttest, probably due to a bigger amount of comprehensible input. After all comprehensibility should be prioritized over authenticity if the goal is L2 development.

Yet, Toyoda may counter-argue that the goal of reading is not necessarily language development but intellectual cultivation through literature and wisdom of great writers. Respecting both arguments, my suggestion is to read both, first GR and then move on to the authentic versions. Having read a GR and understood the content, learners can find the original version more comprehensible. They can appreciate the value of literature by comparing the two texts. In fact, some GRs are well-written retaining the literal values of the original texts. (Harada in this volume)

GRs are often labeled with an intended level of learners. Some are classified into level 1, 2, 3 and so forth while others are labeled with a TOEIC score (ex, 600 or up) to help readers choose the right level. Unfortunately, however, there is no cross-publisher consistency in terms of level labeling, which makes choosing the right book really difficult. Probably the best approach would be to follow the third principle of ER, which states "Put down the book you do not enjoy" and keep switching books until we come across a book with the right level.

It is also advisable to skim through a few pages before reading, to see how much unknown vocabulary the text seems to contain. There is a rule of thumb established by some researchers (Grabe, 2008, Nation 2013) stating that the proportion of unknown words and phrases should be lower than 2%. The activity listed in Appendix 1 can illustrate how one would feel when reading a text containing unknown words at the rate of 2%, 4%, 10%, and 14%.

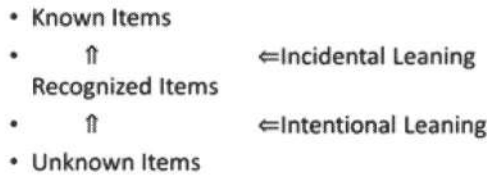
atmosphere and it is impossible to control these variables. Thirdly, Nagamori did not report the deviation value of the non ER group in the first year so it is possible that their proficiency was already lower than that of the ER group from the beginning. It is my experience that the academic level of students coming to attend the same school varies from year to year and we cannot attribute the higher score of ER group simply to the effects of ER. It is extremely difficult to design an empirical study in a school setting as it is almost impossible to control other variables in school settings. Putting students into experiment and control groups while restricting their opportunities to learn is not ethically viable. After all, fair empirical treatments are not fair to students.

Due to these problems of classroom research, we now turn to meta-analyses of various studies in each of which students learn through different approaches in different settings. Such analyses were offered by Nation (2013) and Loewen (2015) who meta-analyzed various research studies. The conclusion they both drew was that incidental learning is not the most efficient way. In fact, there is clear evidence students can increase vocabulary solely out of ER but their growth is usually smaller than that of intentional learning groups. According to Nation, in order to for a learner to retain a vocabulary item out of incidental learning, s/he has to encounter it about ten times, which is very unlikely to happen especially with infrequent words.

In spite of discouraging evidence, there is good reason to support ER. First, it can be used as supplementary learning to classroom instruction as learners can practice outside the classroom. Although intentional and explicit learning is demonstrated to be more beneficial, it is not possible to pay conscious attention to every feature of language especially in an EFL setting where the time of instruction and the amount of language exposure is limited. (Loewen 2015). Second, while research shows the effect ER has on vocabulary development is rather small, there should be other areas of L2 learning it can benefit. Nation (2013), for example, states that the purpose of ER is to develop reading fluency rather than vocabulary. This is a very much needed skill especially for college examinations like NCTUA that require learners to read a large amount of text in a short period of time. Also, ER, especially story reading, can help learners shorten psychological distance to the target culture. There is a lot of research showing cultural assimilation can be a driving force for L2 learning in terms of motivation (Schumann 1978, Harada 2011). Third ER, meaning-focused learning, is a great way to provide context to learn how language is used. This will facilitate form-meaning-function mapping, which is, according to some researchers (ex. Izumi, 2009; Larsen-freeman 1991), the very essence of language learning.

In short, despite the lack of empirical evidence, there is good theoretical reason to believe ER is worth trying. ER is largely incidental but can be explicit learning if learner attention can be drawn to form. If so, ER is a typical case of Focus on Form (Long, 1991, Long & Robinson 1998, Doughty and Williams 1998). Loewen (2015) suggests ER works best when coupled with explicit instruction.

Figure 1



(Harada, 2016)

If learning requisites some attention the question when and how a learner should pay attention to language form while reading, The next section will examine the cognitive process of incidental learning and discuss how best ER is implemented for successful L2 learning.

3. Empirical perspective

Despite the growing number of theoretical accounts supporting ER, there is little empirical evidence. We need to deal with the success stories presented by Sakai & Kanda (2005) with caution. First we cannot generalize this anecdotal evidence of a few learners as there is a great variation in individual characteristics especially language aptitude (Skehan 2012). Second, with no empirical research design we cannot tell if the proficiency gain was purely due to ER. It is possible these learners went through other learning processes besides ER such as attending prep schools.

A better set of data is offered by Nagamori (2014), who reported about his students who practiced ER for 30 minutes every week. They started ER in their first year and after one and a half years, they demonstrated significant gain in the GTEC test. Nagamori further compared the students engaged in ER with those enrolled in the same school in the previous year before the program started. The results were that the ER group significantly outperformed in terms of deviation value on an entrance exam mock test developed by Kawaijuku. This research is more convincing than Sakai & Kanda's because Nagamori sampled a group of ordinary high school students, instead of a special case of highly successful learners. The deviation value he used for the measurement of proficiency makes this study noteworthy too. It means a great deal to high school students as it predicts what level of college they are likely to get accepted. In fact I often cite this study to convince my students of the value of ER.

Nevertheless, this study has to be taken with a grain of salt. First the relatively small number of participants (N=19) was not sufficient to generalize the results. Nagamori limited the participants in his study to those in the most advanced class. A question remains as to if the same results would come out with lower level students. Secondly, although Nagamori states there was no other difference between the ER group and the non ER group in terms of instruction, I doubt we can conclude the difference in score was simply due to the result of ER. School classrooms are really complex with many factors involved such as the quality of instruction or classroom

2.2 ER as Incidental Learning

SLA clearly distinguishes between intentional learning and incidental learning (Loewen 2015) and ER is a typical case of the latter. Intentional learning refers to a situation where a learner (or a teacher) sets a clear goal of learning. An example of it would be a learner using a vocabulary book to increase vocabulary. Incidental learning, on the other hand, refers to a situation where a learner takes part in an activity with no specific intention to learn but learning takes place as a byproduct. For instance, if he reads many stories in L2 simply for pleasure but increases his vocabulary as a result, the learning is considered incidental. This distinction can be compared to two ways of building muscles. The first way is to go to the gym and pump iron and the second is to play tennis and develop upper muscles as a result of swinging the racket many times.

As it is possible to develop one's muscles while having fun playing tennis, it is also possible to develop language proficiency out of incidental learning. The successful learners presented in Sakai & Kanda (2005) were not quite test oriented. Instead, they just enjoyed reading stories such as Harry Potter, Da Vinci Code but ended up with high scores on various English tests. Sakai & Kanda explain that the results were mainly due to the massive amount of comprehensible input the learners received out of ER. They further state the benefits of ER are not limited to reading but extended to other areas such as listening or even to writing, as comprehensible input is the basis for a wide range of language acquisition. (For further discussion on the role played by comprehensible input, see Doughty & Williams 1998; Ellis, 2008; Izumi, 2009)

Incidental learning should not be confused with implicit learning, which refers to learning without awareness. Krashen (2003), based on his distinction of learning and acquisition, states that implicit learning is an ideal way to develop implicit knowledge that is necessary for natural and spontaneous communication. Yet, many researchers cast doubt if learning is possible without awareness (ex Schmidt, 1995). In fact, there is growing evidence that explicit learning is more fruitful and implicit learning is losing its popularity (Ellis & Shintani, 2013, Loewen 2015, Ortega 2009,).

However ER can be explicit while incidental as a learner can consciously use contextual clues to guess the meaning of an unknown word or even stop reading to use a dictionary. In fact, intentional learning and incidental learning should go hand in hand. To illustrate how these two approaches supplement each other, let us consider how learners develop L2 vocabulary. A large part of one's lexicons is shaky. That is a learner may find some words and phrases familiar but s/he cannot recall what they mean. It is my experience as a learner that explicit learning with a vocabulary book helps expose a learner to new words, many of which are infrequent, while ER helps retain the meaning of such words and phrases he has already encountered through explicit learning. In other words, explicit learning is necessary to increase the vocabulary items that look familiar but the context provided by ER may supplement explicit learning by getting these items firmly rooted in the brain. Figure 1 is a simple model I often present to students to illustrate how intentional learning and incidental learning supplement each other.

In this paper, I review the past research and examine pros and cons of ER. While I am a believer, I am well aware that ER is not the only method. The questions raised are to what extent it works and how it works best. I examine these issues from theoretical and empirical perspectives respectively. Then I present ER practice I engage in and discuss what difficulties teachers will face in getting students to read more and offer some possible solutions.

2. Theoretical Views on ER

2-1. Theoretical Values of ER

ER is very student-centered learning where each learner can choose what s/he will read. The teacher plays a non-dominant role merely advising what to read and gives assistance only when needed. It is unconventional in a sense that students in class do not have to read the same textbook. Instead, each of the students can read different text while they are in the same classroom.

The proponents of ER argue that it is a better way to obtain comprehensible input. According to the Input Hypothesis (Krashen, 1982) what is needed for L2 acquisition is language input slightly over each learner's comprehension ability. In a large classroom, however, there is a considerable variation in terms of proficiency among the students and it is difficult for the teacher to fine-tune the right level of input for each of them. The best solution is to let them choose what they read according to their proficiency.

Another reason to support ER is that it is expected to promote learner autonomy. It is students who make decisions as to what to read. They can also decide when to step up and down the level of reading. Ideally, they are not forced to read any particular text and they can stop reading if they do not feel like it. This freedom will lead students to meta-cognitively monitor their learning and let them become autonomous learners.

The third theoretical reason to support ER is that it develops reading fluency (Nation, 2013). In Japan, in particular, where most college-bound students are required to take the National Center Test for University Admissions (NCTUA), reading fluency is a crucial skill they need to develop. The NCTUA is 80 minutes long and consists mostly of reading comprehension tests. However, most high school students in Japan lack reading practice. It is estimated that a typical student merely reads 40,000 words in regular classes in their six years of secondary school days, while they have only 80 minutes to complete a 4000-word test. (Table 1)

Table 1.

Junior High School Year 1-3	7,198 words
Senior High School Year 1-3	33,984 words
NCTUA (2016) 80 minutes	4,288 words
Harry Potter 1	76,944 words
Harry Potter 1-7	1,070,662 words

www.awesome-english.net/progress/enjoy_english_book.html

www.keinet.ne.jp/taisaku/center/english.html

www.seg.co.jp/ss/

The Extent to Which Extensive Reading Helps

Jun Harada

1. Introduction

The simple act of reading a great deal of text, or extensive reading (ER), can be a new way of second language (L2) learning. Japan Extensive Reading Association was established in 2002 and there are a number of universities incorporating ER in their foreign language courses. This trend is not limited to Japan. There are a number of researchers advocating ER in L2 learning such as Krashen (2004) or Nation (2013), Ellis & Shintani, (2013) just to name a few.

Kunihide Sakai was probably the first to advocate ER in Japan (at least he claims so himself). It was at his workshop (2003) I attended more than a decade ago that I was first exposed to this new approach. The room was packed with English teachers, which reflected the high level of public attention ER had already generated. His lecture was full of interesting data with many success stories, where his students after merely a few years of ER practice, got a high score in the TOEIC test or successfully passed the entrance examinations to very prestigious schools. Yet, Sakai's talk was also full of provocation. He passionately insisted that ER was 'the' right method and that traditional grammar instruction or even interactive classroom activities had no place in foreign language teaching. In the end, his workshop turned into a harsh debate with some attendees who expressed disbelief. I myself could not help feeling that Sakai's view was one-sided, exaggerating only positive aspects of ER.

Then a few years later he published a book coauthoring with Minami Kanda, a former classmate of mine. This is when my doubt dissipated. In fact I was INTRIGUED with the ideas presented there. The three principles of ER for example, state learners should 1) refrain from using a dictionary while reading, 2) skip parts they do not understand and 3) put down the books they do not enjoy reading. The idea behind is that ER requires no hard work from learners and instruction (in a traditional sense) from teachers. It was totally different from what I was practicing. In fact, I once worked for a prep school where there was a strong belief among the teachers that students needed to know grammar before they could start reading. I was struggling with students who hardly learned anything out of my grammar instruction. To me, ER seemed like a promising alternative to traditional teaching.

Ever since then, I have been a strong proponent of ER and conducting seminars advocating ER myself (Harada 2014, Harada, 2016). However I do not believe ER is the only method. I do not forsake grammar instruction or conversation practice.

I am not successful getting my students to read extensively. When I give them an ER assignment and have them report what they read, only half of them submit the homework. When I interview some students and question them on how much they have read, most students answer they do not read anything besides classwork. I am under the impression my championing for ER is not convincing to students.

— 執 筆 者 紹 介 —

則 竹 雄 一	………	社 会 科 教 諭
柿 原 和 宏	………	国 語 科 講 師
柳 本 博	………	国 語 科 教 諭
原 田 淳	………	英 語 科 教 諭
川 部 瑠 衣 子	………	英 語 科 教 諭
青 木 輝 憲	………	英 語 科 講 師
兼 田 信 一 郎	………	社 会 科 教 諭

紀 要 委 員

兼 田 信 一 郎 原 田 淳
高 畑 義 憲

研究紀要 第 29・30 号

平成28年 3月25日 発行

発行者 東京都文京区関口 3丁目 8番 1号
獨協中学・高等学校 紀要委員会

印刷所 東京都北区王子本町 2丁目 5番 4号
株式会社 王 文 社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 29 • 30

2 0 1 5

Contents

Articles :

Basic study of Taiko land register (太閤検地帳)
of Echizen Province in Keicho 3rd (1598) ... Yuichi NORITAKE ... 1

Is There "Others" in This Class ? :
— The Significance of Reading the Literature in the Classroom
..... Kazuhiro KAKIHARA ... 29

Educational Practice Report :

We'll shake Shakespeare
— TOKYO, Seoul, and Vnice Hiroshi YANAGIMOTO ... 43

Articles :

The Extent to Which Extensive Reading Helps ... Jun HARADA ... (1)

The Glorious Days in Tara May Have Gone with the Wind
But — Review of the Masterpiece in Terms of Humanity,
History and Pedagogy Jun HARADA ... (13)

Thou and Ye in *Emaré* Ruiko KAWABE ... (29)

Immigrants and Touristic Images of International Tourist Cities
— A Case Study in Nice Terunori AOKI ... (39)

Translation :

Cao Lüning : Yumen Huahai Suochu 《Jin Lü Zhu》 Chubu Yanjiu
..... Shin-ichiro KANEDA ... (57)

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014